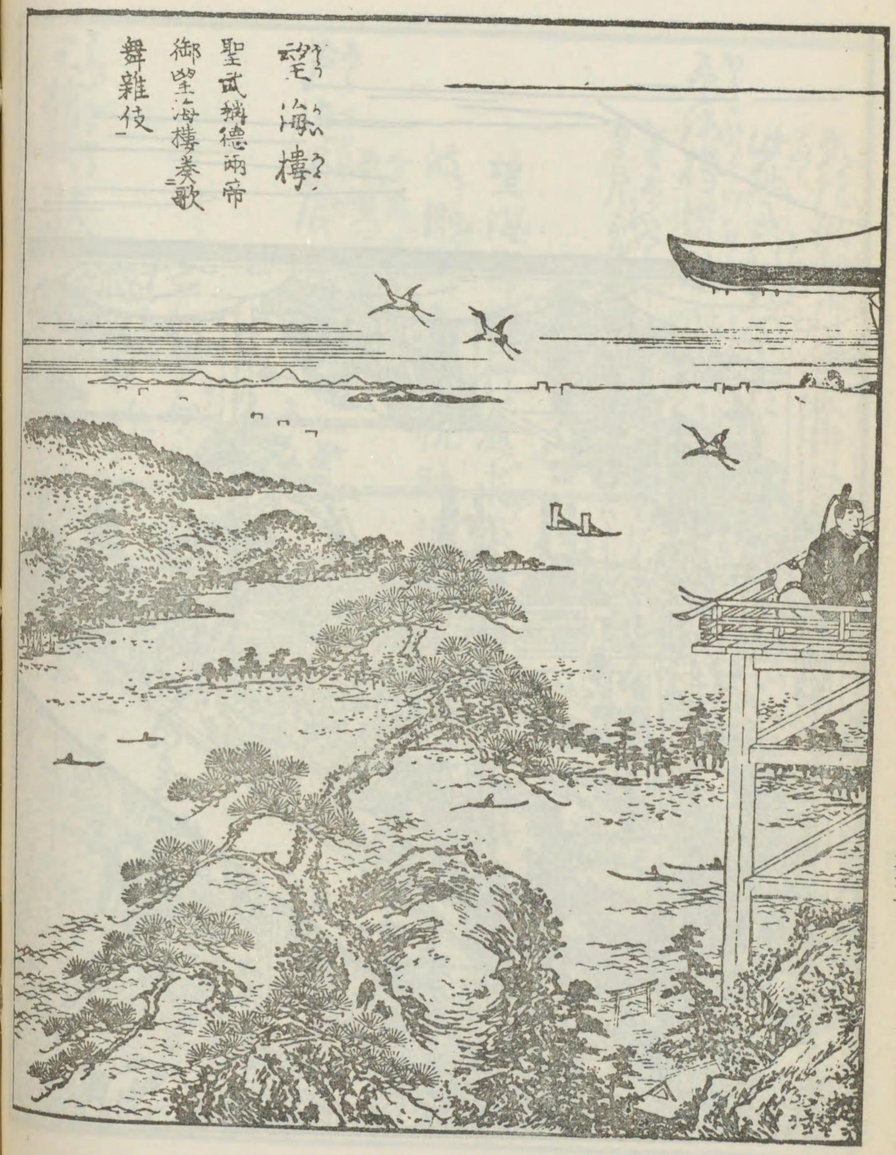


望海樓
聖武稱徳兩帝
御望海樓奏歌
舞雜伎

郭公山　姥捨山のきぬぎぬもかくやとおもはるゝ
うつのやまいたわしふみこえくるしきをりをもおもひいだすべし

絹王堂　三間四面裏には文字あまたかきつけにおほき礫石あり日最澄法師達磨多陀利伽藏多攜の焼治瓦濺
れ東國にも文字あまたかきつけにおほき礫石あり日最澄法師達磨多陀利伽藏多攜の焼治瓦濺
絹王の御時の物なるべし

多賀城　無名氏
末の松山波こさじとは
かゝる所をよめるなるべし

壺碑　宗祇
苔むせる石ぶみあれば
年をへて都の鳥も
なかざりけり

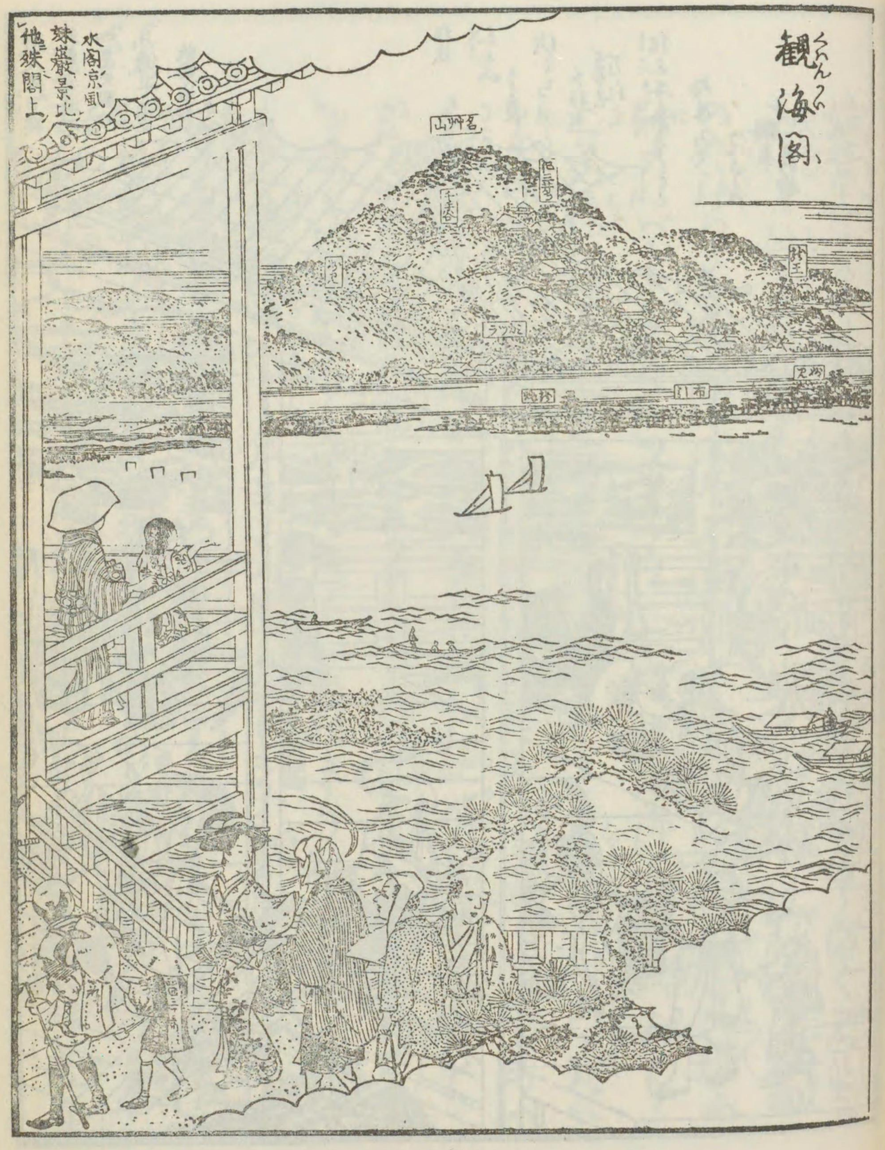
唐門　淡々
千代ふべき松のあるじや
傘の雨

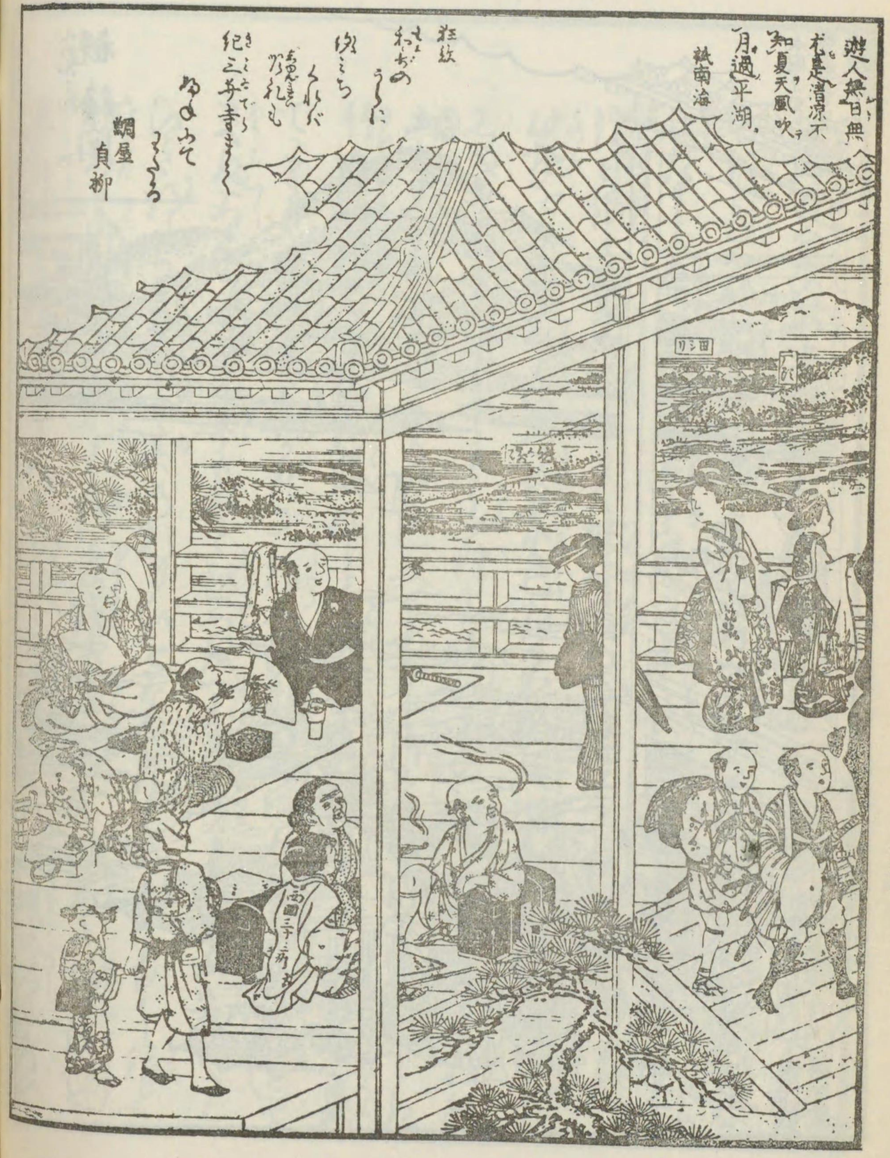
海禅院　塔頭　自然石階檜　洋殿

三十三間の御追福にとて
東照神君
寺院を上皇の離宮より
建立ありしとぞ
御代長閑に
治まる
ためしなるべし

公卿百官の所書引用書を始め諸国より集め
の引用書紳書二十一萬とすのうち実境の下絵もの多くを
収むるに李漁の傳實を以て渡辺
清日濱上人おのおの珠背山の説とをもつて
地とてもとくつつ景色なり
きものちんとにはつくるもの
山舟木のものおもしろきもの
竹本舟橋のもの
てこころ考ごもものだ又信
まなものとくまりやくの
ひとりうたんの夫のもの
雄石よ御注号を刻ごうを
界経の神絵の

観海図





妹背山
お国
の入浴
三つの橋
和歌の浦
和歌山
絶妙
下民の拙筆
関の戸
牡鹿
玉の
妹背山
雪霜
雅名

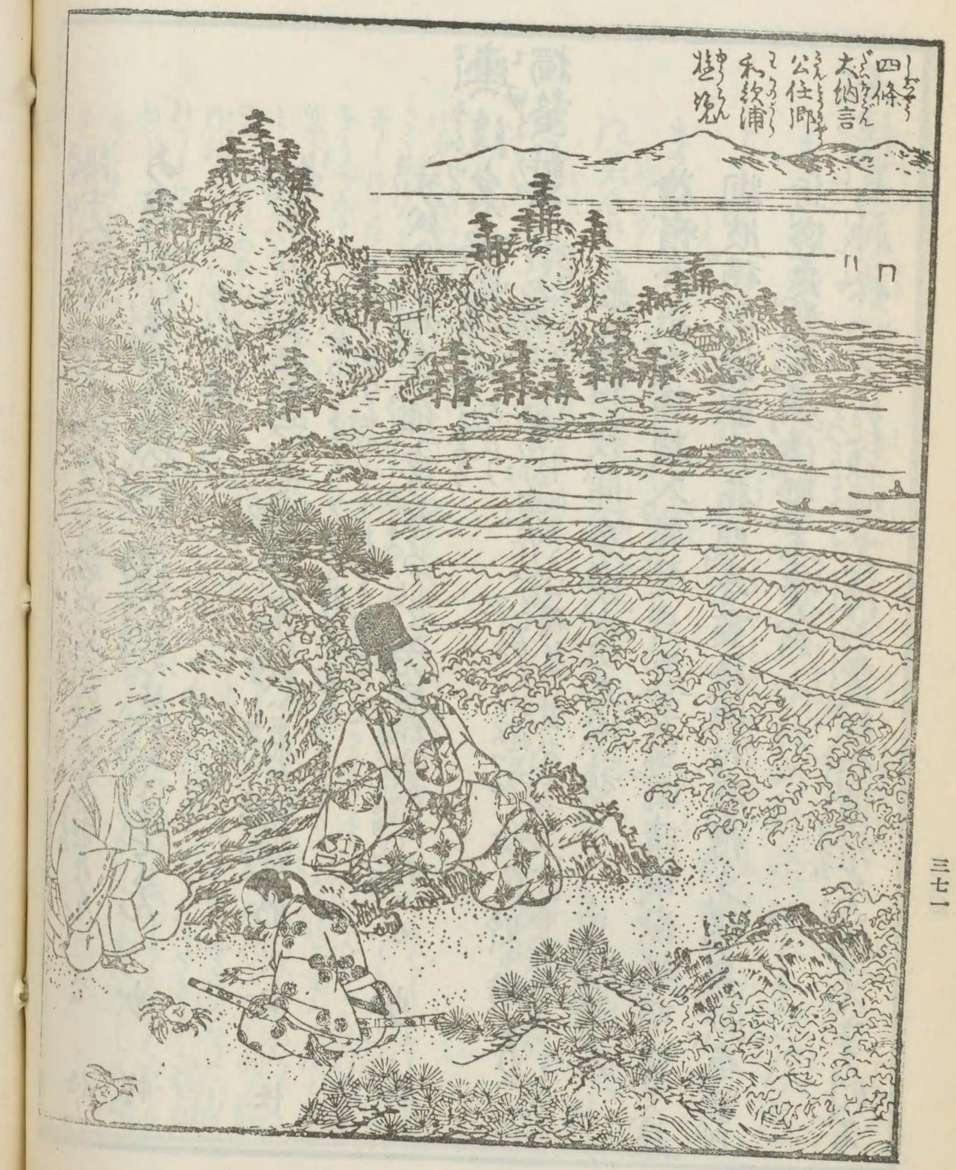
おもふところなくこれ亦さるゝ混雑
しそを辨ずるのみ遺憾多きものならずや

丁未中秋與諸子泛明光浦

祇南海

明月何月不二三五一天時何歲秋不中唯此良宵清影多今年
幸又無颱風煙消雲盡江天晚斜陽西沒金霞紅凜然明鏡
髣可鑒露灑桂香蟾宮此時良約不愆期此夕良會四美
同地上何處無好山天下何處無好水不知江南山水美山
秀水明緑雲裏琴浦洲前白練閑玉津宮外金波起雙々宿
鷺依苔磯行々新雁落蘭垣城中何人不上樓城外何人不
覺舟不知誰家能望月何人能解遊賦成空想西園蓋
繁絃急管徒嘲啁豈如文場人如玉倚欄水閣看白鷗半夜
長風天上來吟鬢颯々不可留月華高昇金剛峯直命蘭摧
枚中流與逸星槎凌霄漢身生羽翼度瀛洲浩飲酣飲出塵

埃岸上人言李郭傳啣杯向天仰大笑明月落杯河影滄使
君特贈紫錦鱗兼之玉醪紅新筍高僧亦須香積厨石花雲
芽秋萩桑住期如此人不醉嫦娥笑人空白頭不情十千盡
一復斂為君掃盡萬古愁君不見治兼亟相謂閑天府南渡
衣冠鄉夢冷掉月淡島及明浦借問人與月孰有無唯聽蘆荻風今古人生歡樂奈老何悵望斜月沉江
波嗟我安得虹蜺長萬丈躡俳天揖挽回玉轡於金樞之何
妹背の海苔 此一夕久野君馳使賜二鯉魚及美醴一養一
珠手隆上人聞テ乃船過二門前一贈行厨ヲ
岸乃祠 往歸ノ舟中興逸ノ嵐ノ半ノ嵐モ半ノ嵐モ又
こゝ上古玉津岑の神祭れ大神幸ありし浦廻の旧跡をう
永祿年中まくいの祭日此山麓へ神輿渡幸ありる松ノ風



北村の手筒區

神樂舍　神奥ハ明和中北御關白殿下の御書請

石藥双巻　正徳四年　霊元上皇御神前常夜燈御銘御成就書寫奉納

月双巻　神亀元年戊子冬十月五日幸紀伊国時山部赤人作歌一首　短歌

万葉　安見知之　和期大王之　常宮等　仕奉流　左日鹿野由　背上乃

所見奥嶋　清波瀲　風吹者　白浪左和伎　潮干者　玉藻苅管

神代従　然尊吉　玉津島夜麻

返哥

奥嶋　荒磯之玉藻　潮干満　伊隠去者　所念武香聞

玉津嶋　礒見尓伊座　青丹吉　平城有人之　待問者　如何　作者不知

玉津島　礒之松風　時吹者　其音尓和久　人乎待香母

玉津島　見之浦浪　間無　吾恋許曽　益尓思者

、　　玉津嶋儀之裏未之真名仁支爾保比去名妹鯛喰　人麻呂

古今　和田の泉よりも寄する浪のまもなくもみまくのおほ〳〵しき玉津嶋かも　よみ人しらず

後撰　玉津嶋入江とぐ船のうらなれや　なし

金葉　玉川の岸うつ波のよるよるもふかでまほしき玉津嶋かな　俊忠卿女

續後　人ならばとはましものを玉川の岸のあけがの玉津嶋かな　參議為氏

續古　いくかうれぬ浦風ぞふく玉津嶋なぎたる跡の波の下草　損政第大臣

同　かひてよりわれもの浦ぞおもほゆる幾度しぼるあまの袖かな　為原　隆信

續古　幾度しぼるあまの袖かな　前内大臣

玉葉　三代まで仕へ今のなもうれしき玉津嶋かな　後堀河院御製

續千　ふりそでにおもひもおろす玉津嶋なみの秋風身にしむころを　亲憲陰卿

同　かりそめの浦ぞともなく玉津嶋なれこそ千代の数もつもらめ　惟宗忠景

風雅　玉津嶋なみもおよばぬ浦ながらあまつ空なる月の影かな　源親長朝臣

新千　玉津嶋やそ島かけて漕ぐ舟のあとまで匂ふ春の曙　津守　国道

新拾　なにはえの芦のかれ葉に風さえて霜ふきまよふ玉津嶋かな　信実朝臣

新後　老の浪おなじくもあらぬ我が身かな玉津嶋にも秋は来れど　大僧正実海

同　和歌の浦に塩満ちくれば潟をなみ芦辺をさして鶴鳴き渡る　権大僧都覚尋

新續　春もいま三代になりぬ玉津嶋あまの釣舟こぎ出でて見ん　鹿園院入道前太政大臣

同　春もいま三代になりぬ玉津嶋あまの釣舟こぎ出でて見ん　後光厳院御製

文木　あしべこぐあまの釣舟とまりせよ波も玉津嶋の入江に　前左大臣

同　玉津嶋みるめの浦よりこぐ舟のあとまで匂ふ春の曙　季　雄

同　玉津嶋入江の秋の夜の月　後九条内大臣

同　玉津嶋入江の秋の夜の月　右兵衛督為教

同　かくこそは方こそなけれ玉津嶋入江の月　芸侯秀尚

法印高家
権大納言忠良
湯食右大臣
俊　頼
永　縁
後京極摂政
大政大臣
家　隆
家　長
行　家
忠　定
俊　成卿
九条関白良経
頓阿法師

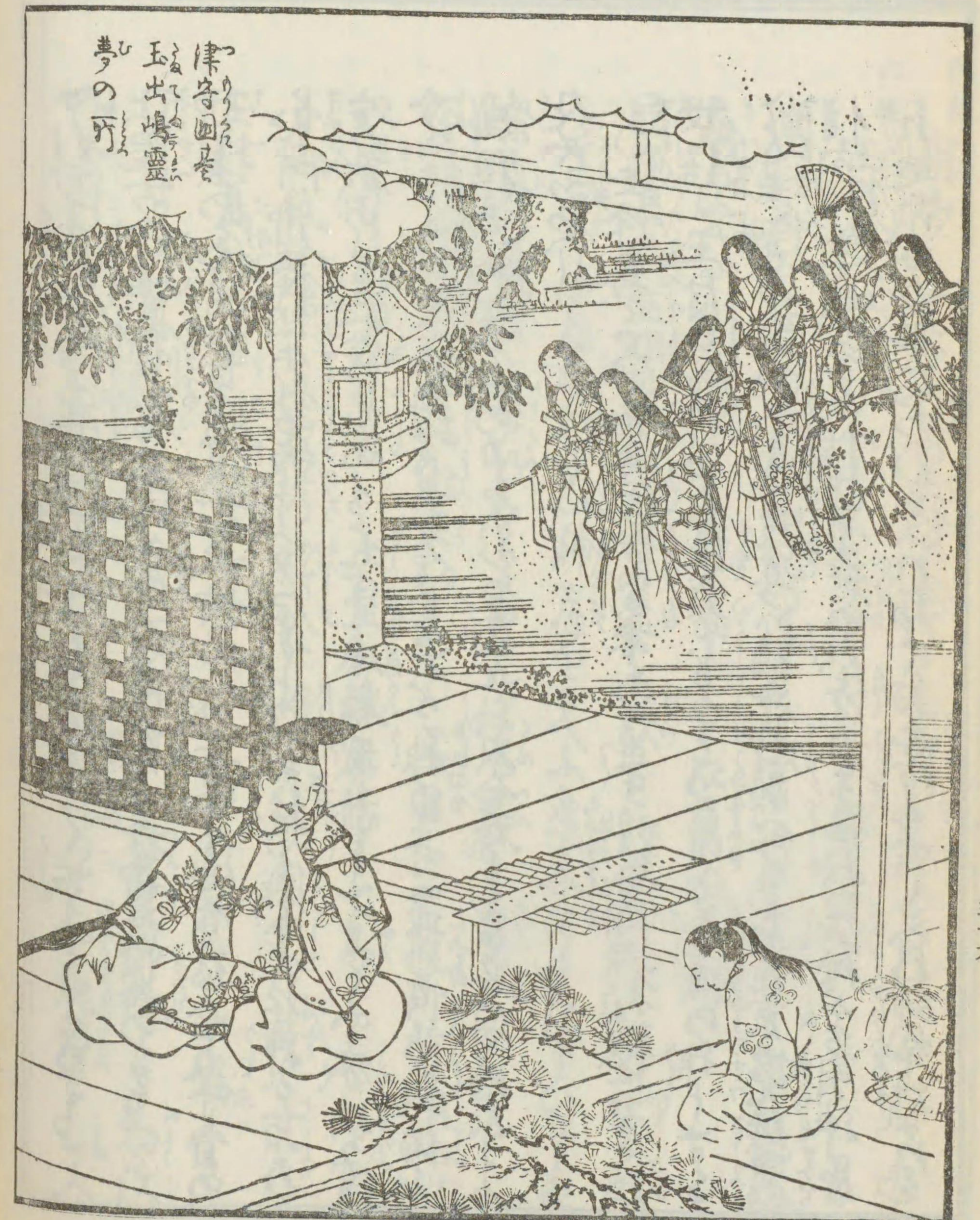
栄　雅
宗　雅
前右大臣
源　朝臣
後柏原院御製
実　隆
牡丹花
耕　雲
春宮大夫師兼
天台座主
相　模
永久百首
家集
千首

玉津嶋六人の小松くもりくの雪しも消ぬ常盤の
當社神主座の本縁旧記のほかに傳へたるものなく社頭の額
殿をはじめ餘の御殿もしく既に尚しくた黄治年間
國祖君前亜相公旧趾乃至盛衰を歌ひおくたる寄人歌
をはじめ〳〵多數むかし神事をこゝに建立ろうとなりこゝた
祭奠乃儀式を其乃作ろうもろんが為ぬ寛定四年
正二護院宮二品法親王たよりく其旨
上皇感ましくて勝く社務宣
下部氏大夫多年乃勤労を賞ろれ式と挿ろうべし國史に載る所ろ
玉津島社の事故数多き中にこゝろ〳〵抄出ぬさしあたり
禁裏御所ろ勅使
ろ以来例歳三月九月二の卯日
をもろ〳〵もい社務ぬくたく遊社のくと執行ぬ

さんぬる秋二時乃御祭礼のゆくたろうそのち
上皇古今集御傳受のこと
御製のれ哥こ首拝ろべし公卿ろ詠哥四十七首和合五十首の
和哥御奉納あり已上ぬさしあたり絶く久しく社がたろ
宮居あくこと荘厳のろさ
やく〳〵玉出者の久しく有ころ社の上哥悪ふろく雖然ふ
國很君御再興の力なしくやうこそ

○玉津嶋ろ
称呼古今変革ある事

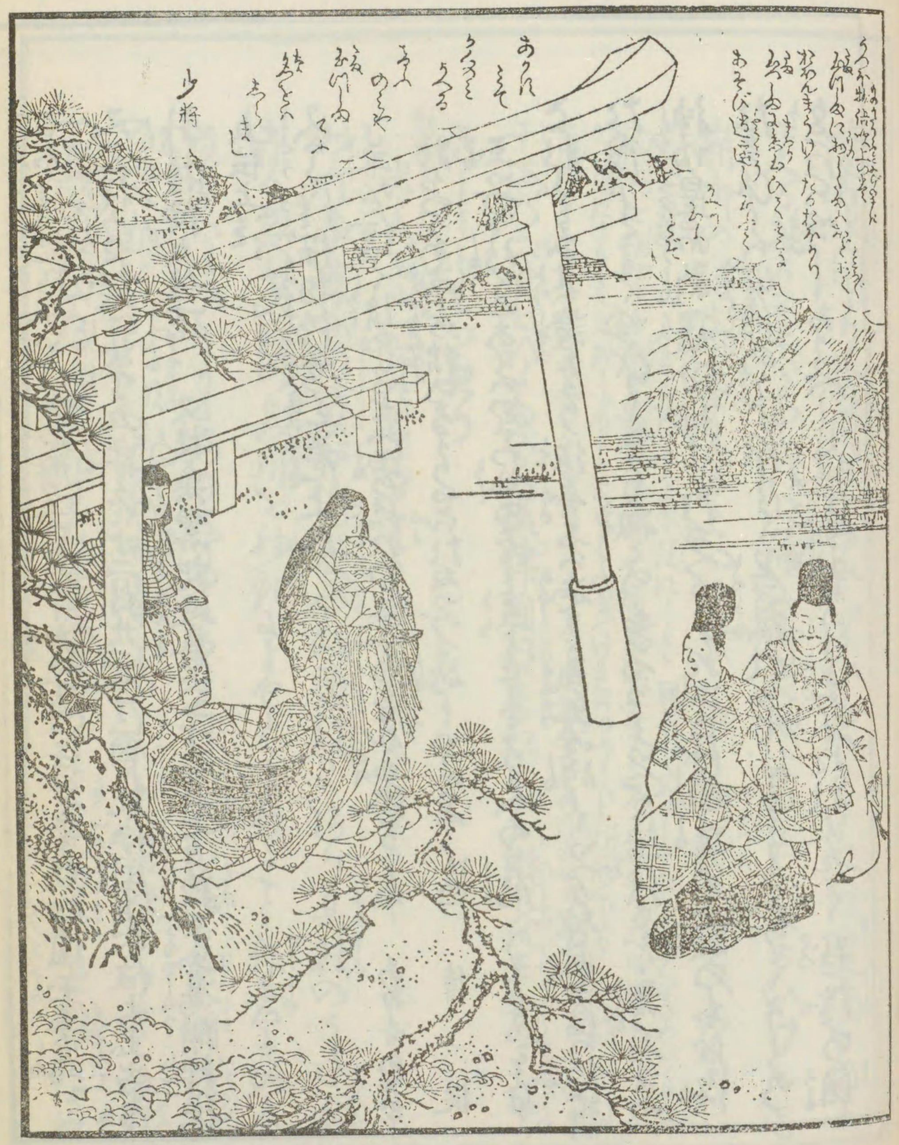
世俗ふ玉津嶋の神と表通旅たろうくのくれ哥の社ぬする
こと共謂ろうたくおろ抽中抄顕昭ぬ
住吉神主國基ぬ住吉の事ぬ
延喜神名帳四社い玉津嶋神昇
列通旅ろうぬ従く好ぬ今ろこと又諸神社ぬ



津守國基

年ふりし老も見えて和哥の浦よりも世にあらはれし玉津嶋姫

是は住吉神宮寺の東に浄土寺あり國基堂と建立のとき壇の石を求むとて紀伊國に渡りて若浦の玉津嶋神社ありき石を求めけるに衣通姫のこゝろと面白がりたまひし神も汝が跡をあたへんなりとの夢の告にて國基は歌を讀てまゐらす其夜の夢に唐鞍上て裳唐衣きたる女十人ばかり出来て覗きけるを慶びて國基もとめたる石をもちて一石あり此石をもちて一度に十二顆は改めて壇の飾りにしは封をし又小畠准后親房御古今集序注は或抄とし云五十八代の御門光孝天皇御悩ありし時帝の御夢に赤き衣きたる女房きたりて立て文もし世をみしは其名も知れぬ和哥の浦波と此歌を誦しおはします帝御夢の中に誰人ぞと問はせ給へば


少将

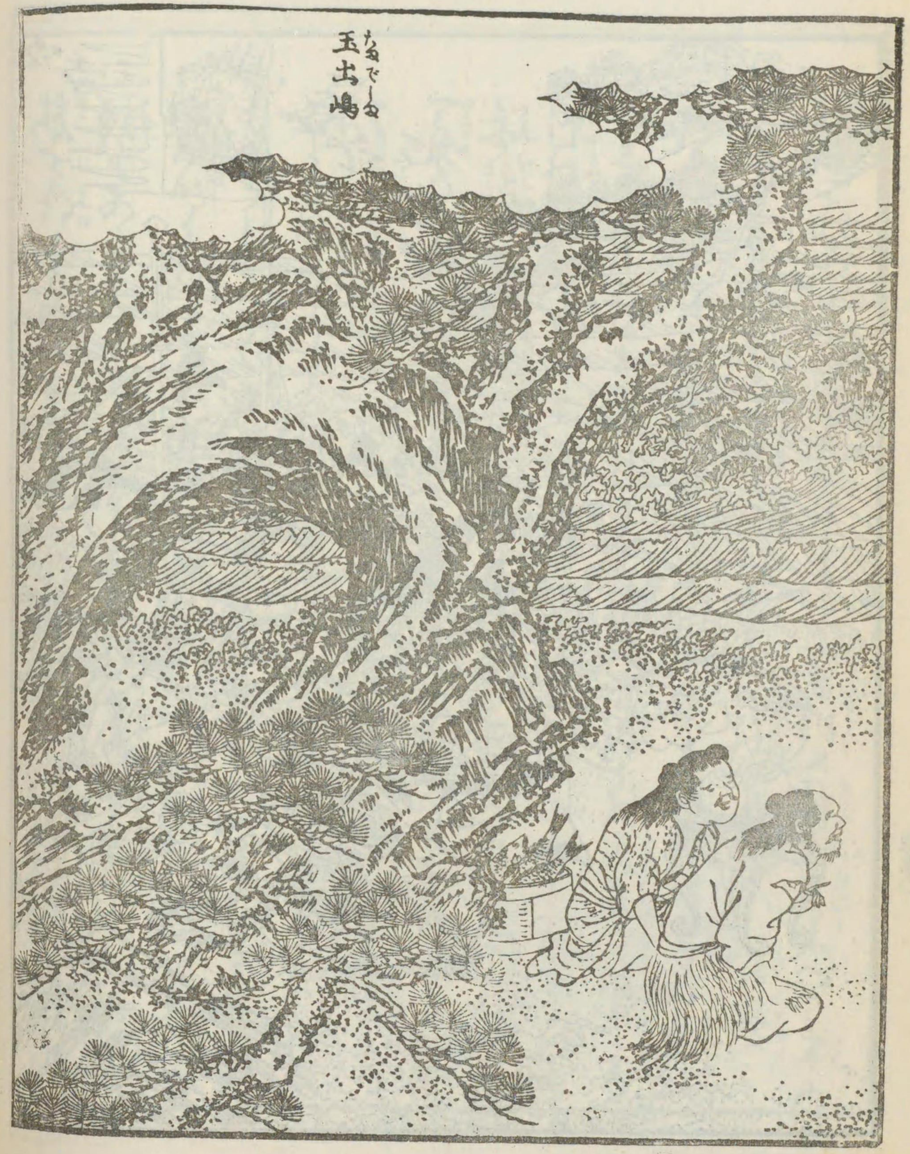
日本紀相武天皇延暦二十二年冬十月壬子幸紀伊国正二位上玉出雲
又二代實録元慶五年冬十二月九二日丁酉紀伊国正二位上玉出雲
神授従五位下　又特桑門記延喜二年二月七日授正五位明神従
五位上云々
又宇津保物語吹上巻上云
年を経て浪のよるてふ玉のたちかへりなほつゐに幸ひ浪のよりはあふ
玉づさとはあふにつけ浪のたよりに延て
これらみな其證なり但今世に延て
なべてさまく呼びならはせるなるべし
神功皇后新羅を征し給ふとて干珠満珠の二顆のもち給ふ
なまじひの山幸のごとく玉出雲ともいふ
名にの呼びなべて玉出雲凱陣ともいふ

待従

勢古水門より當国日高郡に往給ふもまた紙霊珠ありと
まうす地ありてこれより南に山陵あり
崩御の後その林奉るといひ
干満二珠のこと見えたり
の事を掲げて海水逆風天運ありと
干満二珠をわたつみの掲津國住吉に納らし給ふ彼
きこしもつおう
新治　津守國平
君が為玉出雲に浮ぶ
此千事書き住吉の神の
ありあけよりもとくその地のみ所と社司
ありとこぐくうなひ合社頭花とうち其社のうち合
の池に納らし給ふ所以ありて明神といひ
一首ここへつらなりぬれど住吉の条ひとつ

一社底筒男命 二社中筒男命 三社表筒男命 四社神功皇后 又一説一社大神 二社宇佐姫
三社表筒男底筒男中筒男 四社神功皇后 又一説一社大神 二社田霧姫 三社表筒男中筒男
底筒男 四社神功皇后 又一説一社伊勢大神宮 二社八幡 三社住吉 四社玉津嶋 日本紀
私記云神名帳曰摂津国住吉郡住吉坐神四座 並名神大月次相嘗新嘗 先師
説曰称四座者神功皇后坐別殿故歟 中ら河社にも此説の如くあり 是ぞ此の説とて
雑へ考へつゝ住吉四社の内一社はなほも神功皇后にぞ坐ましける
と疑ひなし さてその神功皇后を一説に玉津嶋として 又玉依
玉津嶋明神とも申せるは 紀伊国名草郡玉津嶋の社は稚日女尊と申す也 また云
非なることぞ紛らはしく惑はせる事あるゆゑよく考へてわかつべし さあれば住吉に祭れる神功
皇后はもと玉津嶋に坐ます御神ならねど その三社を
皇后御在世に参りたまひし由緒あるをもて 皇后崩御の後
玉津嶋の御神とも称へ奉りて四社と申しまつるなれば是すなはち
玉津嶋乃御神と共に神功皇后をも申しまつる殊さら

住吉玉津嶋二所ともに古来十三日と神主の白し卯の日と
もし衆人参詣することもえよりはじ神にまし西へむかふ
ぞやこれはかく思ひて住吉に玉出る玉出の岸あるは彼皇后
を祭れるより起りし由来の名ぞかしここにも呼ぶ事有る
べし 或説に手前の二体は紀伊国日前宮にねむしくいふこと
則古にはたゞ人にしてなきもあるべし 日前宮いはずや名草の浜の
南浜の岸に在ましく 旧社を其比の摂社なれば彼もともと
旧社へ御参りし給ひし 日前宮へ下りましてむかひ給に
まじりし其関係をも称へ得らるるにあらず 彼の泉州堺の館記の地にありし
如意輪殿と称まつれるよりみえ皇后長門豊浦にてあそばしし
御名漁のもとに混じておやまりたるまでなりとなりけり
高麗の豊浦に坐まれる御神なれとかし豊浦の御神にも
称へなん 住吉もまた摂津国にあるところの地名なるを長門国豊浦にも祀られ 国府河辺郡に住吉の神にいまつれる
地の名なのらせるとすれども 然るは皇国語をしるしく
その旨なすなへとなるたぐひなり


玉出嶋

月 玉津嶋社

百世経蹤何處尋。明光浦畔古宮深。
載蛸蛛音。網住允恭天子心。

月 洞玉津嶋

江山一望画図中。勝地相連趣不同。白石参差雲
海寺青松掩映玉津宮。鶴飛蘆渚潮初至亀曝
苔岩路自通収有高毎堪戴酒。探得何用限西東

林羅山 近考

江邨綬 北海

家集 玉津島岩根のすゝろなる波の尾ゝもまのけわうの浦波 源兼昌

狂歌 一條内府公

思ひきや古むしろしく浦の苫屋に旅寝する身を 芳水

月 季吟

其角

玉出嶋

後古 わすれ浦ふる藻塩やの名を集てぞ玉もかりける 淡々

後拾 雫雨よ長通姫ころ 素顔

玉葉 藻屑もいのちひろひあつめ玉津嶋 尼唐 梶亭

後千 もゝかはやそらんわすの浦やひろひそ 大上天皇

月 芙蓉やしら浪埋ゝ玉拾 後花山院入道内大臣

家 澄岐

月 わすれ貝かたみにひろふ玉津嶋 惟宗忠景

同　わすれ草つみし玉藻をおもひいでてむかし
　　恋
雅　昔の浦人なれてもとりつたへ藻屑を拾ふ
同　昔今ひろふもかひや藻屑にもやどる
　　千
新千　玉ぼこの藻屑をかきし昔の浦よ
同　玉ぼこのかの大御代をかけてしも
同　なるとをやそ古のあとをたづねても
同　わすの浦の波のしらべもかはらぬを
同　わすの浦や昔人もこゝに来て
新拾　昔浦にこぎ出しあさりの
同　わすの浦に玉ひろひてみしも
同　みくまの浦にこぎ出しあさりの
同　君をおもふ玉藻もみるを
新続　おなじ名の浦もわすれぬ千代のことかも

鳥　氏
大江定時
従五位上大政大臣
建知門院
徽安門院一條
等持院従一位大臣
尭　空
後光厳院御製
法印定照
権西室ニ入道
従二位大納言
家　隆

藻塩草かきあつめてもいにしへの玉もおしけくもあるかな
名所　その昔浪にうつもれし浦
家集　わすの浦松に清ふるもむかし世のこと
後撰　わすれ貝拾ひしことも浦波よりうき袖の
新拾　わすの浦の玉ぐしげりし人もなし
同　あれはやと代ごとわすの浦よみの
　　あつめてもいにしへ恋し藻屑のも
　　く
同　あけてすむ人もわすれぬ浦波に
西堀　わすの浦うらとてもとふ玉のいろ
同　わすの浦よるべもしらぬ浪のうへに

頓阿法師
内大臣
栄　雅

家集　春の代のかすみの渚のもゝくさを　宋　雅

文明　もゝくさのいろに渚をよそへつゝ

雪玉集　玉ぼこの道ゆきぶりや春の浦人

月

よしあしのくさ分衣ぬれぬれて

手根集　春の浦は袖のみならぬ名にぞ

夕合　立ぬれてあまの浦こぐ袖の露

暁月　なれ行くまゝの玉ぼこの道

妹背牡蠣　名産にしき　他境の品物にまさる

つゝくるまゝに

妹背山　津名村より

石鼓堂　本尊釈迦佛脇士　文台書

不動明王　筆者不知

林泉風を遮雨うく　後

むしのおとも屋風をこゆ

ふきとうごとし千万の　僧へ乃文の書院より蓋

おなじまた絶頂よのそう

ふもとより月みつゝ

紅葉を生ず

行

紅歌枕原　天満宮の

いつゝおふすゝきの根ざし

後拾　雪後のおく

夫木　夕ゆふの春の塩干の

月

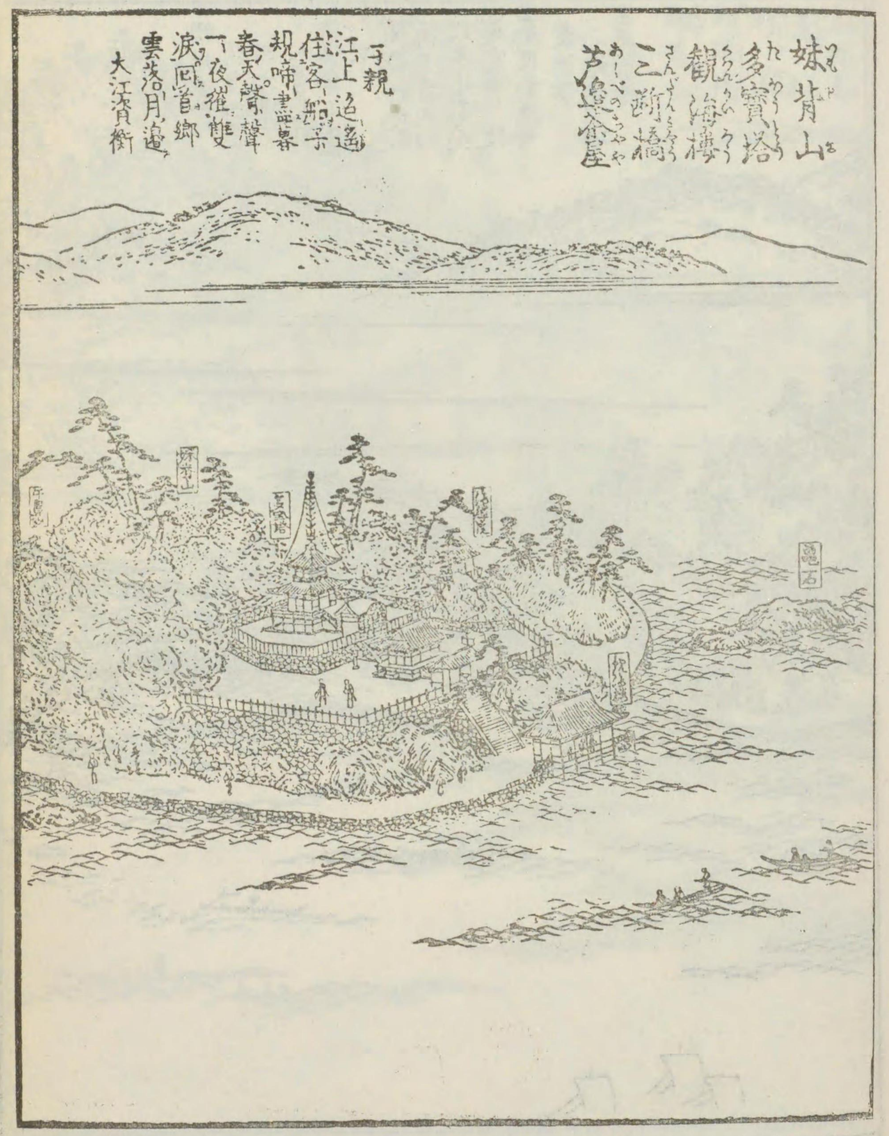
風ふくとみちもなきまの松原

西櫻　まの松原もなかくに

柏玉　塩干潟袖のみそ

雪玉　つゐに共松のねぶかの

妹脊山



妹背山
紀の川を挟んで相対する二つの山。
多寶塔
観海樓
二瀬の川
芦邊の宿屋

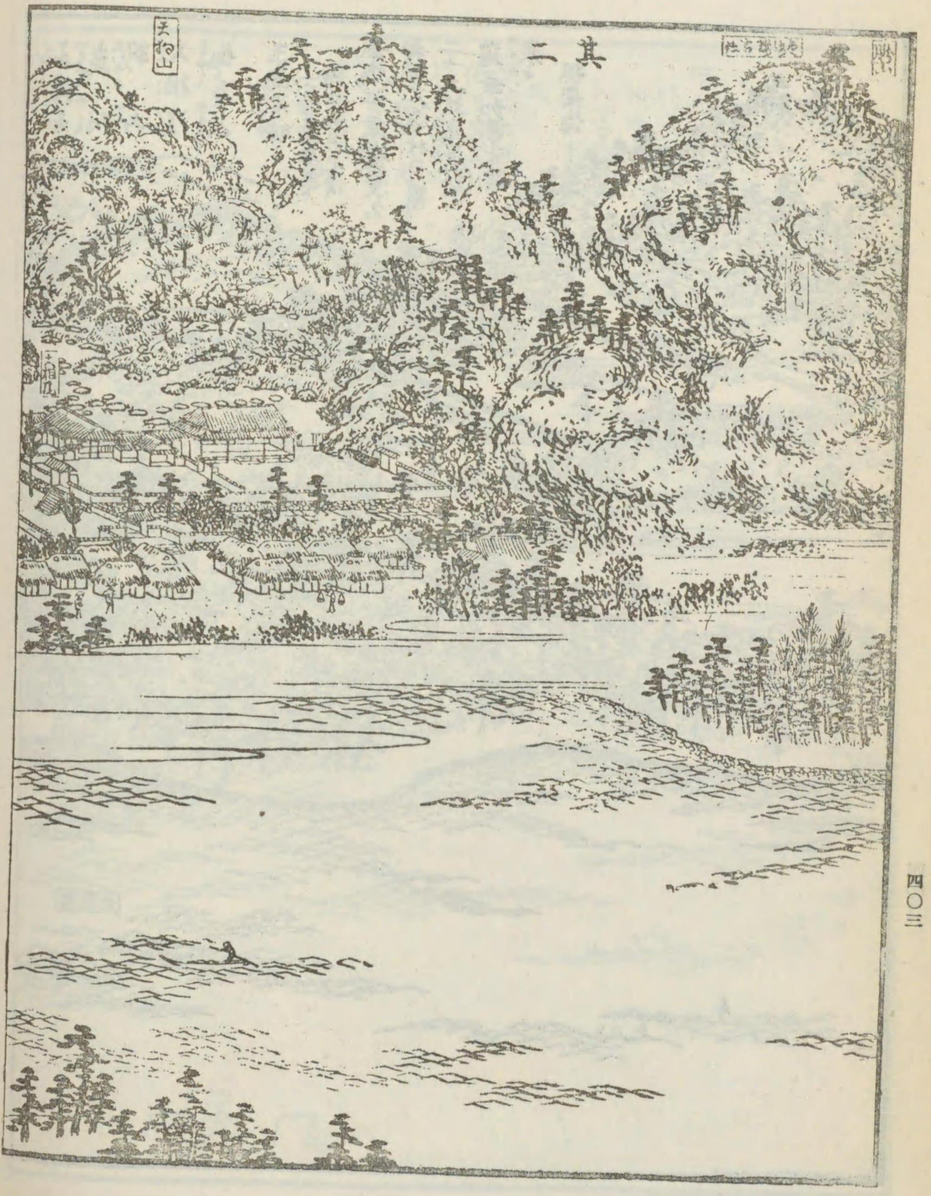
于親
江上迫遥
住客船宇
規帥書無暴
春天聲韓
一夜雅雙
淚何首鄉
雲落月遠
大江貧衛

妹脊山婦女庭訓

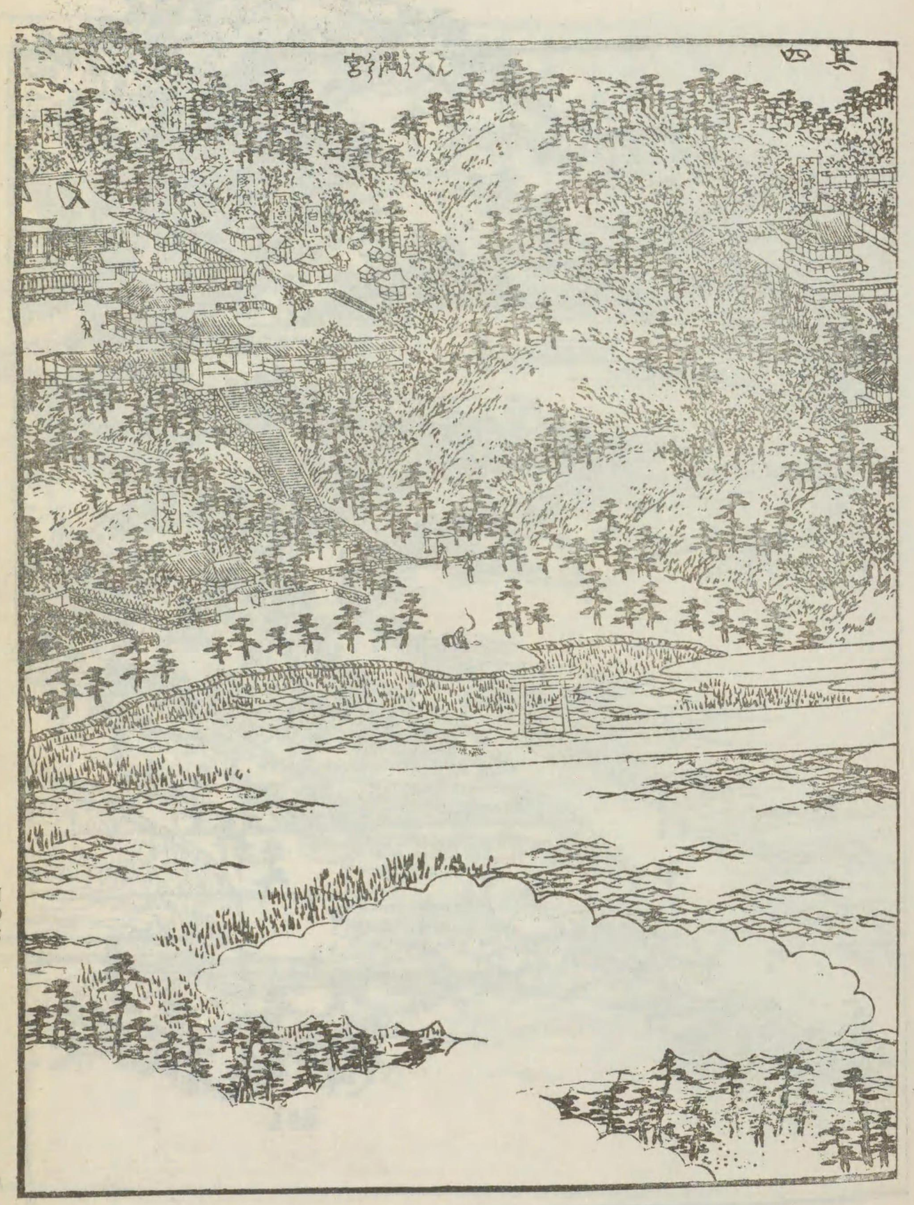
潮痕絶
人上採
磯間毛
以土之
寺産物
專妹背
歸
養壱

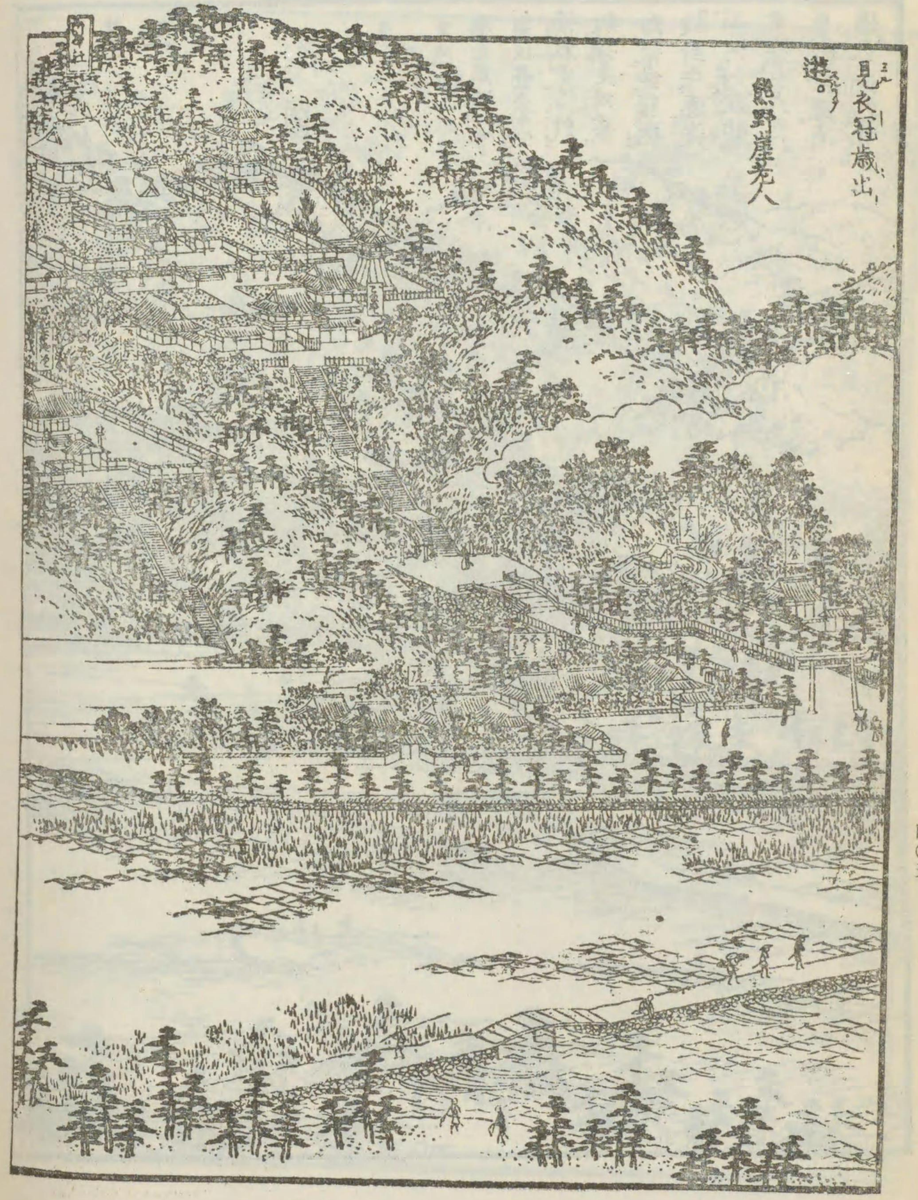
明光浦於
張浦一名
明光浦古
人有望餌
咏今有處
所
關信西風散
倚波蕭寒却
比葉花多曉
飛宿雁月侵
夢夜釣魚舟
雲滿蓑
祇南海

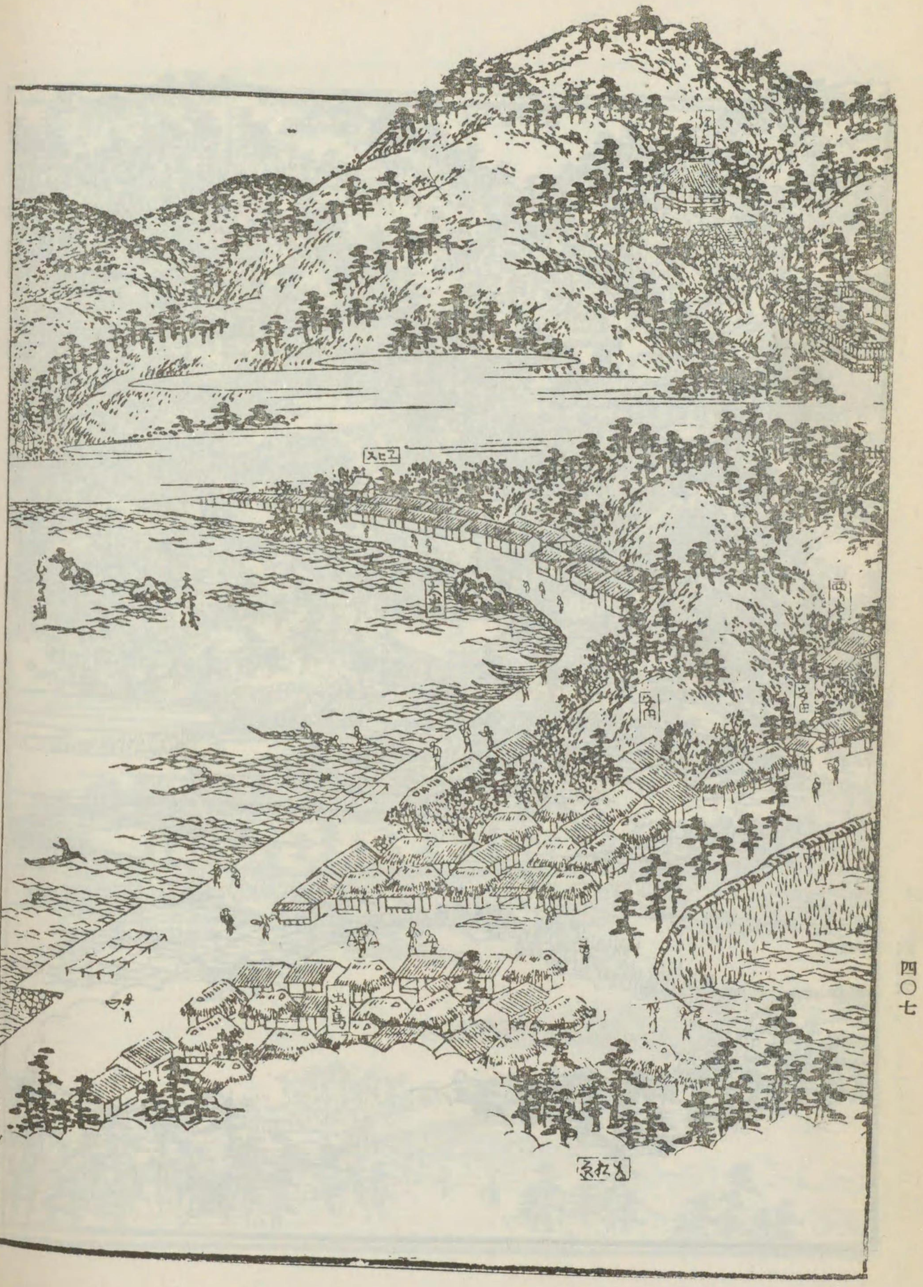
孤嶂秀
巖
明山
大相陵
仙宮
玉島澄曛
上有宮殿縣石下
澄江秋月大清
風鳴江章夜漫々
神女不還秋月圓
二十五絃空雁影
霜華如雪水雲
寒
祇南海



朝地震清海
氣収登來勿
傍彩雲浮艇
知泉是補蓂
齊常飽腹因
放野牛春滿
山河封永固
世縣日月照
皇猷生厚德
遍草如化蠁


其四
天滿宮


見衣冠歲出遊
熊野岸老人



永次浦

秋日遊覽於南
東南山水美。
未有老明光
悟乎數千歲。
奇詩無一章。
吾今徵雲月
斗酒攄衿腸。
安得李太白。
百篇共商量。

越南海

其五

題北歌浦圖。

明光浦上幾回去。
美景今入屢閱筆。
今日觀圖詩思動。
卷舒吟誦意倘。

伊藤蘭嵎

なごしもの松原田鶴の多く塩干のよく立飛ぶを
雪ふれば冬の松原埋もれく塩干ん田鶴の友を恋ふらん　雅永朝臣

和歌御宮　（那智西のそばにあり）　天台宗にして青蓮院門跡の支配なり

本宮奉拝御神三座　東照大権現　日吉山王権現　摩陀羅神

拝殿（鰐口三口）　唐門

神馬舎（白黒の駒あり）　楼門（楼門のもとに五大尊の十二天あり）

三重塔（本尊の西にあり）　護摩堂

薬師堂（大悲山天台宗眼大師の建立なり）

開山堂（眼大師の像あり）

御橋（手摺擬宝珠あり）　神橋の東

新財天祠（神橋の東にあり）

石碑　表銘曰。東照権現。華表創于元和二年。維明維堅。萬世無跡。（碑文省略）

下馬橋傍（下馬橋）

當　御宮ハ元和二年庚申の歳ノ神造営ハじまり比叡山大乗院眼大師の開山ニて神宮地ハ薬師瑠璃光如来ニまします。相殿ハ摩陀羅神おのおの日光山王権現ニ立てなのひこ小松ぶさく

東照三宮ニ称し奉まつる忠義ハ今さら追ふく思ひなるよ天文ハ亀の間天下授ケしハ武将ニ人ハ織田豊臣の両将ニ後よつてハ要事ハ屠ほふるとも忘れ武ハ備ふるとも文ハ練ねるとあさだ未発ひらかぬむとハ此ことなり

神君勃興そもそもハ干戈の霜と勢陽ニ消し長よ民草の栄と春風ニ靡ひてく

なごハ農桑ニもろ〳〵紅梅のゆくびハ枝梁ニ揮ふぐく

御徳ハ　御神号ハいちしるく

神影のてしまる海てそれ
亀の尾の緑の色をおくそひ路の
松のまろくれ草そ
申も恐多れとも麓より山上よ
朱の玉垣要深く林窓の
神威おのつと厳さ
三葉四葉さ吾を美をし
葺人無家の梢花い三元の山よ
志る暮春さ傷る松風へ
翠色いくぬ

神祭礼之車

毎月十七日　参詣者尺九月十七日神山の
外中家中四月十七日の神之礼い自除の

ぬるくろ神供所まく
あく都鄙の老る袖
る尺宝さ雑皆さるおうさ
御神輿の渡幸の当日辰の上刻
着くく礼之
拳をるさおさ
○長刀振　二人
○連尺　五人　○棒振　二人　○
笛　二人　○蛭吹　二人　○
此外口脇に美
の通人呂律の
幸の車囲
ちしれば琴
あくまで
もるく

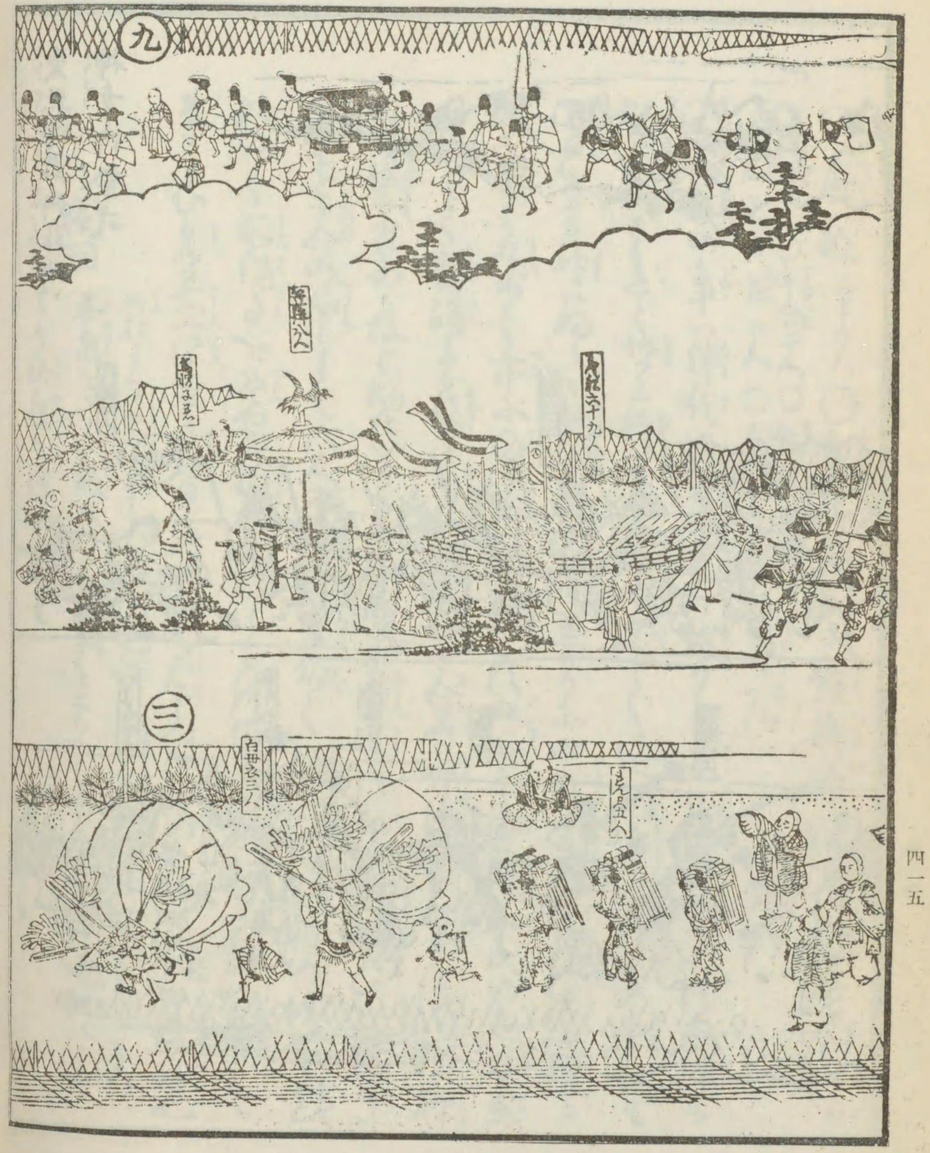
誠之惟
施の地も
惟と迩
嘗をつく幕と
はひあく

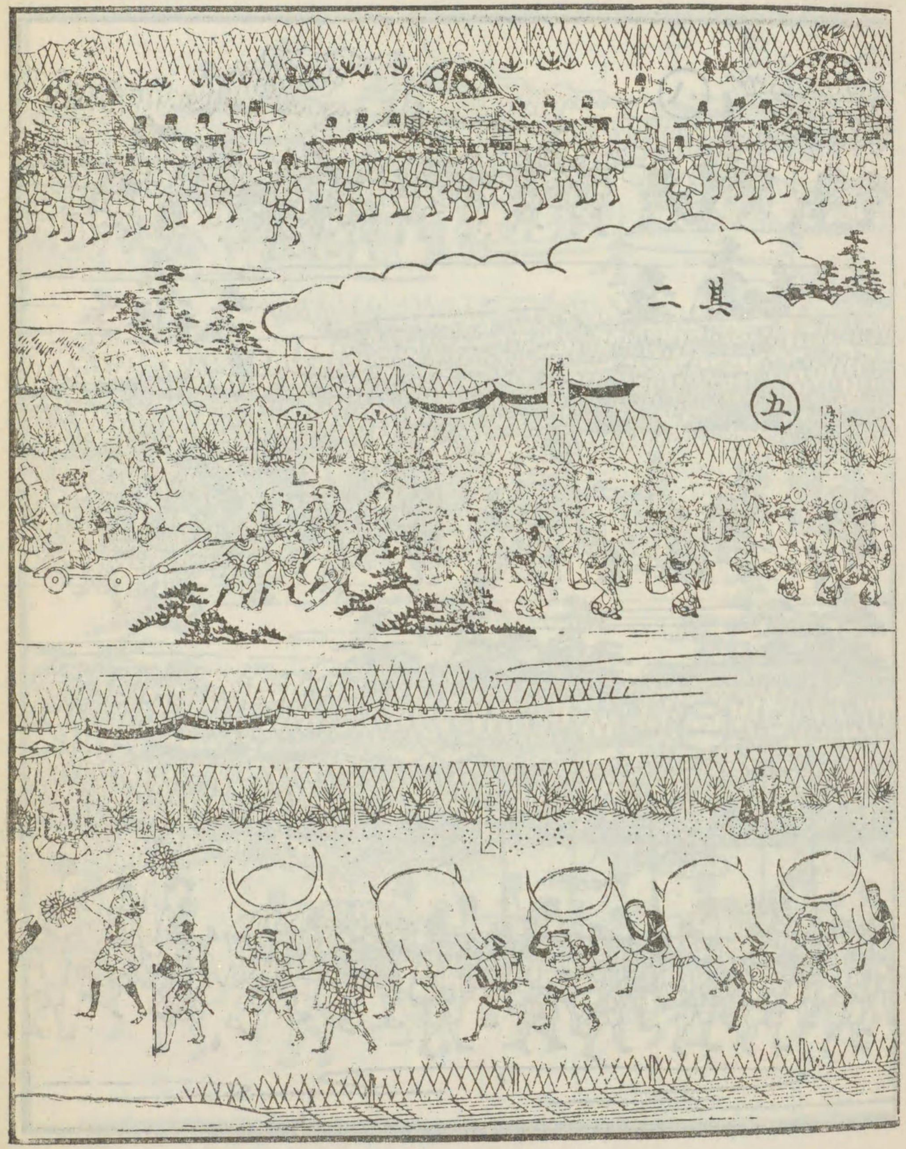
供奉の
練物して枝
○赤母衣七人　白母衣
○太鼓　二人　○拍子鉦　弐人
○笛　四人　○太鼓　二人　○雑賀踊　五十人

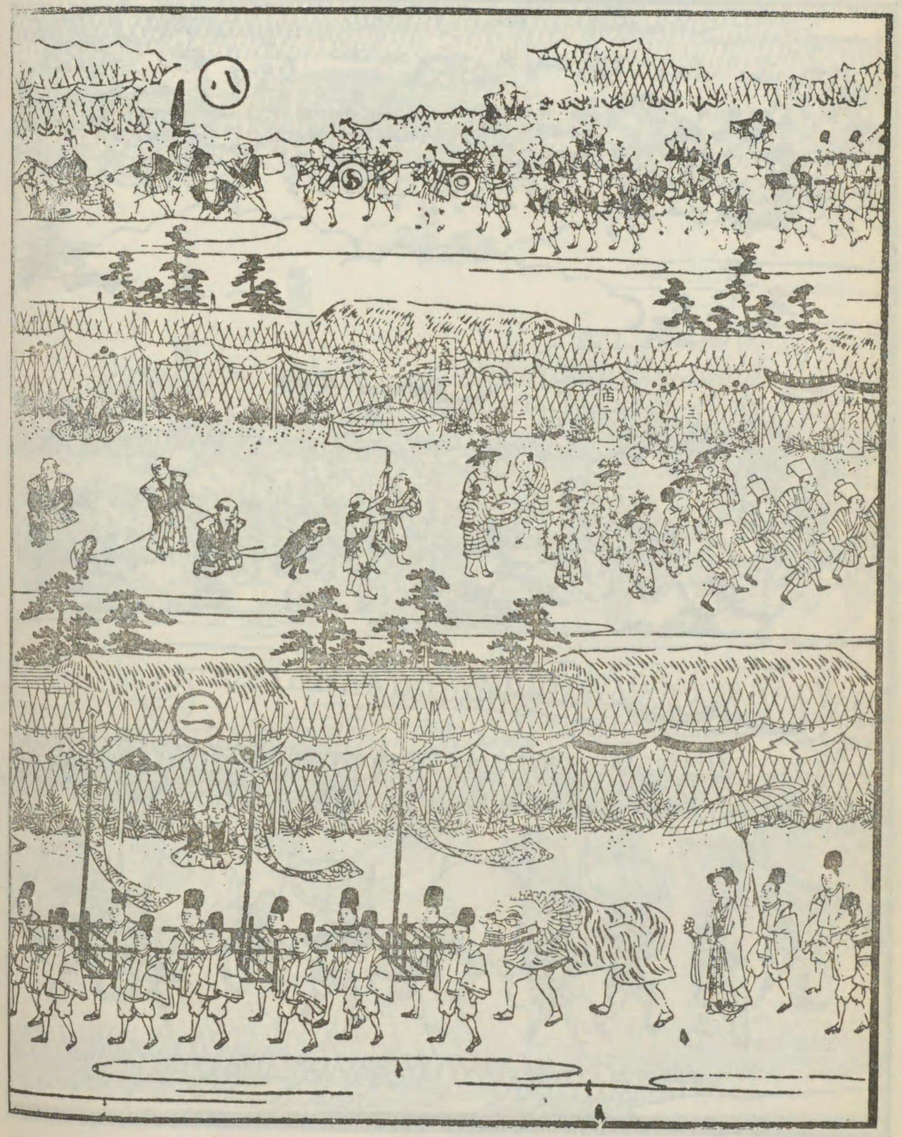
○唐船二十九人○笠鉾八人○餅搗踊（烏帽子持八人、杵持八人、拍子二十七人）
○持鑓八人○手合三人○餅搗たち八人○法被着三人
○挟箱二人○笛二人○太鼓弐人○笠鉾二人
○米餅の事ハ神代のむかしより始りて先にもいまだ侍るにや
なれどもまでも世に持ち来るよし造酒等の神々の中にも
下戸なる神ハぬりへ納受あらんに是なるに此餅ハ搗て神供に捧ぐ
にもあらく丸めて市中ひさくにもまたれ五風十雨ハ人民の為に来
と捧しく雀躍なる姿ハ鳴物の拍子と合せ掉頭して踊りて杵柳
たる鉢巻ハあるひ袴ど緋のもゝひき美男子に紅粉の粧ひを借り
是を手合の婦として八人の杵持男弱く拍子を採て囲む家の後くを
たのく所作ありて是ハ拍子になりけれバ催ふさせ踊る獻酬の會をと
あさしむかふ餅の事ハ昔より神代の遺風にして面白き事なり

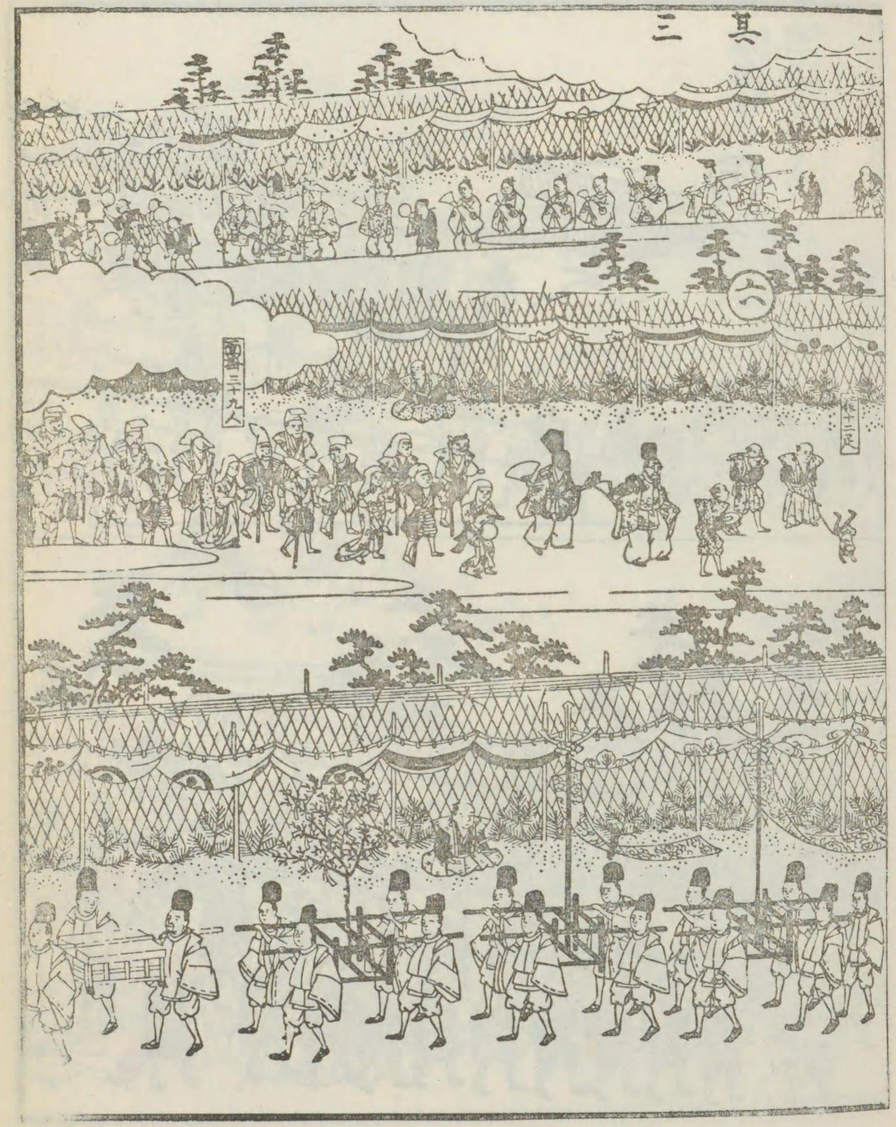
図曰
此祭り中絶ありしに寛政十二年申年山王青霞台あるより再興ありて
其旧を正し新に一二の作物を加へてまたも再興ありて廣瀬八丁町
より始まりを伝へし

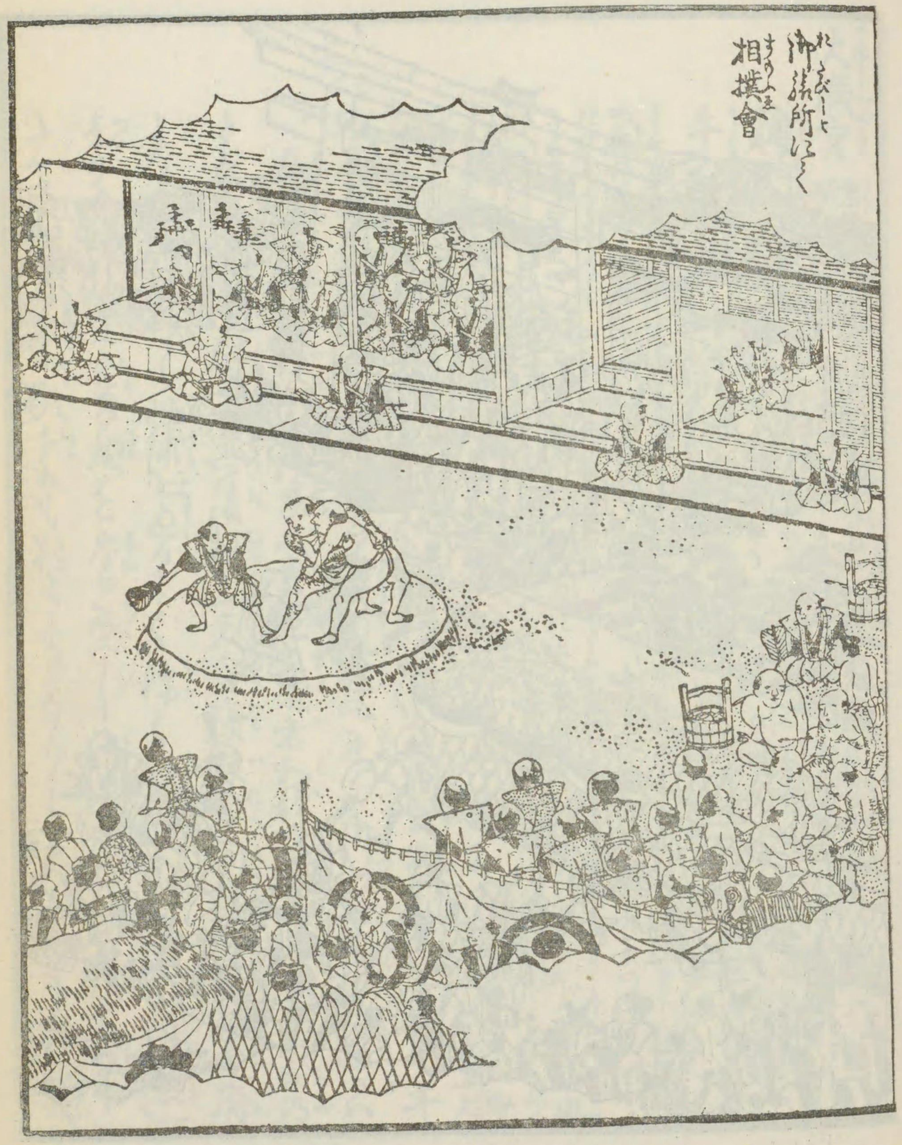
東照神君御旅所
神幸御祭式

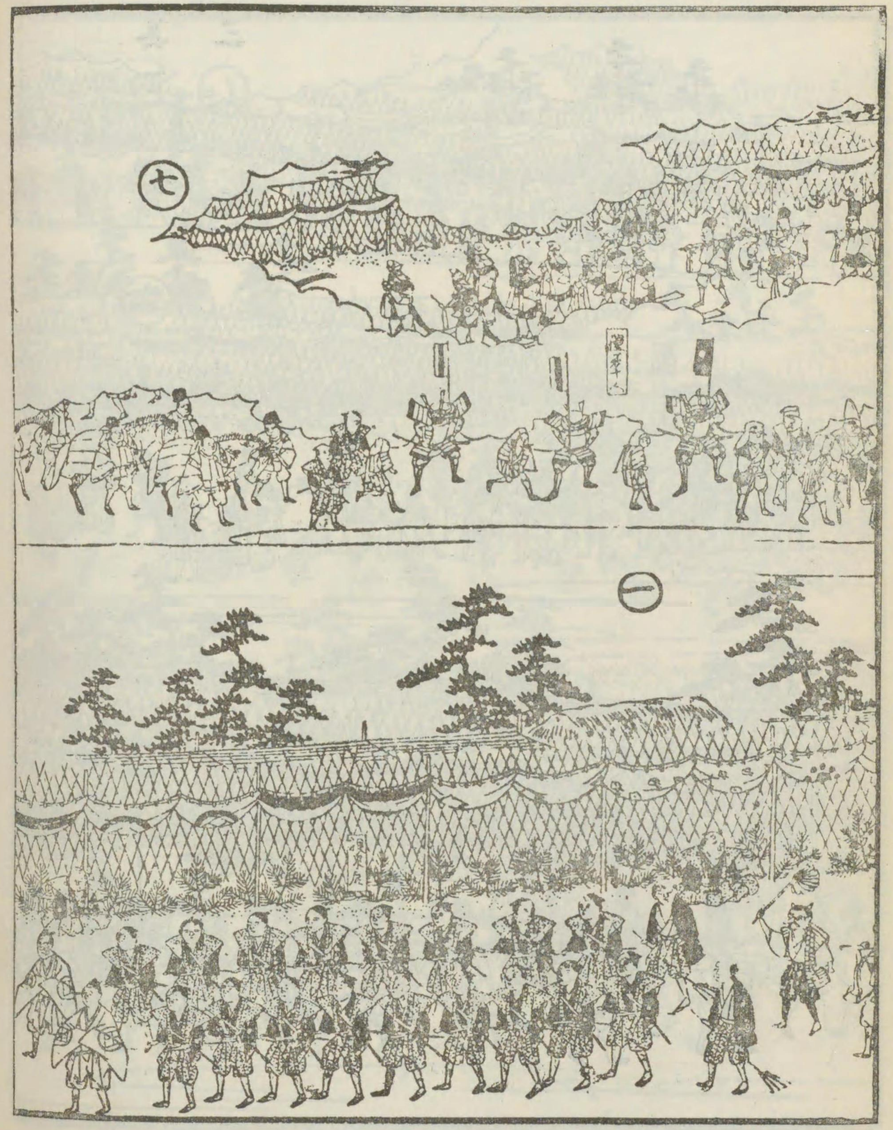

九
三

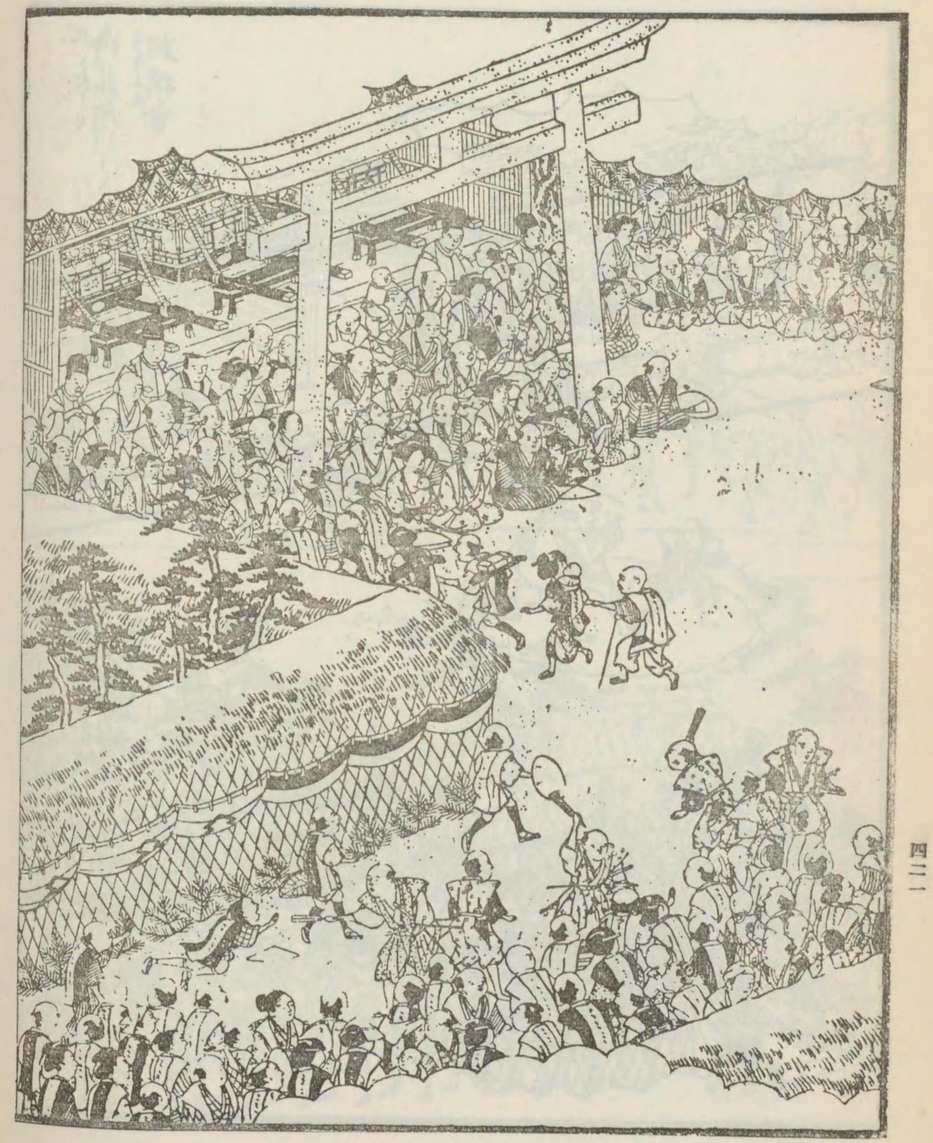

二其
九


八
二


三
六


相撲會


七
一



天満宮　陳設宮内宮の西の山にあるを云

樓門　家と扁ずくまる　辺傍に拳玄の仲郷うろ

牛の画　九日塩小兵衛が　樓門とへくくらの

拝殿　秋仙の後ろ　三蔵院の南　筆　無雪両皇王へ祇　白山社傍

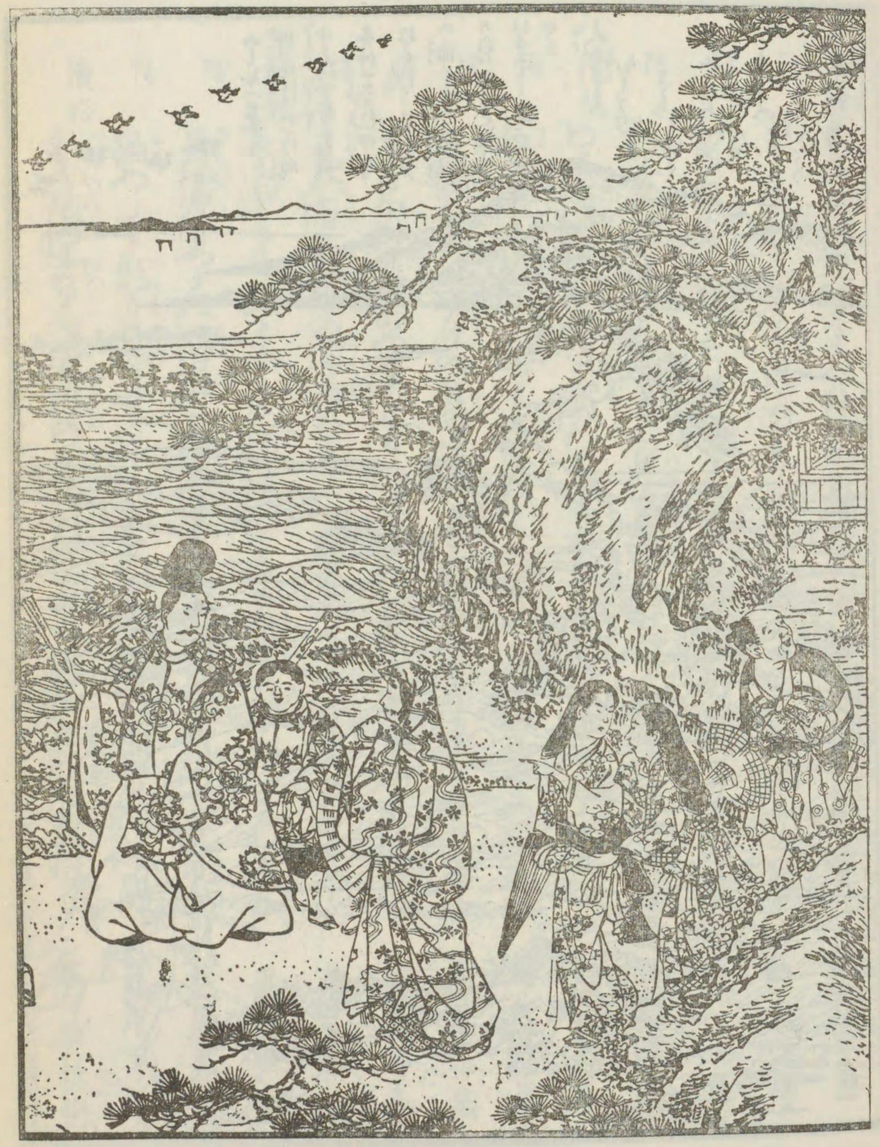
末社　物よあり画の下　八貴享五年四月

助の報ゐを忘ること勿れ。眺よ西上人の撰集抄にも載られ
たりかくて星霜幾ならず社頭ともに
鳥かゝくまでうら〳〵ふる〳〵ものさびれ
ゆくを嘆き十一年後の元亨三年辛酉
ふたゝび社殿を新たに神田をも
するの社殿こゝろうちふるふ
國祖君命のよおもく
東照神君の霊前を剏建ありて
地もゝ〳〵又神田を増加
さもよう〳〵世
國君の崇尊化も異たり〳〵霊應まこと炳然
たり

重建私教浦菅神廟碑銘　藤敏夫

於乎神。姓菅。こゝ其字。諱道真。世曹儒宗也。ゝゝ。
南紀私教浦置菅廟者。遽代尚矣。今國主豊臣。姓淺

野氏。幸長公。就昨土之封ニ五年。相舊制之溢陋而於
邑不措爲然神之主。先成民而後致力於神。鑿開兆
域依山崖壁貫鉅石。蹐攀峰嵯峩百丈。子如來行堂不日
以落矣。刻畫華彩。丹漆黝聖。迎享之忠壯。然歟
棄日多狄梁公毀江淮淫祀一千七百區。所存者惟夏禹
伍子胥二廟。君子猶以爲存伍子胥廟未是。国主之
於此廟可毀乎以新爲。可廢乎以崇爲。可爲而爲
羅山詩集ニ傳教浦天満宮者。未詳其卅創之時世
也其從來已久矣。或曰。橋直幹自掌府政京師時。過此
浦而始崇奉焉。今所存者淺狭幸長之所改造也頃歳
勝惺窩應幸長之求而作廟碑銘然有故不建碑云。
菅氏家風儒者宗。霊神今古仰遺跡西都北野南



須磨浦。三處。祠堂一色松

私欵浦（少納言松ある浦。上古いくさの下知をくだしたる浦。）

万葉

芙蓉峯東白浪立而。風寒暮者山跡之雪念

又乃浦亦柚左陪沾而。忘貝拾将妹者不可忘亦

續拾

老の浪よもこゆらめいつくもまろんとの浦ぞ

詞花

哀傷や久米の作りの浦ぞこも

又

芙の浦こぎ出でくれば月かげの

千載

幻手枕さやぐ

新古

藻塩そそくも庭君の代の

又

私なの浦さなかの風をなみしも

又

芙の浦に月出でぬのうすあたた

又

芙の浦や沖ゆくあひのうひ

又

芙のうらをわのこと

名所

作者不詳

連敏法師

大納言師頼

贈左大臣

祝部成仲

源家長

民部卿範光

益

永

隆

寂蓮

新勅　わかの浦に生てまさる海士の藻塩草むかしの末や果なん　法眼宗圓

同　もしほ草かきおく跡やいつまでか我身すてねわかの浦浪　行念法師

同　跡垂し契のまゝにたえずして若の浦波のあはれのりは日本　俊成

同　和歌の浦に塩木かさぬる契をばかける焼藻の跡にてぞみる　西行法師

續後　わかの浦や塩干のかたにすむ田鶴の雲の跡をみるもうれしき　前太政大臣

同　和歌の浦や四方のもくづをかき置てあまの子のこの根ざし見え　正三位知家

同　若浦やひろひておきし跡の藻塩草くちずもうせずやくちなん　藤原為綱

同　かきあつめてもひろひもおかれける藻草もすゝむわかの浦風　藤原師季

同　名に匂和歌の浦路のかき草いかなる人に拾ひよすらん　平泰時

續古　おくれじと若の浦路にかゝる波よたちおくれなん　平時直

同　若浦や遠き波路に漕出て遠く入ぬる月をこそみる　藤原光俊

同　袖ひちす形見かりけりかゝる干潟の和歌の浦波　藤原秀茂

續拾　和歌浦や遠ふかくる波のうへにひかりあるらん秋の夜の月　正三位経朝

藤原兼時

わの浦に芳を出でし濱千鳥
　　あと納言為氏王はまだ仕なくて
　　ころもの浦月
　　ころもの浦の下艸いろく藻塩草
　　わた津浦おもひすいろく藻塩草
　　集まり
　　絶もやし芳の代くの波ふりて
　　立つるまつ
新後　わた津の浦おほ綾雪もけ
　　わた津やも代もくく濱千鳥
　　ふる代も集れわた津の浦千鳥
　　そひのこみちゆく汐の芦分小舟
　　芦原のあくらの月へもよる
　　若のうら独老ぬる夜のあけ
玉葉　わた津の浦やおくく久波ふりぬ
　　この浦よ波

権律師定為

為家

道洪法師

前関白太政大臣

為世

院御製

津守國助

入道前太政大臣

為氏

関白左大臣

前兵衛督為教

玉葉　わた津風ふく波ぬれまくら
　　古のわた津の浦波なれ
　　つゝふるさとの月
　　ふるき代の波ぬれ衣
　　集れわた津の浦千鳥
　　波
　　藻塩艸くひあら芳の浦
　　集れく袖の袖ちりぬれく千鳥
續後拾遺　こひわたれわた津のうらのかきれるも
　　かきれるものかも少なくも
　　ありつゝくれしわた津のうらの波
　　ふるき代のくれしも芳の浦
　　ふるき波のよるもあれてはよる
　　うらみをも袖のうらも世くに経わた津の波
　　代くれしも芳の浦濱
　　芳のうらに世くとまる浪もりぬ

中臣祐信

津守経國

平貞俊

藤原景綱

藤原忠定

法皇御製

平貞直

源高氏

藤原範秀

大江高廣

侍従隆教

前中納言定資

丹波忠守朝臣

後拾遺和歌集巻第十七雑歌上 紀行春

皇太后宮大夫俊成 千載集巻第十雑歌上

藻塩艸かき集むる和歌の浦のそこのみるめや

うらはなるらん

前左兵衛督雅方

今も猶思ひ出でつゝ和歌の浦波

俊成

うたかたの消えでうつりも和歌の浦波

平久時

和歌の浦に立ち寄る波のかへりこし

後徳大寺左大臣

従三位頼政正五位下に叙して後

和歌の浦に立ち寄る波のかへりこし

藤原俊成卿

うら〳〵立のぼりつゝ和歌の浦波

頼政

みよしのゝ山のかひより和歌の浦波

源宗氏

春の代よあひもる若の浦波

源行氏

集来し代々も跡なく濱ゆふ

和歌の浦のなぎさもいく世

父祖文治元年二月廿七日和歌の浦に行幸ありしに

遥望入海浦といへることをよみ侍りし

和歌の浦や遠き入海

御製

尋ね来て和歌の浦波

大僧正慶雲

立つや沖なるそも浪間こそ方も

前大僧正道性

和歌の浦や遠き入海

法印圓

うつり来しあとも浪間

大僧正道久

和歌の浦や遠き入海

前大僧正慈鎮

和歌の浦や汐干の潟の色うつる

津守國基

今もうつる名所の和歌の浦波

祝部行氏

手折りける雲のうへまで匂ふ哉

権大僧都定円

和歌の浦にてよめる

法印宗縁

名をも込て藻塩艸とやかきつらん

示證上人

和歌の浦にてよめる

後三位女子

新千 四海すみぬる世のしるしにいでてかきあつめし和歌のうらのもくづ　法皇御製光厳院

同 わか方は和歌の浦にせし道よりもあふぐ波のたよりをもまて　等持院贈左大臣

同 和歌のうらや其人数に入るまでは世々の跡のみふみまよひける　大納言顕実母

同 いかにせん吾のうらみもつるまでも残りてあさき浦の波かな　法印浄弁

同 数ならぬ身にもかく道をしらでこそ和歌の浦波　惟宗光吉朝臣

同 和歌の浦にあまの子ぞ道の跡をもしるべき芦のはにかくれなき身のうらみをぞ聞く　藤原雅顕

同 わかのうらは波はあかしの沖つ舟人を送る舟のかたみとぞなく　行乗法師

同 和歌の浦に昔の舟のさしてなほ人の通ひし道もまよはじ　性遵法師

同 吾の浦や芦の浪間に沈みしも今さら世々の跡を迷ふ哉　法印實清

同 いにしへの道よりまさる御代にこそ老ても今は和歌の浦波　正三位経家

同 あはれとは昔を思へ和歌の浦にかはらぬ跡はもしほ草かな　二品法親王尊胤

同 人しれぬ身をのみ思ひて沈みつつあはれ和歌の浦の波　信快法師

同 昔の浦に心を寄せて沈むとも跡をぞしのぶ波にまかせて　正三位通成女

新千 和歌の浦に老いの果てなし捨舟も今ひとなみに世にはひかれて　藤原為秀

新後 わかのうらに集めひろへるもしほ草いく代の跡をしるしとやせん　権中納言親賢女

同 昔へかよふ和歌の浦にもまよはずば跡をもしらぬ身の心かな　二条為冬

同 古の跡ある和歌の浦ちかく今も立つ道の跡をたづねて　小槻臣遠

同 なほぞよむ和歌の浦風の声立ちて昔の跡にあふ心かな　藤原高範

同 和歌の浦の松に吹きくる風の音もよろこびのみぞ聞こゆる　左大臣

同 もしほ艸かきつむ跡や八十ぢにて見る和歌の浦波　一品法親王寛尊

同 沈みにき今さら和歌の浦波によせばやよせんあまのすて舟　鴨長明

同 なにとなく役もあはれなり名をとどめけむ和歌のうらなみ　よみ人しらず

同 和歌のうらや羽うちならす浜千鳥ふみおく跡をあとやのこさん　順徳院御製

同 しられぬ身の人の世々に跡ありて和歌の浦波　為重

新続 和歌の浦の波をも袖にかけつつもなほ昔をしのぶ心に　後八条入道前内大臣

同 わかのうらに集めみがく玉もの道ある御代にひろひ残さん　民部卿為明

新續

人もかれぬる秋の水ぐきみよしの子を絶めぬる世さえや　源　経信

□の浦や老木のねよはるゝ春のひかりあるも　左大納言為定女

立つるわかのうら波ぬるゝもすそうるゝ山　左　大臣

こゝろ人のみもつれゐ今もまつ人しらん　後二条院

立つるうき雲のはたてもかすみ行く五十しるあまの浦波　紀　行文

わかの浦やうめる代々の波をさへ玉とぞ見ゆる　左大納言行継

跡たえよ芳野の浦波代々の波をふるもわかうらなみ　大蔵卿為房

なみたゝぬ代々の波の玉ぐしに秋をかけたる　二条為世

芳野なる花の白雪ふりしきて　紀　行文

□のうら風さえわたるあけがたの月　藤原為家

□の浦や三穂の松原ふく風に　法印宗助

□の浦の干潟をふさぐ鶴の群　玄　実

支木わかうらや波うちよせて　真　観

新續

わかの浦波立つる代々あつめても　法印宗助

堀川□の浦の干潟をふさぐ鶴の群　玄　実

支木わかうらや波うちよせて　真　観

□のうら風さえわたるあけがたの月　為家卿

□の浦や三穂の松原ふく風に　宗助

□の浦や三穂の松原ふく風に　為家卿

□の浦や老木のねよはるゝ春のひかりあるも　為定女

立つるわかのうら波ぬるゝもすそうるゝ山　左大臣

こゝろ人のみもつれゐ今もまつ人しらん　後二条院

立つるうき雲のはたてもかすみ行く五十しるあまの浦波　紀行文

わかの浦やうめる代々の波をさへ玉とぞ見ゆる　為房卿

跡たえよ芳野の浦波代々の波をふるもわかうらなみ　為世

なみたゝぬ代々の波の玉ぐしに秋をかけたる　二条為世

芳野なる花の白雪ふりしきて　紀行文

白妙の立つるうき雲のはたてもかすみ行く　二条院宣旨

□のうら波ぬるゝもすそうるゝ山　後久我太政大臣

夫木　和哥の浦に古きをみかき貝もひろへる教へは道にありけり　信実

同　みちはむかしの人とともにいへるかたこそ知る和哥のうら人　為三のここ

六百　いつの世に老となる身のなをしたふ吉野のまくもちるらん　左　兵　衛

林葉　縁を老るの声とあるまし他の人こそいつれなき波　俊恵法師

家集　きのふとやけふちかきみの和哥の浦浪もかけたる蜑の住家　藻塩草臣

同　和哥のうら浪たち千代まてに君か代をすむらん鶴とやとせそ　赤染衛門

副　哥

拾玉　東路を君か代まもる和哥のうらにも立鶴なるら　慈鎮和尚

同　千代まてもまさに八千代まて四方の國とを中にとかしておきて　頼　政

同　かくてのみ和哥の浦にて藻塩草かきつくしつるやのこさん　湖　子　丸

御集　わかうらのあさみ塩や渚かろんし千代とてある田鶴の諸声　後鳥羽院御製

老若　君か代のためしにひく里なれや浦の波をもきけるわかのうらかな　雅　経

雲玉　松か枝に御代にみちぬ道あるを今日こそ見れ若の浦風　宗尊親王
昔天子宰相中将にて住吉の社にて若の浦のかたみを見て後和哥の浦にて遠き所にしもあらぬ見る所の浪

草庵　和哥の浦や心ある人の岩ねにも千代をかけぬやことのはしき　頓阿法師

同　いつのまや浪よる岩のいくたひもくちぬ心のしるしをや見ん　牡丹花

百首　かりそめにわかの浦にもあかぬ心の行末はわかのうらかな　実　隆

文明　和哥の浦によるもみちのはの沖にかくるるをあはれ浜やのこさん　宗祇法師

紀州　関をへし和哥の浦風見しにみる志のふ遊の方ちとりかな　政　為

碧玉　君か代をうけつく藤の花かさの初音もよし　二品親王尊胤

夏衆　和哥のうらは後へての浦にもいて千代の遊ふ人もよ

同　さくもいつなの見かけの千代まてかけて和哥の浦ちかき　前大納言実教

紀州雑詠遊二和哥浦一　藤肅

遨遊諸客海城傍。激灩水光連彼蒼。出網跳魚新撥刺。一聲欸乃逐斜陽。

和歌浦棹律　林羅山

弱浦昔聞久。今看猶眼明。蠔粘疑石出。蟹走訝錢行。
松下有漁到。蘆邊奈鶴鳴。堆堆鹽竈冷。處々草芩生。
土腴如蜀府。潮去似盈城。無興即吟矣。山青水自清。

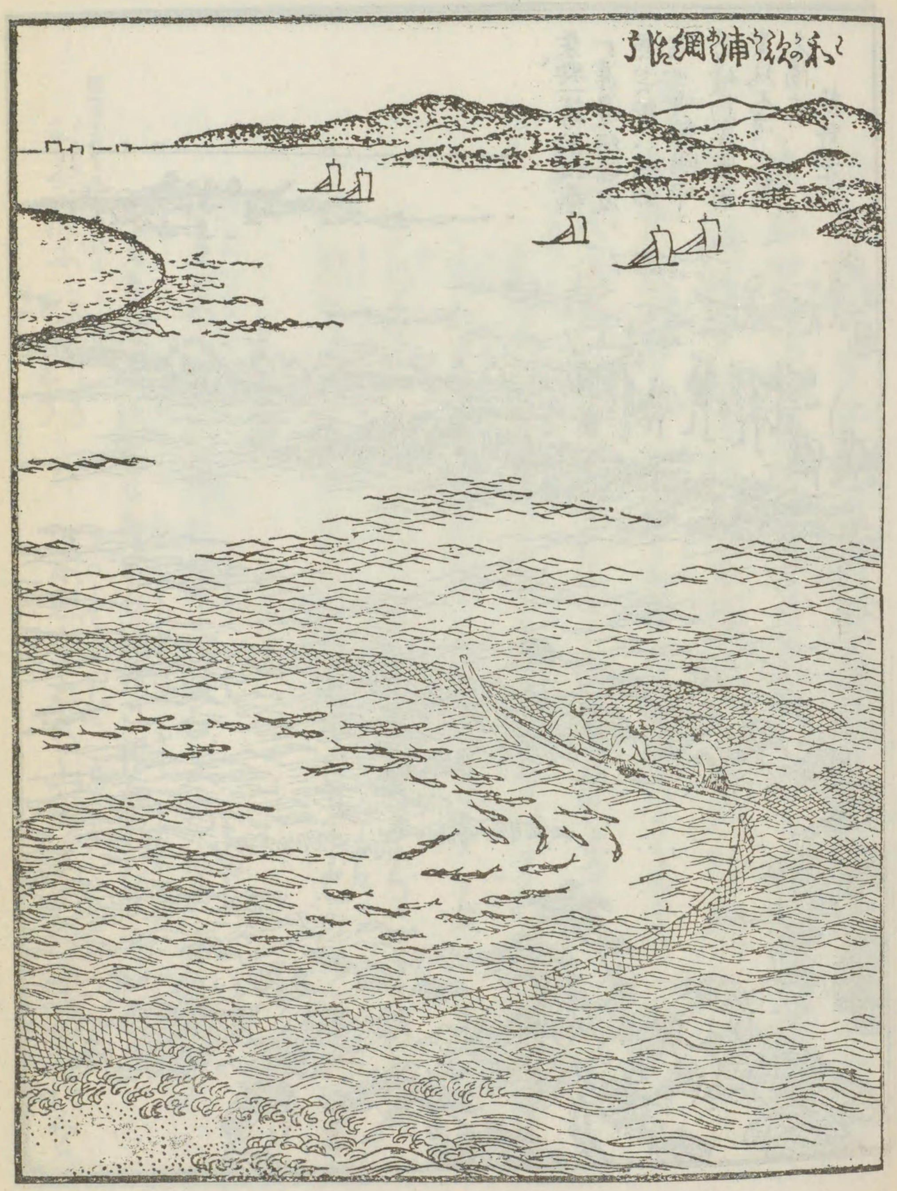
明之浦眺望　東涯

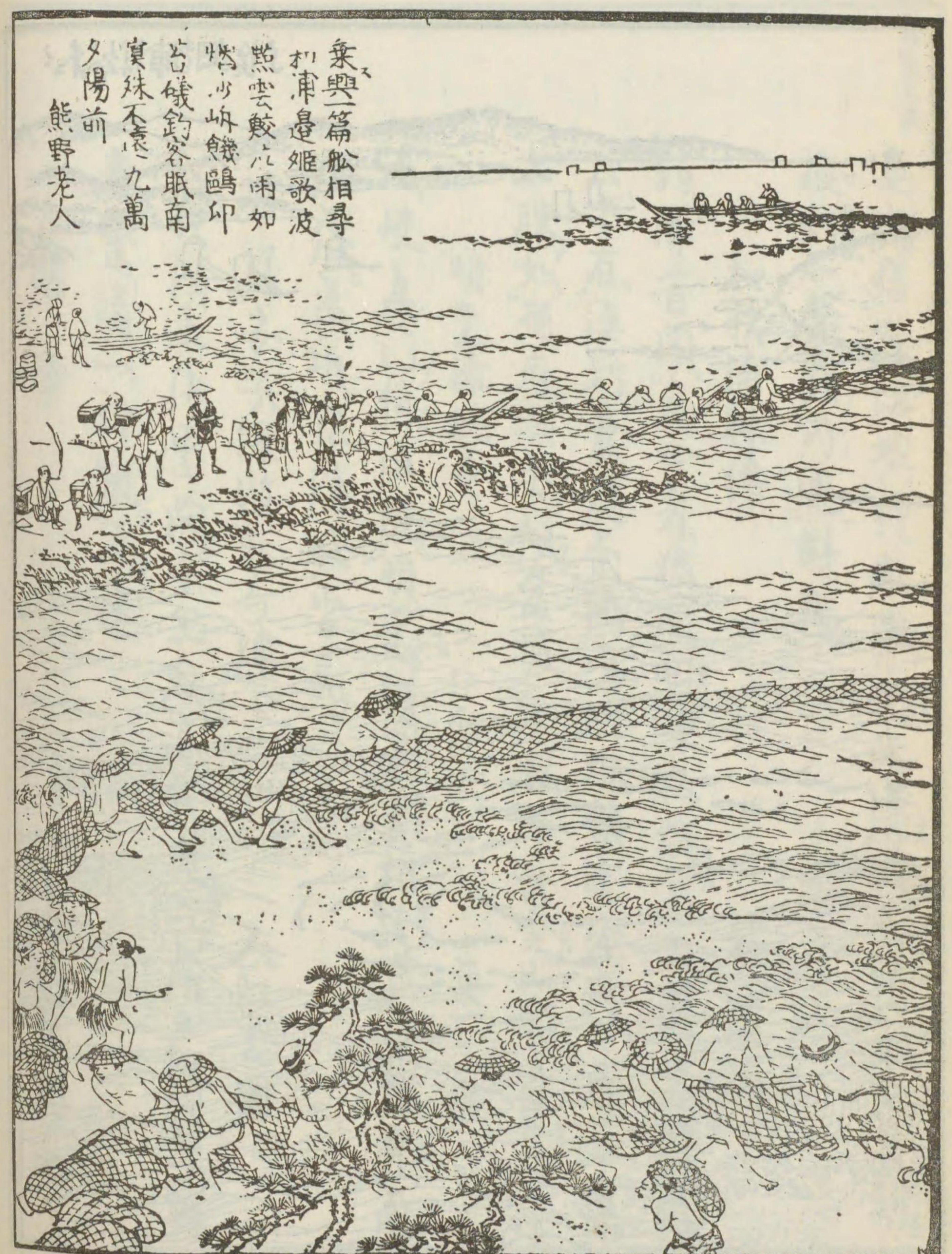
兩岐為門倚海涯。明光勝景美相諧。天風忽自南
溟落。萬頃銀濤吐雪花。

送客深遊和歌浦　大江玄圃

和歌江上浦雲開。千里秋高氣爽哉。落日數行聲鶴
度。驚濤一片蹴天來。

明浦　上野義剛





浩歌酔上金山舟。陳跡欲尋明浦秋。忠墳千年宮寂寂。仙妃一去水悠々。芙蓉露落青牛渚。蘆荻風鳴白鷺洲。此會相逢作何事。誠将今古問沙鷗　浩繋　雅

月　狂歌貝合
大曲も和歌のたましひ残るらん心をよする和歌のうらなみ　若山　貞亀

自然貝合にて
君か代は浪もたゝずよ何までもわかのうらつたふ鮫もなし　宗祇法師

和歌のうらの春のせもり郷[illegible]　もせ紀

哀れ日も数ある船や和歌のうら　月

行暮り和歌のうらなく追付くる　槐亭

波気え春まさ和歌のうら気色

和詩

小貝多く浦は錦に翠と霞むよの宮　月

波もなほ是が脇なる夜は衣通姫の浮む松ひ

貝原先生南紀紀行
和歌浦ハ和歌山より二里あり
東照宮右の山上にたてまつる宮居なり

源平盛衰記

重景帥返事トかう

我ゑい宮ゑ風ふさも紛らへ慎月さろくさへ半

石童丸大臣殿帥の公男い出

玉ゑや紅ひ通ろ四れいほろもれ

西浦い枝梁に杉のくゑろ腰越にくく古人の千句詠よろ小い

きくく首尾和もろ東西光徐町あろく濱をろ色濃

おくべの田鶴が間うちぐろうに洋くたろ名所と

今斯寶寺のひれ多い悠揚して服入洛くゑんさろ

寒菊に生ゑが幸はろろく茂白れ帥坂翠巡ろく

そびへ農ふのたろ浦塩津浦ろみるく幼くく西海小海

四國う高松あろくい関東ゑ商家ろ

軒瓜はくも鮮ふえろ西南い蒼海漫くくく

大腮ぬ萬里に羽を打伸あろうれ初萬あ行るみろ先

ろろうふ千ヨ等の底ふあらびくくくい

ろろ業くれさるくにくくくぼんろ春をろろろ臣地方

の山く岩根の紫れ緑ろるろうれ

屈曲ろる其景色窈窕くくく千の美人紅粉と粧いて

一度はわかの浦に遊ひて枝葉に寄せ其の勝地をしるべし

紹述文集

寶永巳丑之歳八月九日。周観府城。樓堞崇麗。民物富庶。南海之一都會也。自府城西南行一里許。而有裏海。有小嶋。倚巖上有亭。可以観海。傍曰妹背山。遂詣玉津嶋祠。而観和歌浦。浦廻十餘里。西面稍南。長岡連亘。左右環擁。塩嶋。澳嶋。崎于南。蛯島。雜賀崎。突乎北。碧嶌頃。片帆如梭。風水相遇。銀濤噴雪。勢如萬馬蹴浪。海南之観極於此矣。近村有亭。生齎酒肴。而供客玩。而共歩退灘地。浪花越人。珍貝魚螺蟯山之類最多。旋摎而懐之。遂上芦神祠。㦮東照宮。而歸云々

東照宮御祓所 は正の例に寄れあり毎歳卯月十七日これ神輿渡幸ありたまへ この浦よりの眺望ことにもろこし人沖のしまを えん日秋そぞろう村の沖にあり

浦の初嶌

續拾 みわたせは浪路かすみてかすみけり浦の初しま

同 いつもみん浦の初しまいくかへり波の沖のしまをも

新續 紀の海や沖の波間のさえかへる浦の初しま

同 入日さす塩瀬の浪の末遠く千潟に近き浦の初しま

夫木 湊こえ塩風遠く紀の海やうしほのしかのはつしま

前参議入道
ふちはら大臣
前中納言定家
太政大臣実光
称名院入道
内大臣
權僧正公朝

家集 行くる袖にかかる浦浪よせくる此初しま 為家

柏玉 見わたせば浪も霞むゆふ春の浦の初しま 後柏原院

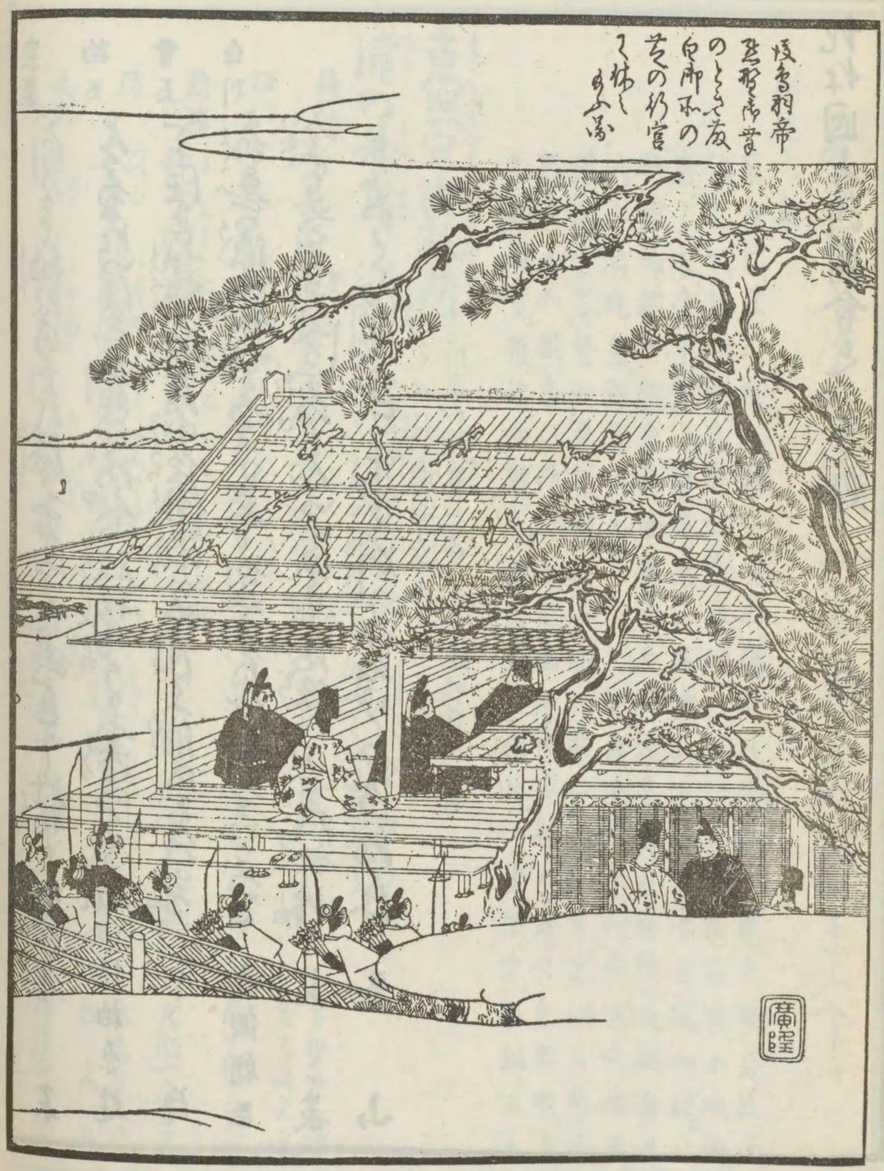
雪玉 さよ千鳥枕にかよふ浦の初しまの月 実隆

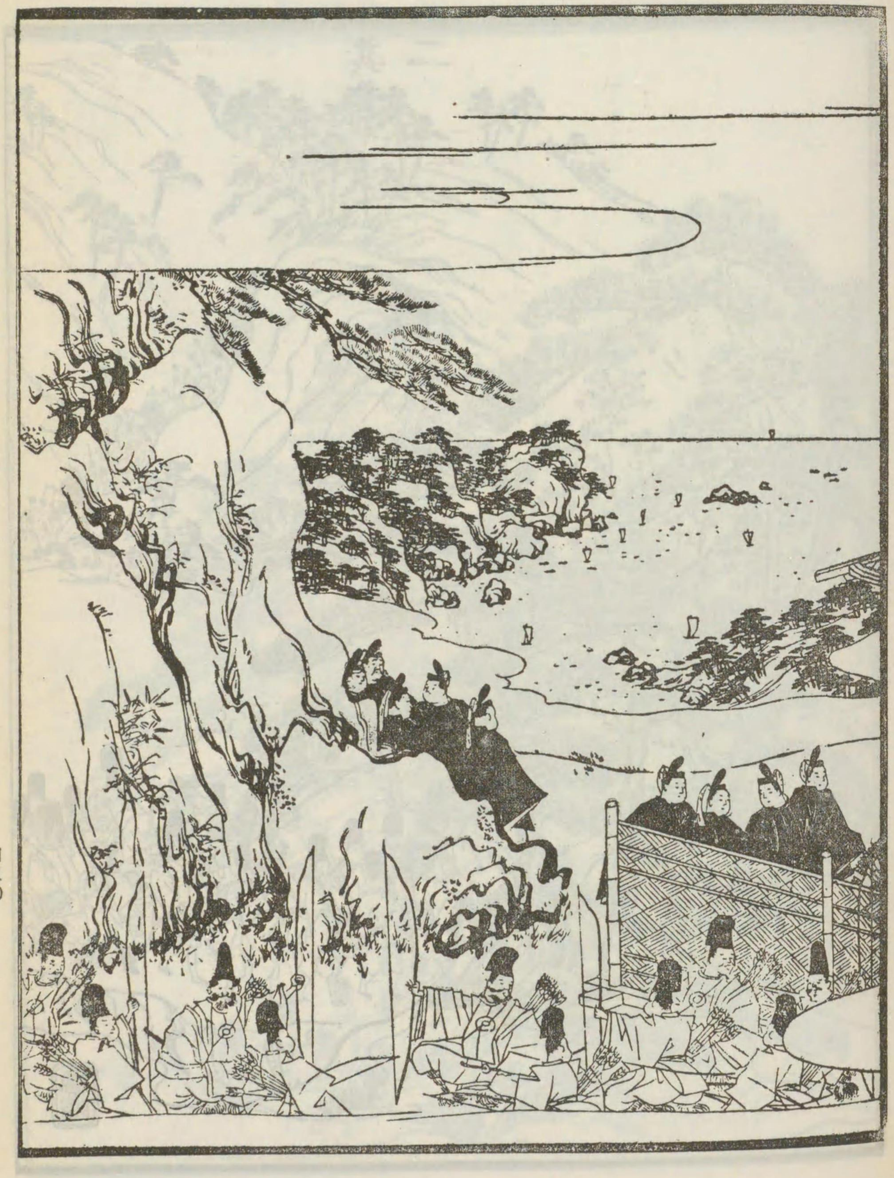
白川 和歌の浦の初しまうちよせて浪のしらゆふかけて 忠綱朝臣

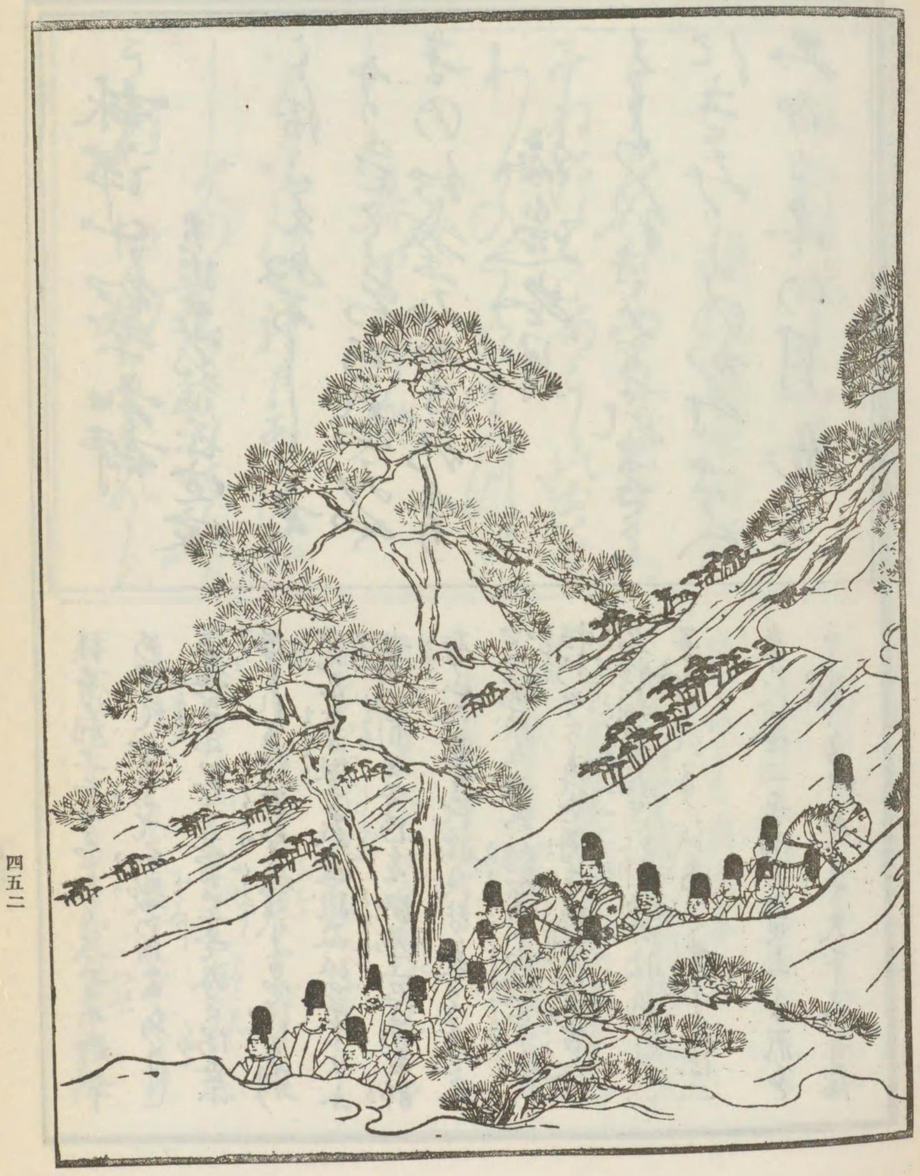
今も見る紀路のしほ風しら浪の初しま 長家

よそに見て忘れかねつる初しまを 来山

紀伊國名所圖會之二巻終


桓武天皇
延暦十年
のころ
長岡の
宮の
ようす





詠深山紅葉和歌

左近衛少将藤原宣家

こゝろえぬあらしも
みゆきこそたれやみや
まの紅葉みゆきするなり

海邊冬月

くまのなれきたえまもなきさ
にきみのよのかすさへ
みゆる冬の月かな

後鳥羽上皇しば／＼熊野に御幸
ありて和歌の会ありし
時詠草に用ひ給ひし墨跡今に保存
伝はれるを熊野懐紙と名づく則
宮に奉献せられし懐紙及びその余ことに
載る切目王子滝尻王子にて詠
茲山に存する懐紙是なり此宮家
の懐紙を世に称して新宮懐紙とて
稀なるものを得て珍宝とす古今
名物類聚抄に熊野の懐紙の法
每装せられ紙面しく書し正保二
年に金二千両乃賣上手形を
申載すまた天下乃奇珍

詠山路眺望和哥

侍従藤原雅経

すゑのたゆかとしるそこの
みねはそこともしらぬおも
わのかゝきせまり

暮里神樂

いくのほりの神かあそひや
しものきもまくらにかゝる
きねのゆめのこゑかな

といへりし又建仁元年十月藤代
王子和歌会と題する巻中にはじ
顕をのせて奥書に
後鳥羽上皇熊野御幸の時懐紙十枚
宮中の青蓮院に一宮あり副收す宮有之元
亀三年壬申初夏花押に記す家
家て懐紙と称す
とありて其紙十一枚世に伝はれりしや
否をしらず只八枚を偶々代々伝へ下す
載せ又雅経卿の真蹟と實父の消息
の墓したると称して家宝に秘蔵せん
手月詠みされどまた続くて蔵代
懐紙の述をも京都の人の藏せしなれ

◎内原驛 古は山の上町驛舎なる一里塚より東半町ばかり西井寺にあり
乃ち大樹を経てしるしある驛所一里塚なりしといふ
縦ひ文献に見えずといへども
後の遺漏さるゝものの一二を拾補ふ

長秋記云

長兼三年二月五日乙酉巳刻於内原借舎有昼養事元儀藤
代也然而依日高過之於是有此事也過雄山間遇法眼行覚
其後不経程遇賓須得業 畧 此僧は河内の帝塩寺より参りて紀州山に赴く

今その一駅を数ふる事は後の證しとなるべければなり

人車記云

仁平二年四月十四日戊寅 畧 或人云今度御熊野詣毎事不
吉御上道去月廿四日夜於内原御宿夜中御屋形焼亡御殿燈

付油草 云云

名方濱宮 日方村の南にあり 名方といひ名方に鎮座するを名とす
名方と云ふは名草の名を今一村として海部名草浦の浦下を総称していふ
当社は崇神天皇五十四年天照大神吉備の国より遷し奉りて此地を吉備と名づけ山陽道の三備の
名方濱宮に遷坐し給ひしが後世其名廃れ
地なるに依て此地の大名なりしが
されど里俗に称へ伝ふべきことあれば遷坐乃地を今の茆引来まで
名を濱宮といひしならし 又倭姫世紀にも名草濱宮より吉備の
名方濱宮に遷坐し給ひ名方より大和の国宇陀郡に遷坐し給ふ

名方よし紀しるさるを以て前編に浦の吉備の山陽道の方
と記せども同じの倭姫世紀をも引ていへど
此旧趾に於ての遷坐の名は
乃宮あるを此地の大名なりし吉備と今備の吉備にありしかば
しるさるなれど大和に遷らるゝを

当此里に於てはこの方便なり

伊勢部柿本神社 今濱宮と此地にありて
本國神名帳云

名草郡地祇伊勢部柿本神 天照大神の遷座の由緒ありてこの社に祀れるとぞ

蜃樓 いにしへ文政の頃名高き浦の蜃楼を見しといふ
紀州和歌浦より海上七里許り沖合にあらはれ十里許四十町の地にてわたくし浪浦の間と
して凡そ十里を隔てゝ日の大なる虚空にて西方の山を始としてむかふに
しかれども近くは四里ばかりの海上に一の島山をなし山閣も見え
にきやかにてあられも見えたりて戸室の形もあらはれ
見えつのこゝの気色にしてかかりの町の山をのぞむごとく
海より左は沖まで数頭立ちて漁村の船ならび風の山
掛ありの様種々にかはりしが大いなるもの見えず

紀直祖刀自賣故居 今猶かしこ此所に残れる跡の
日本後紀云 文に名は藤代の人なり

弘仁二年閏十二月乙巳 十五日 紀伊國人紀直祖刀自賣之子
嗣宗言天下之人皆兼父姓身為公民長為調庸而嗣宗獨身
無所貫父背課役是以欲附母戸外戚不許且為他子假濫有

制伏望因親母之居賜藤代宿禰勅賜吉原宿禰貫于茲京

藤代より北方二里餘にありて
茲東南海を臨めり其名の由
茲に詳ならず

海辺郷

加茂谷

藤代峠 名草海辺二郷の堺にありて麓より坂路十八町九段あり
行程凡二里半 名義未詳

○藤代峠 名草海辺二郷の堺にありて麓より坂路十八町九段あり
峠より南は名草郡海辺郷北は那賀郡行程凡二里半名義未詳

○山名氏墳墓 名草山の五輪乃石塔峠茶屋乃傍にあり元禄頃乃
もの歟山名氏は紀州の豪族にて足利尊氏に属し南朝に仕へ
しが延元二年京都合戦に敗れ父子兄弟一族悉く八百余人
自殺せしとぞ墓碑は苔蒸して文字詳ならず

○地蔵峰寺 峠より東南山麓にあり本尊地蔵を藏す古来霊験
あらたかなりと称す

勅進聖揚梅山心静

元亨三年癸亥十月廿四日

大工藤戸権守行経

○阿弥陀芝 地蔵峯の西半町許にあり土人伝へて今を境として
乃時代の墳墓の地といふ今ハ其痕跡を失ひ又数百年乃
いにしへなれば茶山も二上をも詳にせず
あらし遺址あらんと云外良阿弥谷良弁
伴助井等の名あり

○地熊野第一の美景 乃奇掬窈窕として眼下に無勝槩をつくし
乃南は遠く紀伊山のごとく連亘一望紺碧乃海の光
乃中に点々として蓬萊の仙嶠の如きハ熊野山河乃蒙気
乃中に隠顕するハ皆熊野乃地形山河乃奇絶なるを
風帆一として指点すべきハなし西ハ沿海
乃平沙雲浪乃習ハしきを望見するのみ
なるを大凡十余峰ありと及ぶといふ

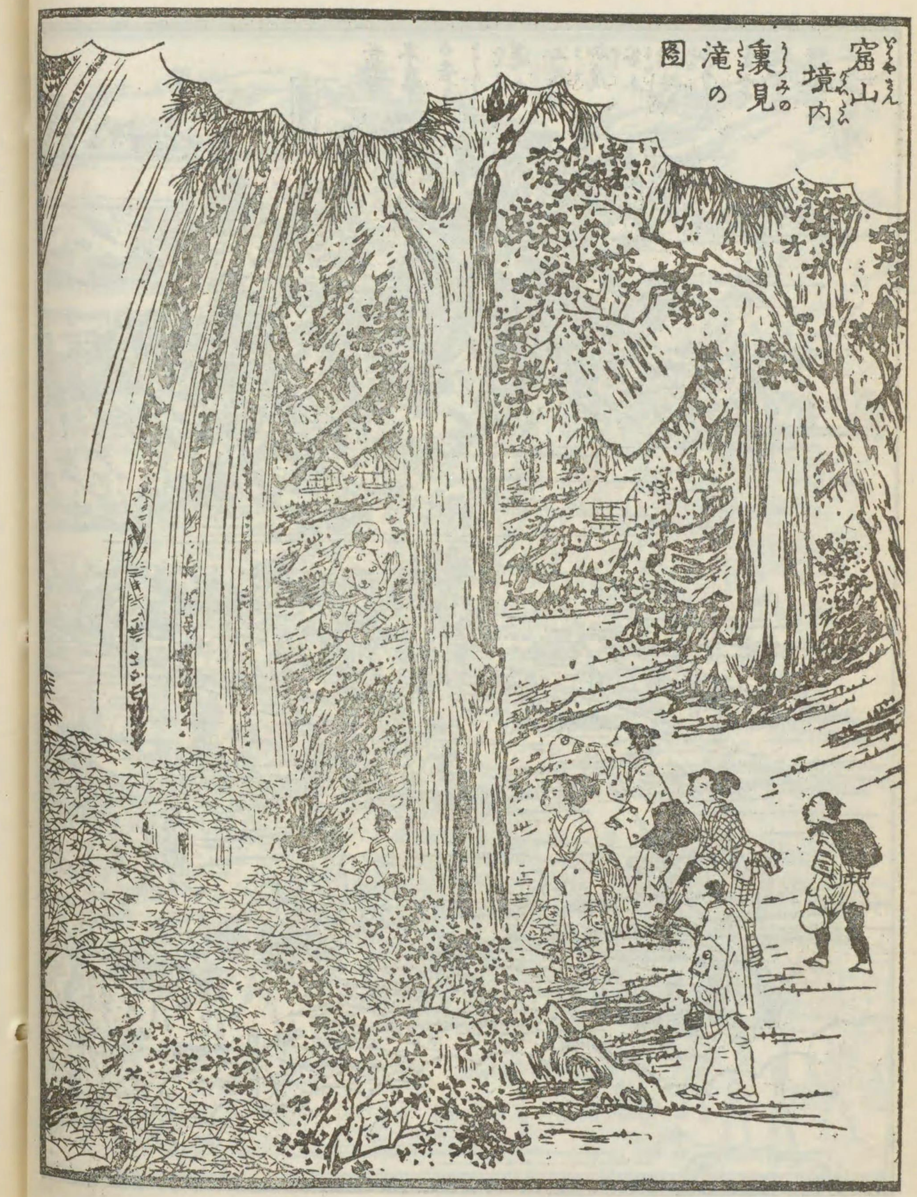
校拾遺集

源平盛衰記元暦元年熊野詣の条に云

橋本と土橋との邊の圖

當寺本尊の告ふるまゝ蓮如上人加茂谷ふ門徒と共に參詣をなして遊ぶ境内ふ上人堂を建つ

富山境内裏見の滝の図



窟中に石鐘乳あり

石川主殿頭安房守詩記

松廬遺稿　藤白嶺上望遠海　野呂隆訓

白谷詩鈔　藤白山頭雲伴我飄然　仁科幹

建仁元年十月九日略道崔嵬殆有恐又眺望遼海非無興矣

塔下王子二

○泥石 峠より少し南の坂本に巨石あり 俗云泥石 延喜式の事歟

紀伊國 温右

岩屋山福勝寺 寺より二町許右の方に巨石あり 俗云泥石 延喜式の事歟

この像あり 高さ一丈七尺 乃ち浪摩挲りわりしを 天狗のなせるわざと云伝へをも

わりしをこゝに据ゑ 寛永乃頃堂内ゆ

物多し 堂外に鞍

中堂外に鞍

あるを みくに人と参詣の

めひを かもり

堂内に納

裏見滝 福徳ある乃境内にあり 然して嶽をかけて流れ落ち

笈ノ滝 乃ちしばし留まりて滝つ

とゐつりのぼりて 滝に打たれ

家集

岩屋なる 滝のしら糸 源 令綱

布川主殿頭 岩屋記

七度乃 あさかぜ

○土橋 加茂川に架す

○加茂川 原 東南の二山より流れ出て市ノ坪 橋本村の北にて土橋の下を過ぐ

昊 昊洋水仁徳之頃中人云と見ゆ 全文不詳

布川 百姓内乃四村を専ら仁義と

仁嘗

いへる 薯蕷 芋 を産物とす

竹園社 橋本村乃東 勢揚四村より 段舟山栖雲寺 吸秀庵と

橋本村 宋西山 本阪より 本阪より上人 拡て浪中 小泉村 小泉村

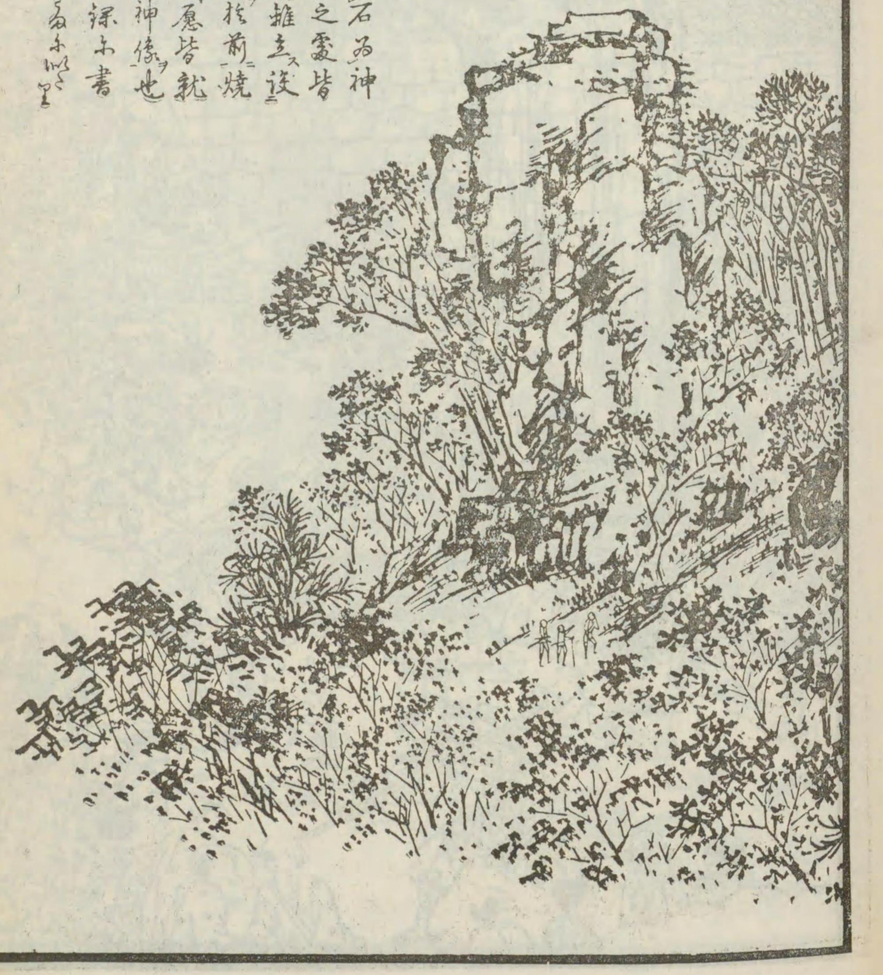
阪本 本阪より 本阪より 本阪より 本阪より 本阪より 本阪より

陳下 本乃ち寺内より 石塔三基を 文明十七年四月日 左右を

生時乃地を 本坊乃 碑より

引尾村立神社地寺叢の図

凡許願皆以石為神
凡神嶽叢祠之處皆
有巨石數叉雜立設
香爐炷香燭於前燒
酒設牲菓卿願皆就
石默供不設神像也
已中山傳信録亦書
之乳



立神社の廣前にて雪祭踊と名づくる圖

踊哥數多ある其一

杉の木立にて月こそれがくらくらくらくらて

あがる

にんぎつえ 岡村乃北峠十丁二町 名草郡萩原村より此峠を越す南在
仁義越 那賀郡之処に寺を経て来る
松尾庵 引尾村乃東の山本
ありまに一大伽
立神社 岡村乃小名敢勘ふありて仁義四村乃産土神なり天永元年神
を祭るといふ加茂神社の風会考ふへし 例祭九月五日
靄然たる杜乃こゝ奇こゝ霧蒼ひこゝ絵さして立神と
称ふ甚一ならさる木陰枝八方に伸展して一大伽藍
を吸ふかの如くなれるが如し和の神寂出てる者乃もの
といへり基立神と称ふ
て祀まつる例年五月乃祭乃外は旱
魃乃季ふ当まて四村乃大祝を廻まつりて
雲祭を頭まをもちて出雲風土記ふ神名樋山と
石神あまて早に雨をこひ雲らしむと見えたるふ同し
古風乃遺称なるへし
を経てみるふ乃ふ上ふ柿そう赤
おく雨乃降くるさなを表にくいへり 要ふ小枝を
ありを持ちて笹とを要ふ小枝乃具とは此あの湾

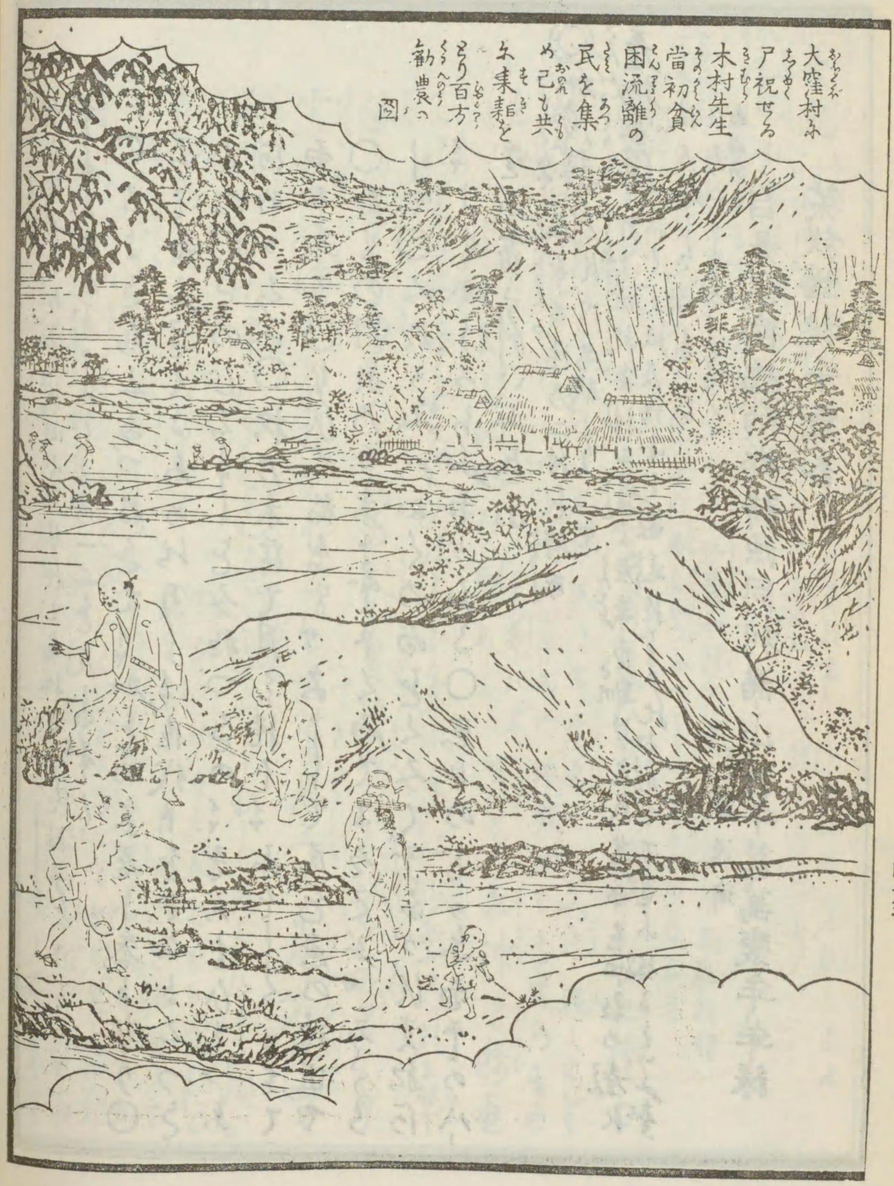
ふを注ふふありて大同ふ文
るまた雅あ迎り化むそ
の二二を九ふ手ぐ
○きよさあ上あづ
ちそやふまくるあめ
もの○さのむそ
ためがそ○枚乃本
あげふる○かびく稲
○かもの川流乃サ末
○や○ふれらみち
イヤよもおうろふ
重ふ霧ふ川いぶき山

◎加茂驛
産物蜜柑

拝乃ふ
南海詩集

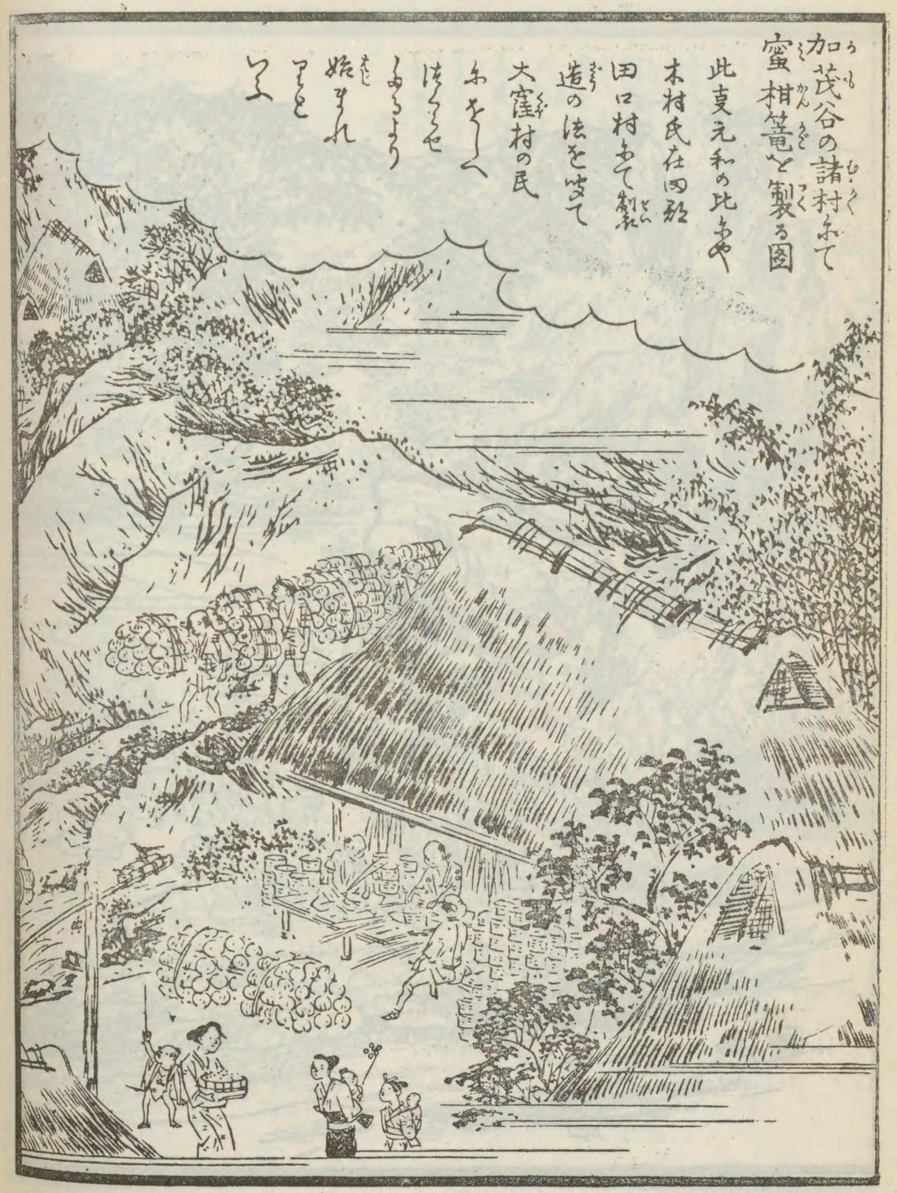
自是江南橘柚郷耕漁同利満山霜千筐萬顆年年緑
祇源瑜
茱萸蟠桃千歳香

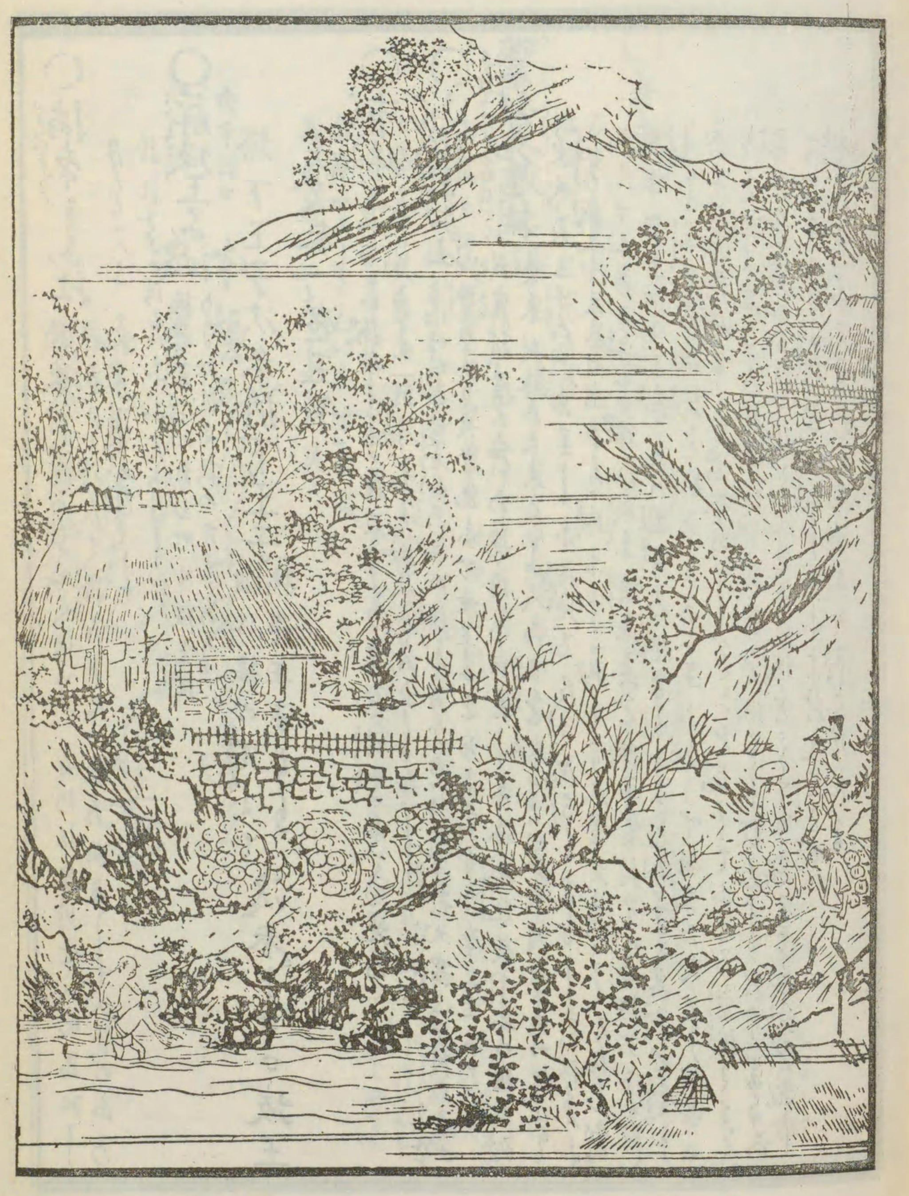
大窪村ふるつゝア祝せる木村先生當初貧困流離の民を集め己も共ニ耒耜をとり百方勧農の図



加茂谷の諸村ふて蜜柑篭と製る図

此支元和の比ある木村氏在田郡田口村より製造の法を学て大窪村の民ふをしへしよりこゝに始まれりと





○橘本王子社 橘本村にあり土人僧坊と云ふ 白河院御幸の時当社にて
通夜し給ひて橋乃下に一夜乃旅寝して入佐の山乃
月をとつくる みなと瀬をふみしとぞ
ゆかれども はなにふる 花かなし

○蕪坂王子社 橘本王子の南三町許坂上に あり 社殿に松の古木あり

御幸記云 塔下王子次参榎下王子 榎ハ橋の辺にて 橘本王子なり 次参トコロ坂王
子次参一ノ壺王子

○市坪 橘本に接したる村名なり 市を借字にて田地乃
坪の字一の坪より出たる名なり 市坪沓掛大窪三ヶ村の産土

○山路王子社 市坪村宮谷乃西の郷にあり 市坪と云ふ事なり 李文上にも
神なり 丸堂池に一ノ壺王子と云ふ事なり 今合祀して 永禄の頃の旅
大窪村奥吉神乃境内にありしに今合祀して

○木村先生祠 吏木村八郎大夫といふ人乃霊を祀るといふ 此村豪士の子孫にて
其氏族五十六戸あり しに 此地乃役并に代官くなりしが 父子に
戸籍減し 元禄の末に至て 終に十二三戸となれり 先生いたく之を憂ひ
ひて十三年の春を備へ 戊年に自農具を操りて 村中の田畑を作りし
に 年貢上納すら充ざれバ 国家乃役儀かなはざるを知りて 其由を官に
達し 今の下乃租税を免さ 寛永二十年に至りて 離散の民をよび集め
於土地乃薄確なりて 其産のなかりしを察して山谷乃空隙まで多く
外を植て 農事乃余力に蚕の桑を作らしむ 是より村中農家の
易きを覚ゆるのみならず 生産の便をえたり 因て其恩沢を感じ
て 宝暦三年小祠を造営し 私に木村先生と称し奉り
崇めといふ 先生乃故居今猶か屋となれり

○地蔵堂 沓掛村にあり 石仏に地蔵 阿弥陀
二尊を彫りたり 此辺を桝形といふ

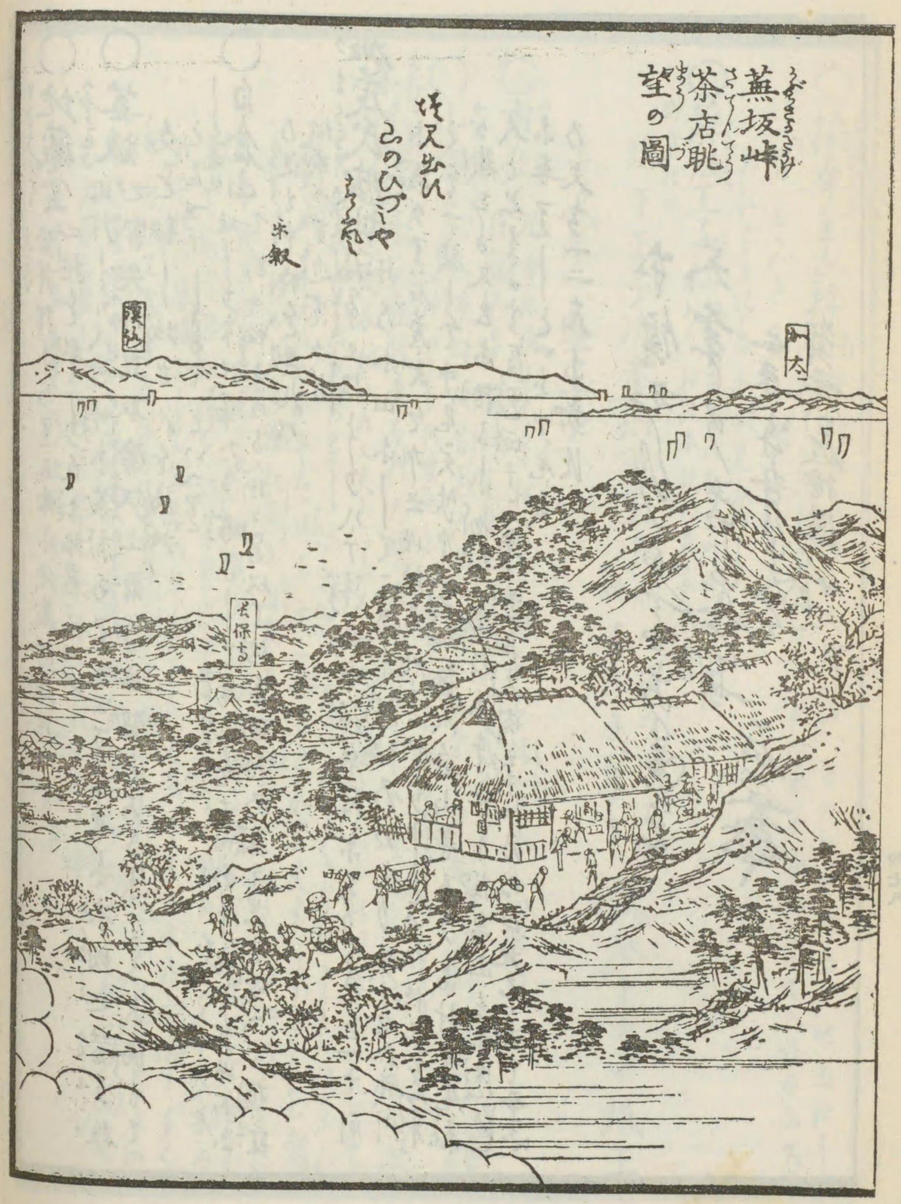
○笠坂 同村より八町峠にあり 藤代の坂上 爾曾安留とあるによる なりて
之 響失用距取靡坂 或云万葉集に木ノ国之昔弓雄
鏑を射し坂なれば 猟坂
とをつけしとぞ いへり

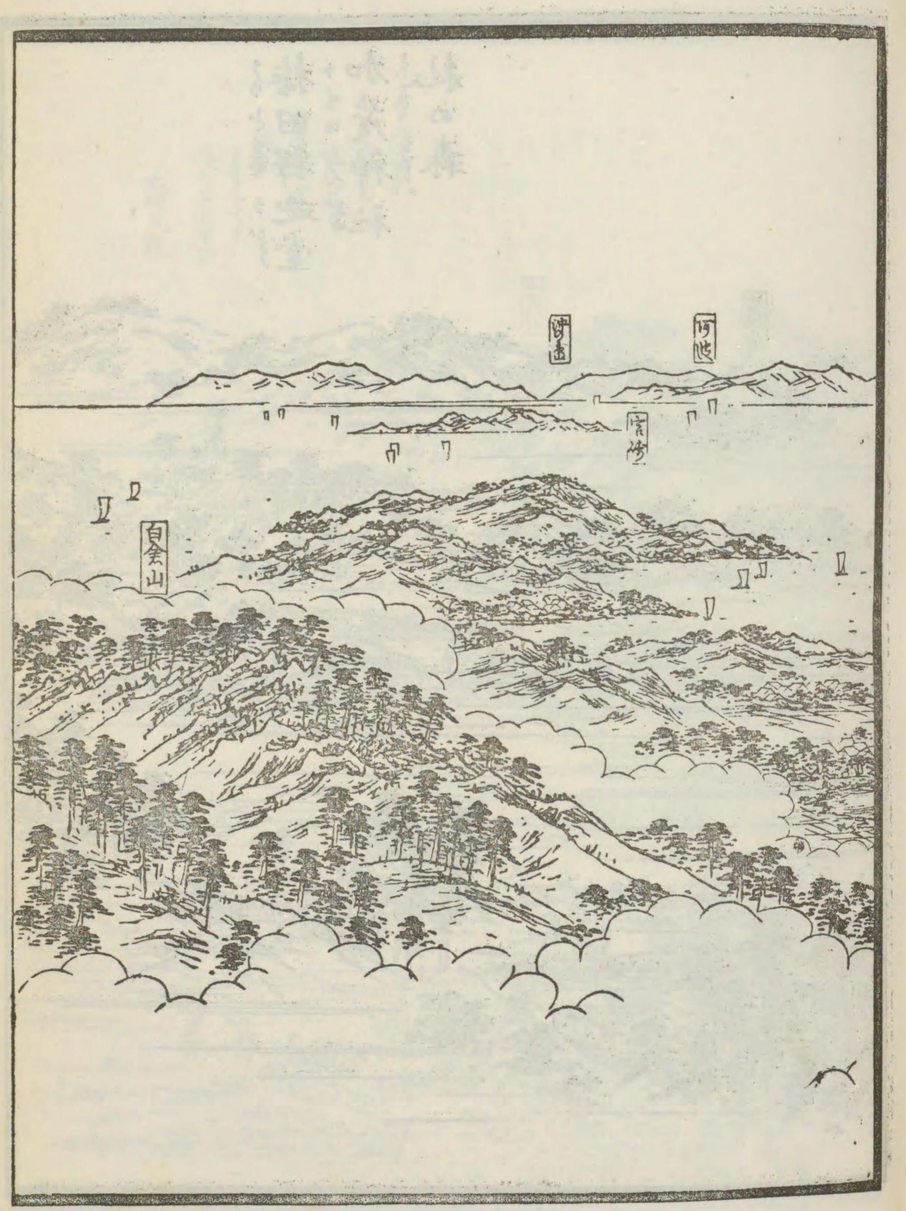
○白倉山 坂より東に聳えたる嶺にして 南面を主面とせり 此下に
て時々怪奇のものを以て 人を欺けば 乃の怪しき事と呼へて 樵蘇
乃徒も申ノ時を過れば
相戒めて 近くよらず

加茂氏城址 橋本土橋より八丁許西小松原村にあり 高さ二十間
許乃小山にして 三方に塀の跡あり 東の方は加茂川
に臨めり 加茂氏の本丘此地乃外に在しといへり 伝へて云ふ 往古
より一族にて中尾実世中の城 橋爪前山等あり 当村中尾孫
が蔵せる文書に 援るに 初め南朝に仕へし 後島山氏に従ひ
人と見えたり 天正十二年 豊臣大閤紀州の時 此地を去て 粉河
に寄りしといふ 中尾氏
乃文書一二九に載る

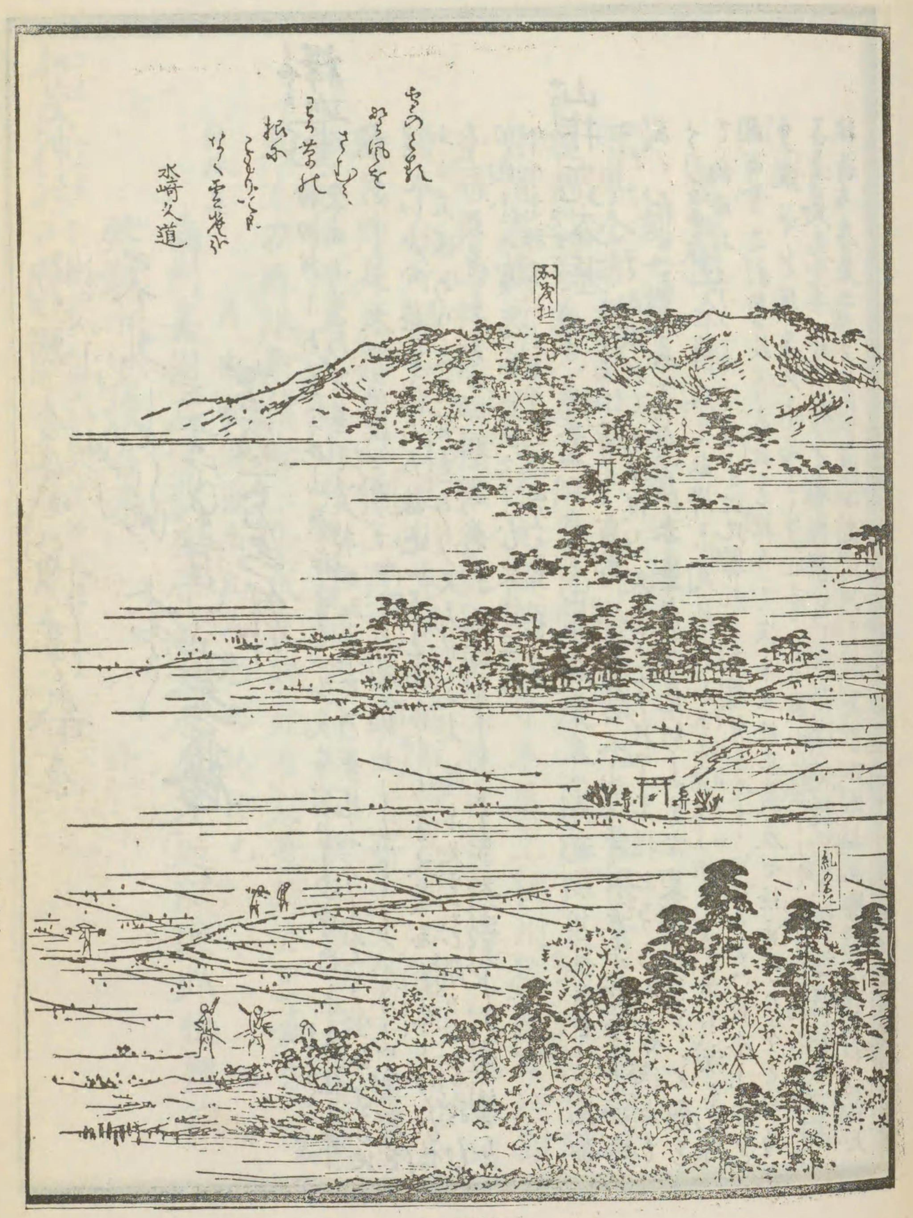
本領知行 分遣之
天象之 上 出 判 在判
正平八年九月十五日
賀茂遊将監所

蕪坂峠茶店眺望の圖





梅田釋迦堂
加茂神社
糺の森



水崎久道

紀州名草郡太田村ニ在リ天台宗ニシテ寺領二百石ヲ有ス

釋迦堂　俗ニ太田村ノ釋迦堂ト稱ス寺ハ同村ノ西ニ在リ

天平二年行基菩薩ノ開基ニシテ本尊ハ丈六ノ釋迦ノ木像ナリ

山井崑崙墓　同寺ノ墓地ニアリ

ふるゝを奇貨とする如きは亦嘆ずべきの甚しきものなり近時諸藩士中屢〻此書を引用するを見る

學經室全集

刻七經孟子考文竝補遺

七經孟子考文竝補遺序

四庫全書新收日本人山井鼎所誤七經孟子考文并物觀補遺共二百卷元在京師僅見寫本及奉使浙江見揚州江氏隨月讀書樓所藏乃日本元板落紙印本攜至杭州校閱羣經頗多同異山井鼎所稱宋本往々與漢晉古籍及釋文別本岳珂諸本合所稱古本及足利本以校諸本竟爲唐以前別行之本物茂卿序所稱唐以前王段古備諸氏所齎來古博士之書誠非妄語中畧又曰山井鼎等惟能詳紀同異未敢決擇是非皆爲才力所限然積勤三年成疾幾死有功聖經亦可嘉矣下畧

昇也母鐶摘南紀人也南紀物也

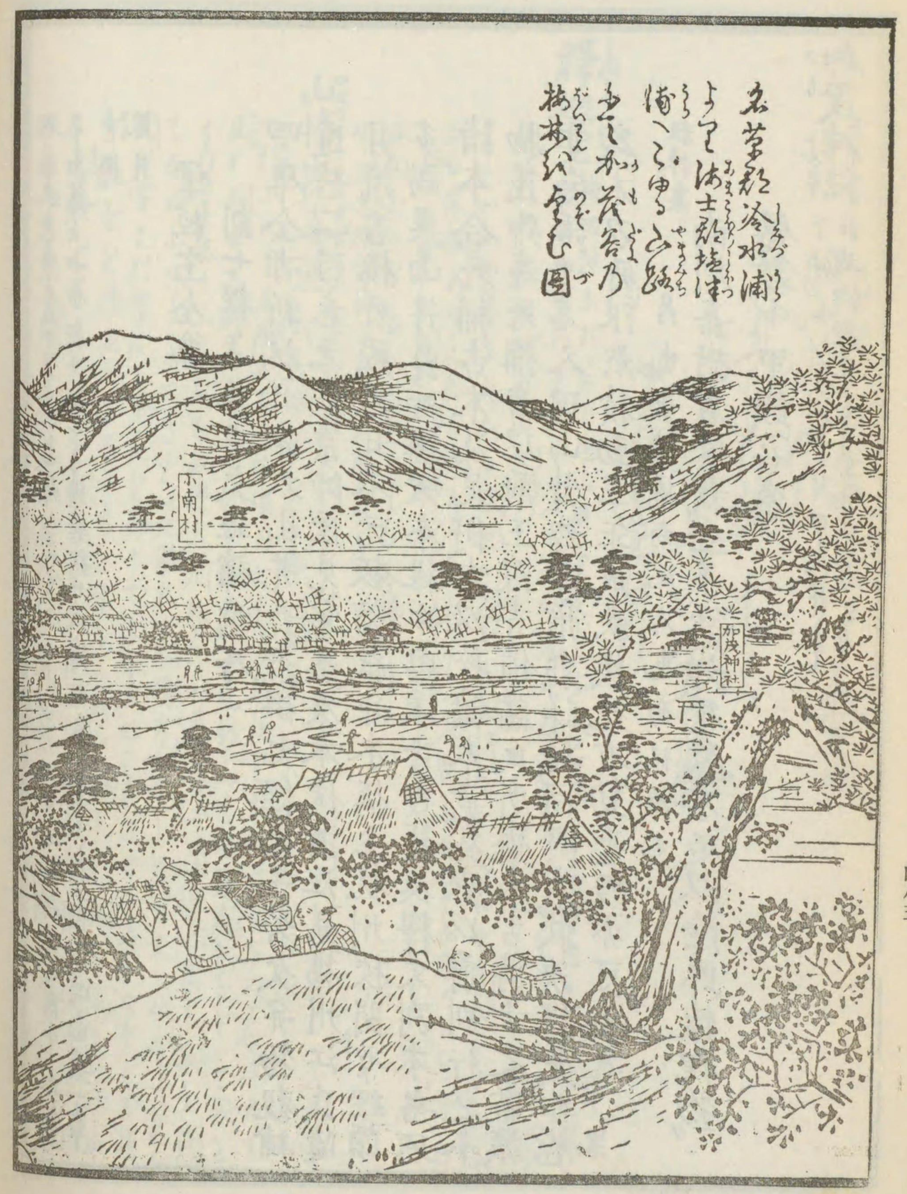
祖徠集

南州嘉樹后嘗栽生子欲如屈原才迺以陸郎懷裡物

慤懃千里饋吾來

加茂神社（ト村ニアリ七ケ村ノ氏神ナリ）社頭數株ノ梅花ヲ詠ス

名草郡冷水浦
より海士郎塩ほ
焼くと申す所
まことか我谷乃
梅林ぜひ尋ねむ図



谷川の
せゝらぎ聞乃、
ゆくとなく
とゞまるとなく
うら静かなる
拾帯少ゝ

八幡宮（合祀）八月十九日

百練抄ニ寛治四年七月廿三日加茂上下社被奉ニ不輸田
ニ百餘町ヲ為ニ御供田ニ近日稱ニ有ニ霊驗ニ御膳祓神税不ニ
又令ニ置ニ御厨ニ於諸國ニ云々見ヘ侍レバ無ニ源泉ニ地ニ山嶺ノ加茂
乃井水ヲ引ケルヲ甚神ヲ遷シ犯ルヽ又正平天授
ノ文ニモ加茂氏ノ人ヽ云々地名ニモ出ル氏ヲ絶ヘ加茂谷
乃名ヲ猶ヲ遠ク祢社ヲ守ルヽ久シ
領ヲ
ヲ遷シ
申ニ祢ヲ
祀ヲ
の祢無ニ祢ヲ
ヲ
廣シテ
と
大檀那加茂大夫春宗
梅林
老衲縱唫

延喜遷都ノ事ヲ
しるせり
名ヲ加茂暗部ト
多ク氣味
老衲縱唫雅人自有雅人知

四八七

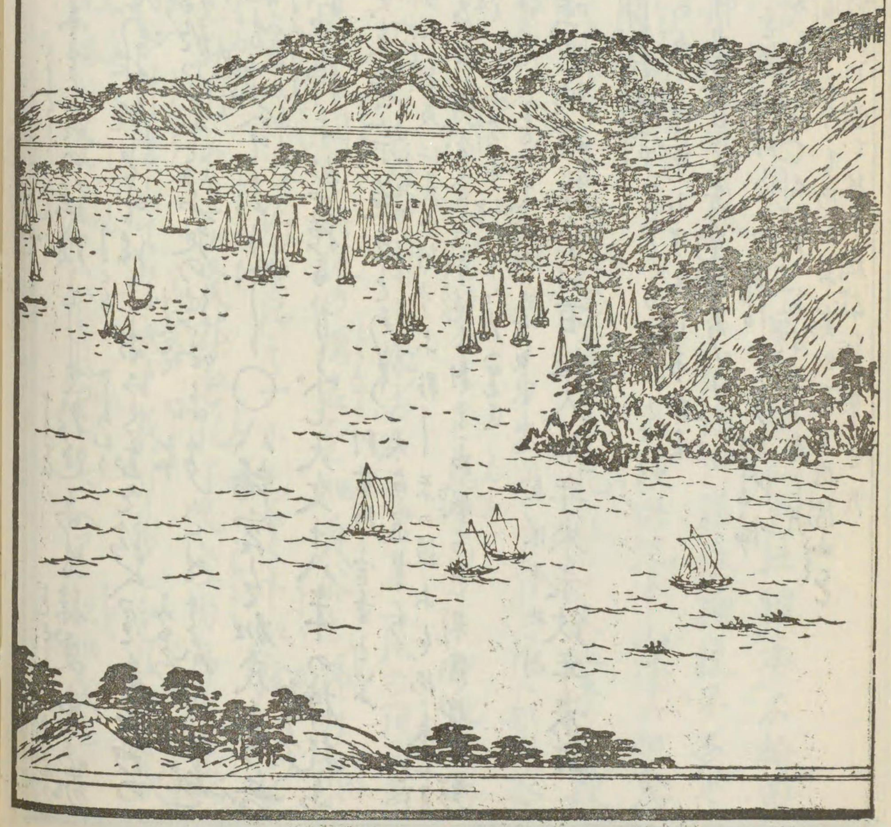
延喜遷都ノ事ヲ載ノ
しるせり
名ヲ加茂暗部ト
多ク氣味
老衲縱唫雅人自有雅人知

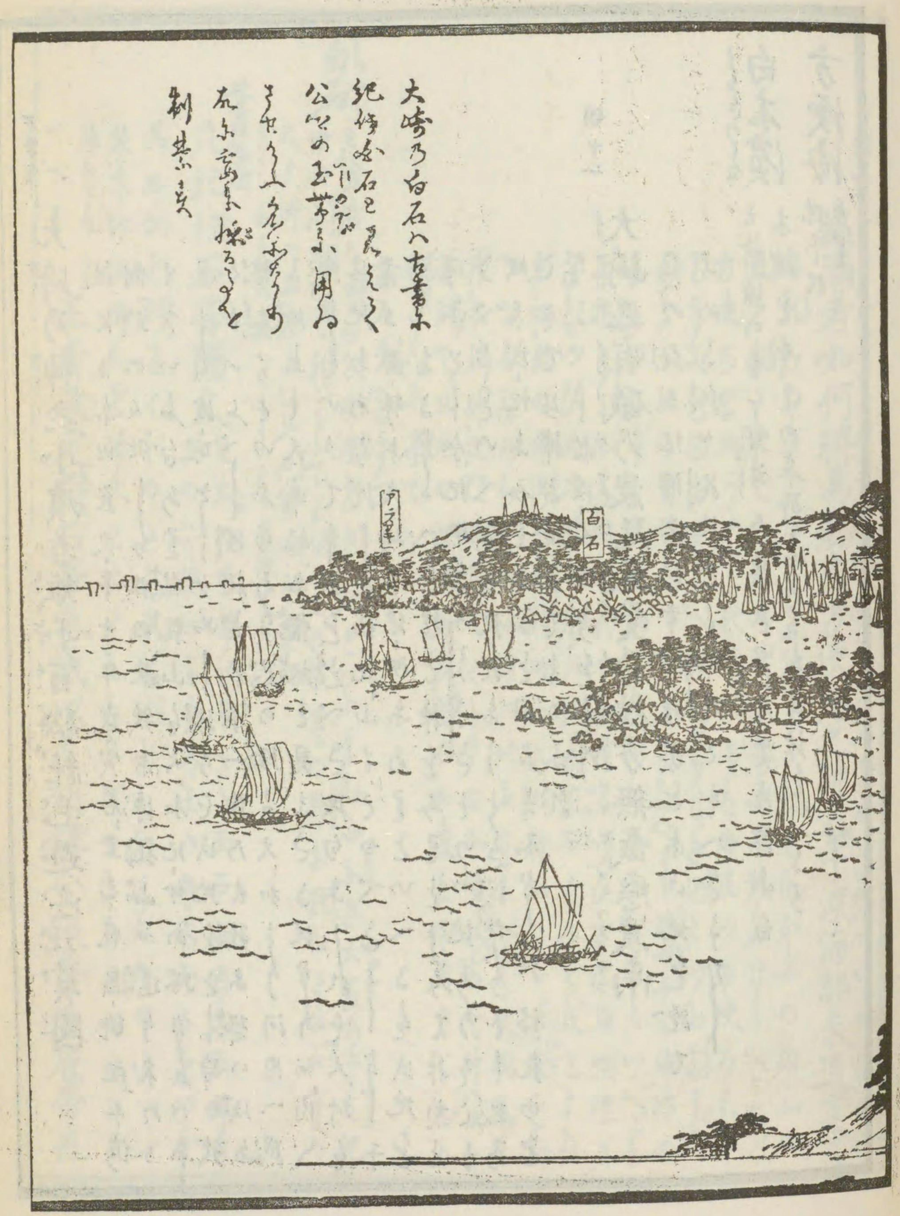
梅樹花開梅樹詩

津田瀑布　小菊村ノ東二町許ニ山中ニ有リ神名
冷水越　下村ノ北山ヲ冷水峠ト云ル道
大寄浦　乃チ坂ヲ西ヘ下レバ左ノ方ノ海ヲ大寄浦ト云ル也

四八八

大嵜浦の圖





大崎乃神之小濱者雖小百船純毛過通云奠國
（大崎乃神之小濱者雖小百船純毛過通云奠國）

同十二

大崎之有磯乃渡延久受乃往方無哉戀渡南
（大崎之有磯乃渡延久受乃往方無哉戀渡南）

白木濱
（白木濱）

大崎浦の南一町許乃海濱を幸處の名所と
（大崎浦の南一町許乃海濱を幸處の名所と）
いふなり

方便海
（方便海）

鹽滿者如何將爲跡香方便海之神我手渡海部未通女等
（鹽滿者如何將爲跡香方便海之神我手渡海部未通女等）

白石
（白石）

大崎浦乃方便濱を
（大崎浦乃方便濱を）
伊乃の石と
（伊乃の石と）
又大崎の石とも
（又大崎の石とも）
水晶の
（水晶の）

紀伊石帶隱文
（紀伊石帶隱文）

凡紀伊石帶に
（凡紀伊石帶に）
其畫文を
（其畫文を）
裝束抔
（裝束抔）
いへる
（いへる）

貴賤共に
（貴賤共に）
大寶
（大寶）
古紀
（古紀）
純白
（純白）

白上磯とも
（白上磯とも）
大寶
（大寶）
純白
（純白）

又大崎の石とも
（又大崎の石とも）
水晶の
（水晶の）

貴賤通用
（貴賤通用）

凡紀伊石帶隱文
（凡紀伊石帶隱文）

貴賤共に
（貴賤共に）
其畫文を
（其畫文を）
裝束抔
（裝束抔）
いへる
（いへる）

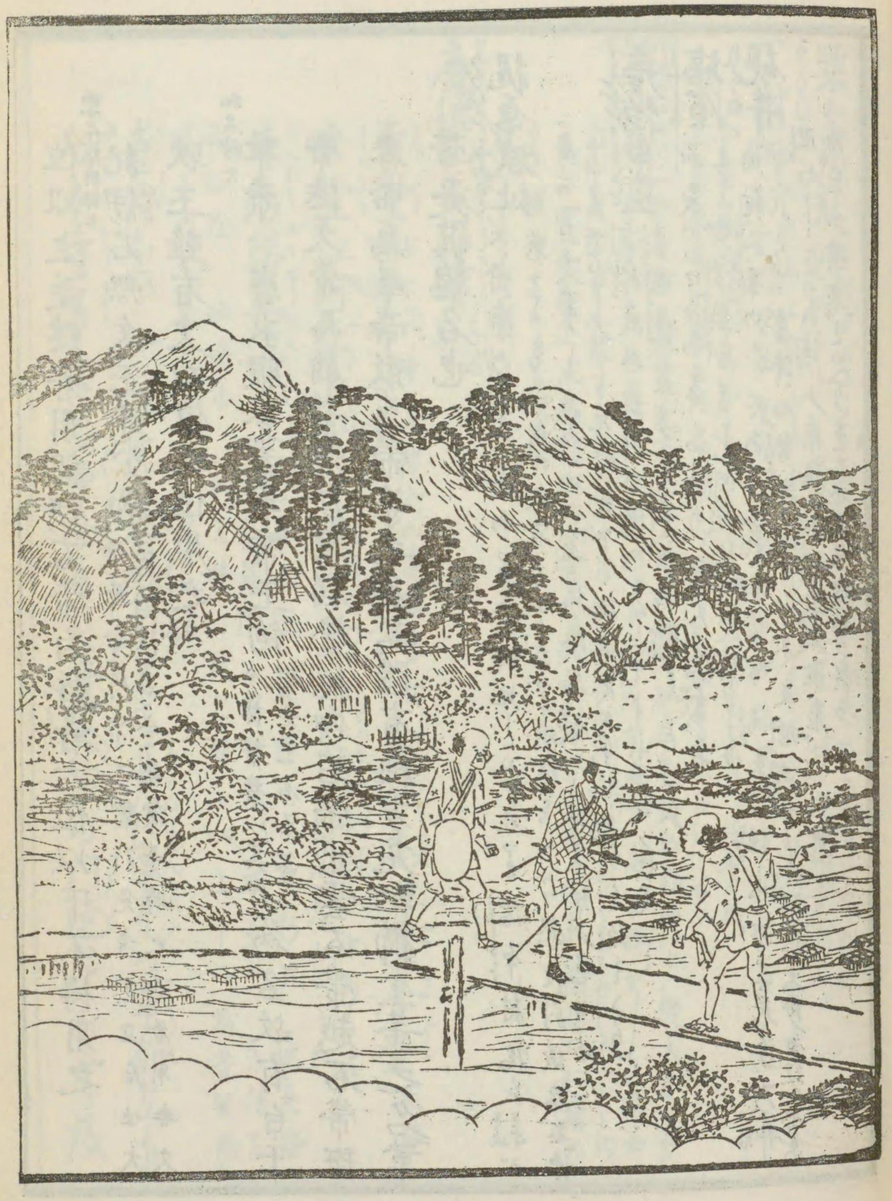
貴賤通用
（貴賤通用）

王者及定摺石帶參議以上刻鏤金銀帶及唐帶五
（王者及定摺石帶參議以上刻鏤金銀帶及唐帶五）

方の川口ふて
白魚を取る図

白魚や
ふるへつくれい
ふるゆれる

せんぐ宗社月



位以上並聽着用紀伊石帶白皙者六位以下不得用之

西宮記臨時部七 紀伊石無文王等公卿除節會行幸大饗引見考定立后任大臣相撲召合慶賀等時之外者用無文略

和名鈔云 革帶 唐衣服令云革帶玉鉤 今按革帶以其所附金玉石角等為名故有白玉帶隱文帶馬腦帶紀伊石帶出雲石帶越石帶班犀帶烏犀帶散豆帶等之名其體有純方丸鞆擬上等之名革帶是其總名也

梶原城址 大崎浦乃山上有之至今畑地ト化シ殆ト痕跡ヲ留メス 楊梅村 楊氏舊ク此ニ居ル故ニ名ク 巻之一の十六丁参照

産物白魚 方村ノ沖ニテ漁獲シ多ク賦税ノ一ニ充ツ 元和ノ比ハ加茂川ノ海ニテモ漁獲シ多ク賦税ニ充テシト云フ

塩濱 加茂川ノ小巻ニアリ 冬ニ至テ塩水ヲ汲ミ来リ塩ヲ製ス 巻之一の十六丁参照

硯井 同村山裾ノ磐清ノ間ニアリ 硯ヲ製スルニ用ヒシト云フ 磐清ノ間ニ向ヒテ涌出ツ僅カ三尺許ノ井ナレドモ冬夏増減ナシ 法木抄ノ双璧ト称セラル 巻之一の十六丁参照

濱中郷

和名抄及雲芸記下巻中ニ連祖父驛吾者海部郡濱中郷ノ人ナリトアリ 今ハ其名ヲ聞カズ 濱中ハ今ノ加茂谷ノ辺ナルベシ 巻之一の十六丁参照

栗名山神社 同村小名中山ニアリ 海部郡栗名郷ノ栗名ト同称 巻之一の十六丁参照

丁村 同村ノ西ニ居ル故ノ名ナリ 本人此地ニ住シ地名ヲ呼ビ名トセシナリ 巻之一の十六丁参照

慶徳山長保寺

本堂 方七間半 世雄殿ト書セシト云フ 釈迦如来 巻之一の十六丁参照

食堂 上ニ阿弥陀堂ヲ九 **鐘楼堂** 大門 金剛力士アリ古

寺傳ニ云 一條院ノ勅願所トシテ長保年中ノ草創ナリト 故ニ寺号ヲ慈覚大師ノ門徒ナリシヨリ授ケ

奉坊陽照院 子院 専光院 最勝院 地蔵院 西福院 西南院 昭応院 普賢院 普福寺 普賢院 沈之坊 以上十二坊

右之多寶塔東ニ 護摩堂 左挟

應永年中永正ゐて高弘字ゐ改め七堂伽藍ゐ造十二箸寺
あもしゐ嘉祥弘此寺ゐ造ゐ給ふ慶雖一時ゐ遷るゐ給ひしゐ
後ゐ復さゐ給ひ佛經ゐ始へさせ給ひて第七兆域乃地とゐ
一定へ玉大門乃額ゐ慶徳山長保寺と書一表ゐ垂ゐ
廿四年六月一日妙法院宮御筆とあり玉ゐ然ゐバ今の堂
舍ゐ應永年遣の佳かりゐぐし棟宇雖狹かゐて眼滿の佛
少一といへども視ゐ者扑實ゐ緣あり要ゐよ玉ゐ
とゆふゐし什物皆國君より御寄附の名品ゐして
拳てゐゐへうゐ

正月十日濱中長保寺ゐて

家集

九重ゐやゐりさてゐゐ新ゐ

同

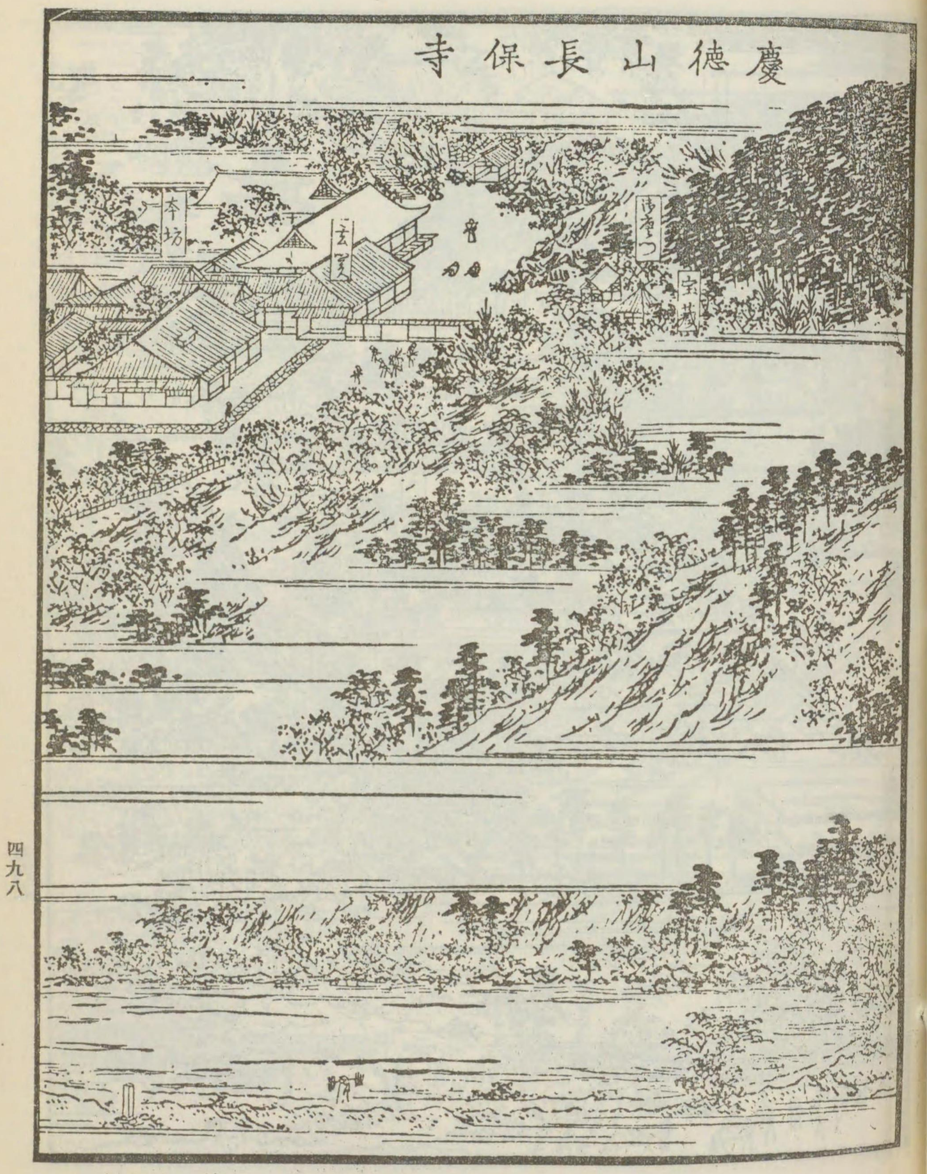
さゐゐゐる深の雪も多ゐ哉

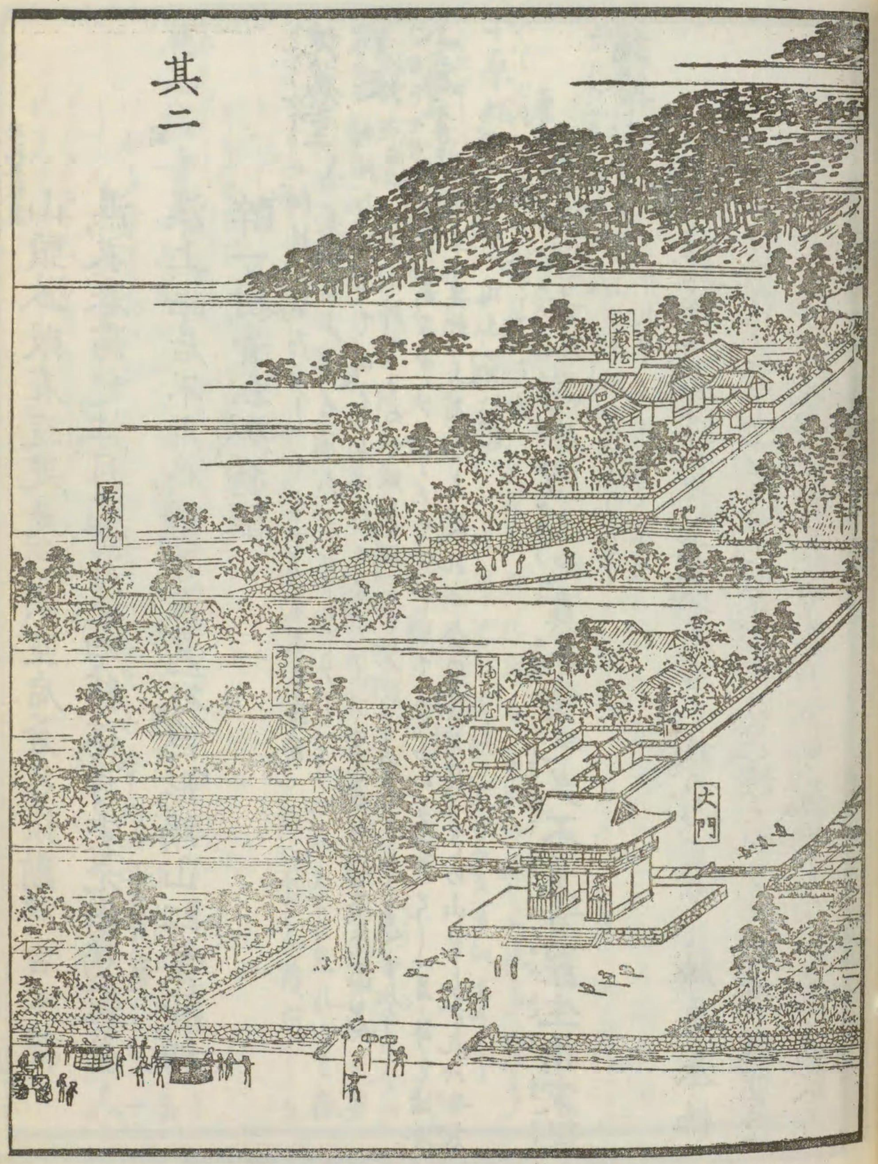
題長保寺

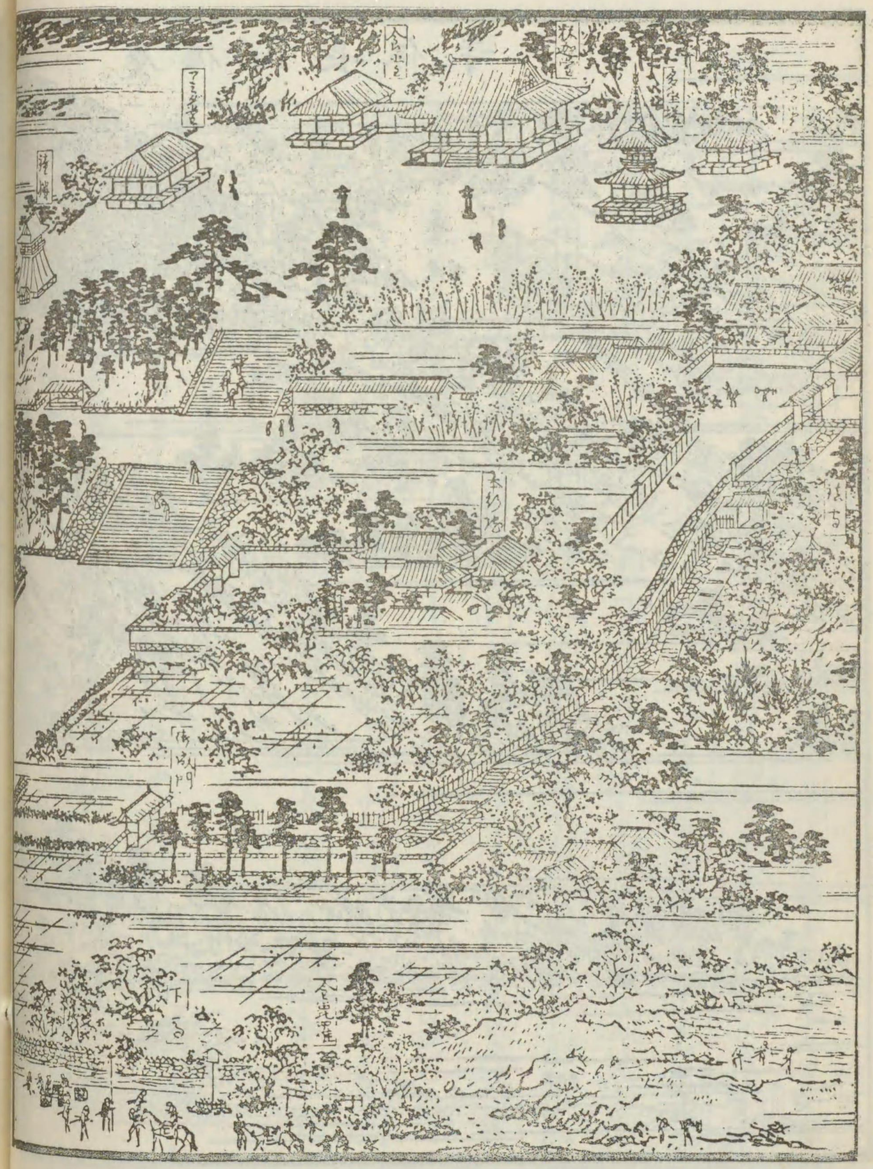
源令綱

同

永田平庵




其二
地藏院
開帳所
大門



山頭孤殿在造建是何朝空庙蒼苔鎖斷碑古心搖
濕衣春靄起注目暮江遥四顧傷神霧老僧獨寂寥
浅井貫齋

同

溪上蜉居不用爲靜與魚鳥欲忘形滿山紅葉皆如
醉一樹青松似獨醒

地藏堂 小梶村より坂乃ぼり一丁ばかりにあり古石佛
多し基といふ

九坂 梶村乃ぼりにて峠をいふ因に云ふ此の場より
さおでの山と洲をさおで坂をぬけて

小為手山 万葉集古事ヲステノヤマと訓ぜり
山年婁郡にありとへれど今の葛坂にぞの山なれバ安太
へゆくとの詞ぬ箭ハビ

安太部去小為手乃山之真木葉毛久不見者薩生爾家里
万葉集古事記傳

緒捨山 小為手山の傍より出て名ぬとなれるを知ぬ此も歌に
猿皮捨とあり万葉集

ふるさとの緒捨乃山猪肝新ぬ恋ぬれ
時鳥緒捨の山乃ぞの上ぬ鳴ぬ
ぞ鳴ぬる

夕さ視じ緒捨の山乃ぞの上ぬ桜ぬ
前参議敦有

夕ぐみぞ佐久る葉小松と立くの山の松のそゝめ 家隆卿
見ぬ久ぬ打ちぞふりぬる緒捨山猿の
夫木抄

風ぬあさを立くの山社多ぬ茂れるといふ弘安
建武 冬永 寛正の棟札の宮あり

明秀寺 小泉村ぬあり浄土宗 境内ぬ地蔵堂あり 俗ぬ
いふ地獄ぬ村ぬあて 天口の北俣ぬ村を北ぬ入るとい
ふ弘安

小泉越 同村より西北ぬ峠ぬ越ゆ 俗ぬ
いふ地獄ぬ村ぬ越ゆ

淺茅石 緑川村ぬあり 雷龍石或ぬ
いふ

椒村 里人濱二村ぬかゝる村名雷天池ぬ
ありしとぞ 椒ぬ
を久礼乃波之加美と
のうと 日本紀歌解 椒の
の説ぬ
拂黄村ぬあり

慶西福寺 いぬ寺西福寺乃ぬ仁和寺末ぬ
仁和寺宮乃ぬ
寺 本尊久多 海又四天
ぬ見ぬ

宛行　御室御領醍醐薬師堂

當仁公文忠景

右彼別當補者宣景寺家進止者仁宣自性
等寺家令存知不論作法
毫厘之妨状如件

西福寺

元弘三年八月七日

足利尊氏公草名

右軍勢并甲乙人等濫妨狼藉

左大臣長谷王の遺
骨を土佐國より掘
村の奥嶋に迁し葬
しの図

此麦靈異記及扶
桑畧記今昔物語
等にも載せたり

鉄槌集

なうら浜のまよそ
ひらけうら山
風こよふつし
まろうふくつき

建麿

特ニ已高徳刑戮ニ遇沙弥以現得ニ悪死縁第一

諾楽宮御宇大八島國勝寶應真聖武太上天皇發大誓願以
天平元年己巳春二月八日於元興寺施大法會供養スヿ千
寶勅太政大臣正二位長屋親王而任ニ僧正一之日時有ニ一
沙弥一盤ニ結ス縛ヲ受ケ破ラ親王見之以ニ牙冊ヲ一以罵沙弥
之頭ヲ破流ス血沙弥摩ニ須打ツ血悔ニ而去不知ニ何許ニ
會衆道俗愉ニ唱ス之言凶之不善矣速之二日有ニ嫉妬人一
奏ス長屋謀ニ傾社稷一將ニ簒ニ國位一爰ニ天心瞋ニ怒ス軍兵ヲ陳之親王自
念ニ无罪而被ニ囚執一此必定死為ニ他刑殺一不ニ如自死一即其子孫令
服ニ毒藥一而絞死畢後親王服藥自害天皇勅ニ捨ニ彼屍ヲ一於ニ城之
外ニ而焼ニ未ニ斂一河擲ニ海一唯親王骨流ニ于土佐國ニ時ニ其國百姓多死
云百姓恵之而解ニ官ニ言依ニ親王ノ氣ニ國内百姓可ニ皆死一之天皇聞

之為ニ近ニ皇都ニ置ニ于紀伊國海部郡挑村奥嶋ニ

一を木苅藻一を小苅藻といふ
ふ所乃島乃加持ふ
とハ是れ

光明山善導寺

洞伏木にあり。浄土宗。西山派惣持寺に属す。○本尊阿弥陀如来 坐像一尺六寸

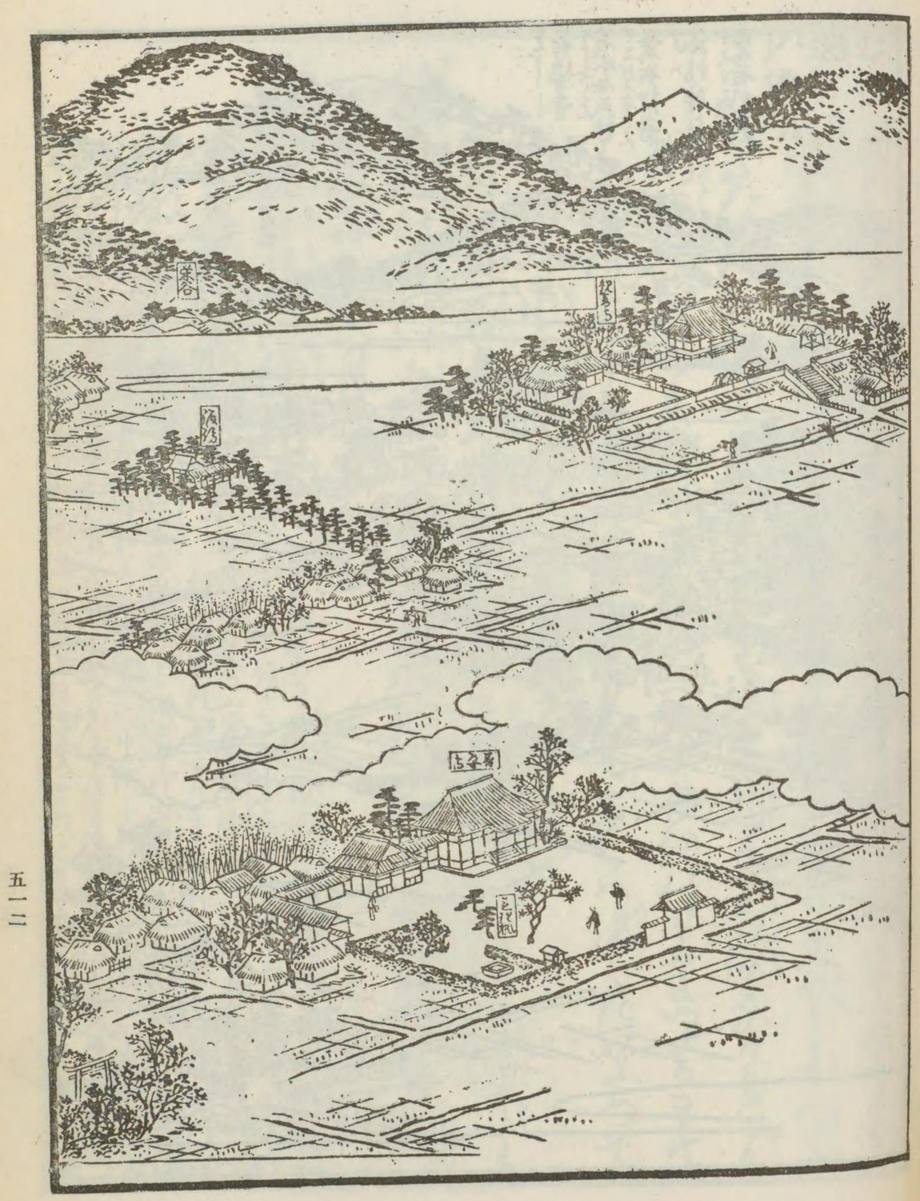
○旃檀弥陀三尊の御像 長け一尺。唐仏にして来迎の尊容なり。天正の頃、わが此の海岸の中より漁夫の網にかゝりしを、上人これを得て、ゆへありて当寺にとゞまりしとぞ。

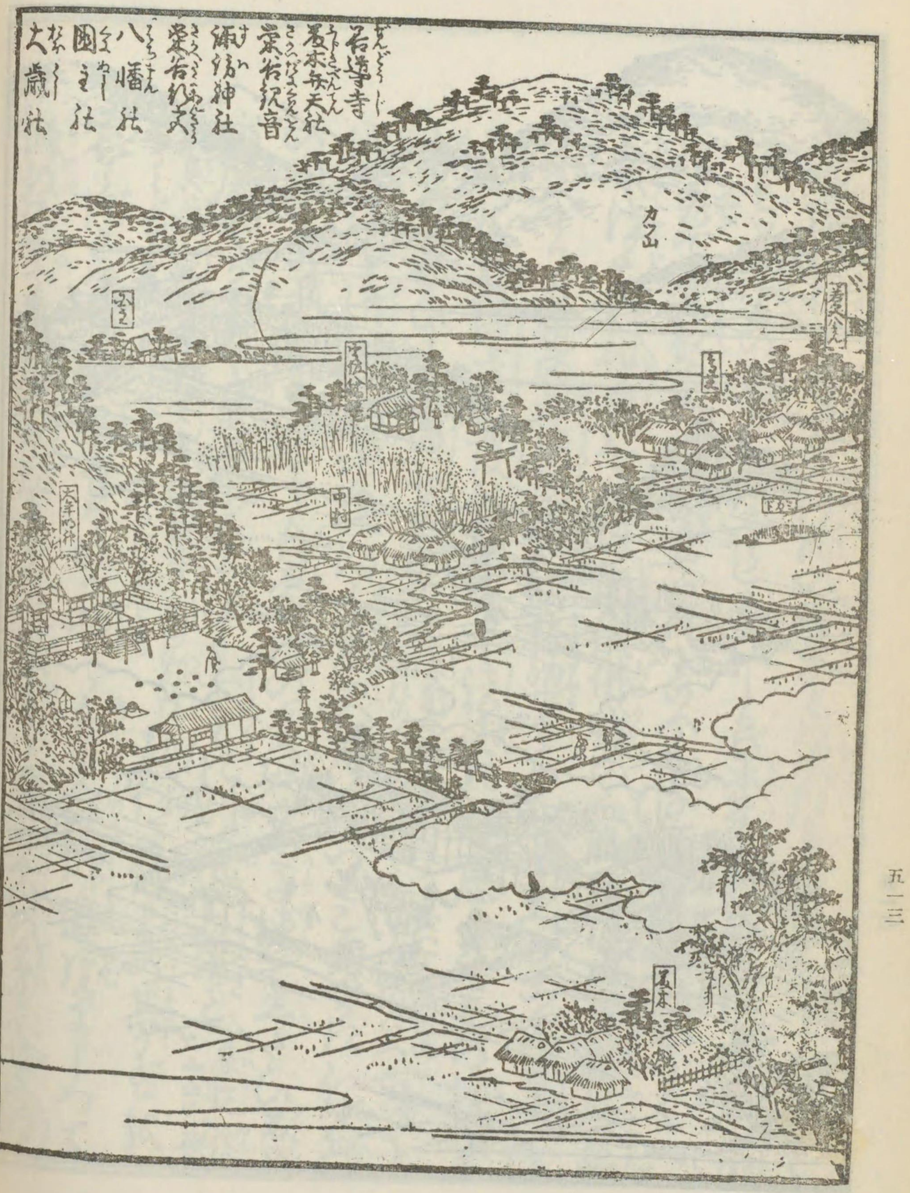
○親鸞上人の御像 長け一尺六寸。○上人の御自作にして、杖をかたげ草鞋をはきたまふ。これは上人越後の国にて、御配所のおもかげを刻み給ふとぞ。

○鎮守天満宮 宮殿は菅公の御自作の尊像にして、火中に入れまゐらせしに、焼けずして霊像なり。

当山は人皇一百代後円融天皇の御代、永和四年、妙務光融上人の開基にして、当寺は寺門広厳の大仏場なり。始祖上人の俗姓をあかしたるは、上総国の人にして、父は利根の何某とかや、いふ英雄の士なりしが、初老のころまでもいまだ一子もなければ、夫婦相ともにこれをかなしみ、観音大士に祈念しておはしけるに、その後信者の奇特むなしからずして、母はたゞならぬ身となりておはれば、

貞和五年の秋、容貌端正の男子を誕生ありければ、父母の悦び大かたならず、唯掌中の珠のごとく寵愛するのみなりき。さかしき生まれつきにて、是上人の出世ある上人、幼にしてすでに世の児の戯れをなさず、合掌頂礼して誦する所は必ず聖号を称するの外なきありさまにて、人これを奇異とせざるはなし。去るほどに父利根君は文和四年京師の乱に戦死したまひ（後光厳院文和四年、南朝正平十年なり）、是より上人ことなし。母はいよいよ父公の菩提をとぶらひける。上人九歳になりてより、あらたに父君の大祥忌なりければ、上人また幼きながらも母公と共に父の菩提を弔らはんと、出家得道にこゝろざしをひそかに思ひけれども、母公はこれをゆるし給はず。かなしみにして空しく年月を送りけるに、光陰早くもめぐり来たりて、父の七回忌となりければ、上人の素願一切に今は康安元年、歳十七にして、同国五妻郡何某村なる普光山善導寺



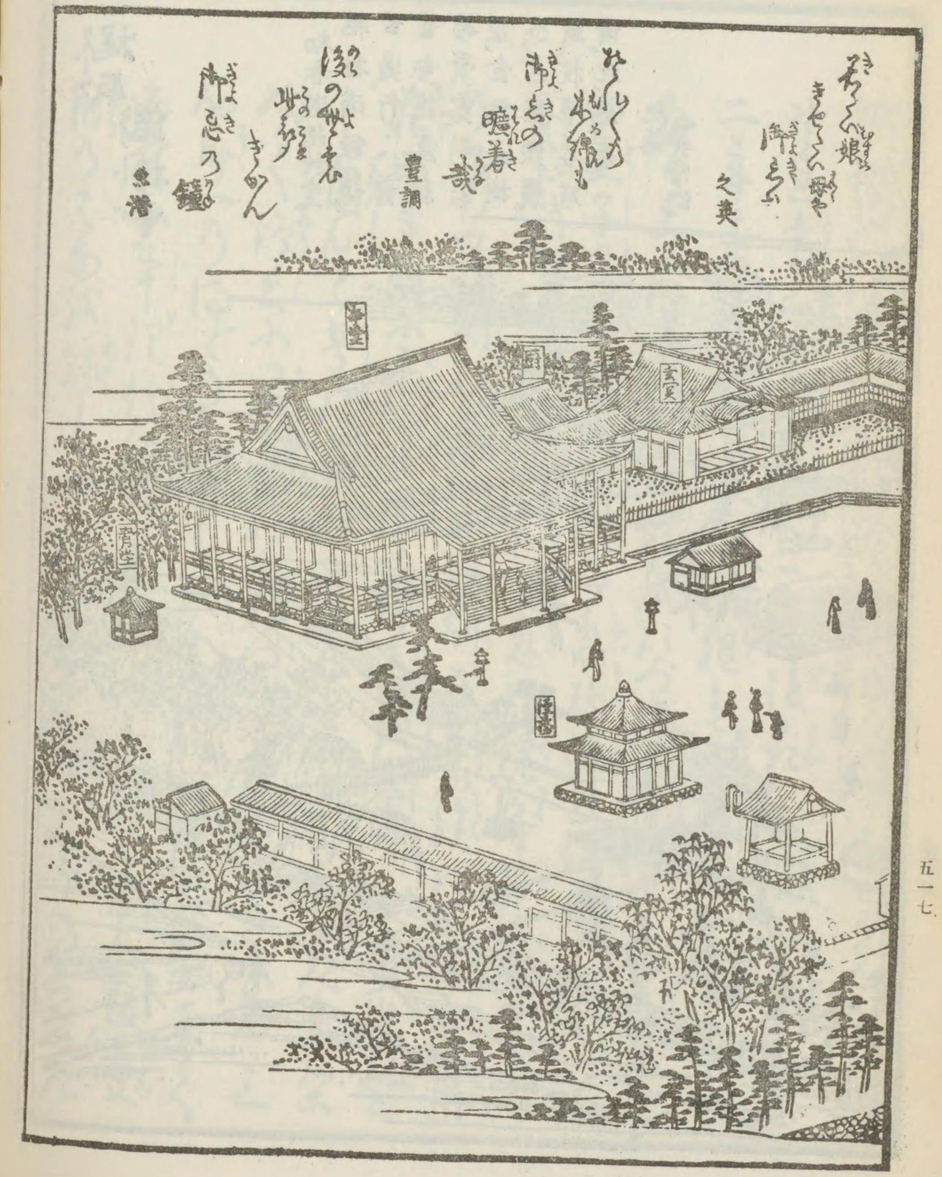


ちうゐひげう給ふ長元二年三月廿九日法眼八十一にして
往生とそ遂ぬ其後持るの剛心明秀光雲上人も
てび場をめでさるくとの
御廃頽れおとびおよ天正の兵火ふ古紀什宝よつるまで
とて焼失し今燒れ
なげ歎おめくわるこころなりしもの
○什寶之部筆のそる
住吉神社 桃原村にあり 此の神の
毎歳六月晦日
受陽山知足院總持寺
本尊阿弥陀如來
堀江村にあり 浄土祖西山流の檀林七ヶ寺の其一
座像にて 佛立浄而の祈りて 白毫に佛舎
利を收れ 立像の阿弥
陀如來を安して 其そくんちんの
おはりて 上人大に悦ひ
勿れ 不可思議のこと

梶取總持寺

初春遊總持寺

祇林雨散後　杏過行人黃
萑卿花度綠　楊帶露新苔
深金跡沒樹　窓鳥聲頻幾
歲投簪客底　憐此地春



五一七

九鬼神社 新権現社

宗園の松　貴志村にある山上にあり（勝國の

世にもきこえ英雄にして

とうやこゝに菊塚のこゝかしこ

真操仏賞ぞこゝ迷愛の樹なりけり

與諸子遊紫谷分題賦得冬嶺孤松詩意咏宗固松　宗固松

在葛嶺西梅村上

祇南海

矯々嶺頭樹。亭々天外條。根元在僻境。名獨自前朝。

偃蓋雪常抱。貞操霜不凋。英雄亦陳跡。萬古望空遙。

北圀山碧巖院　村にあり　作者詳ならず

岩もる水上得林寺　央ふかき

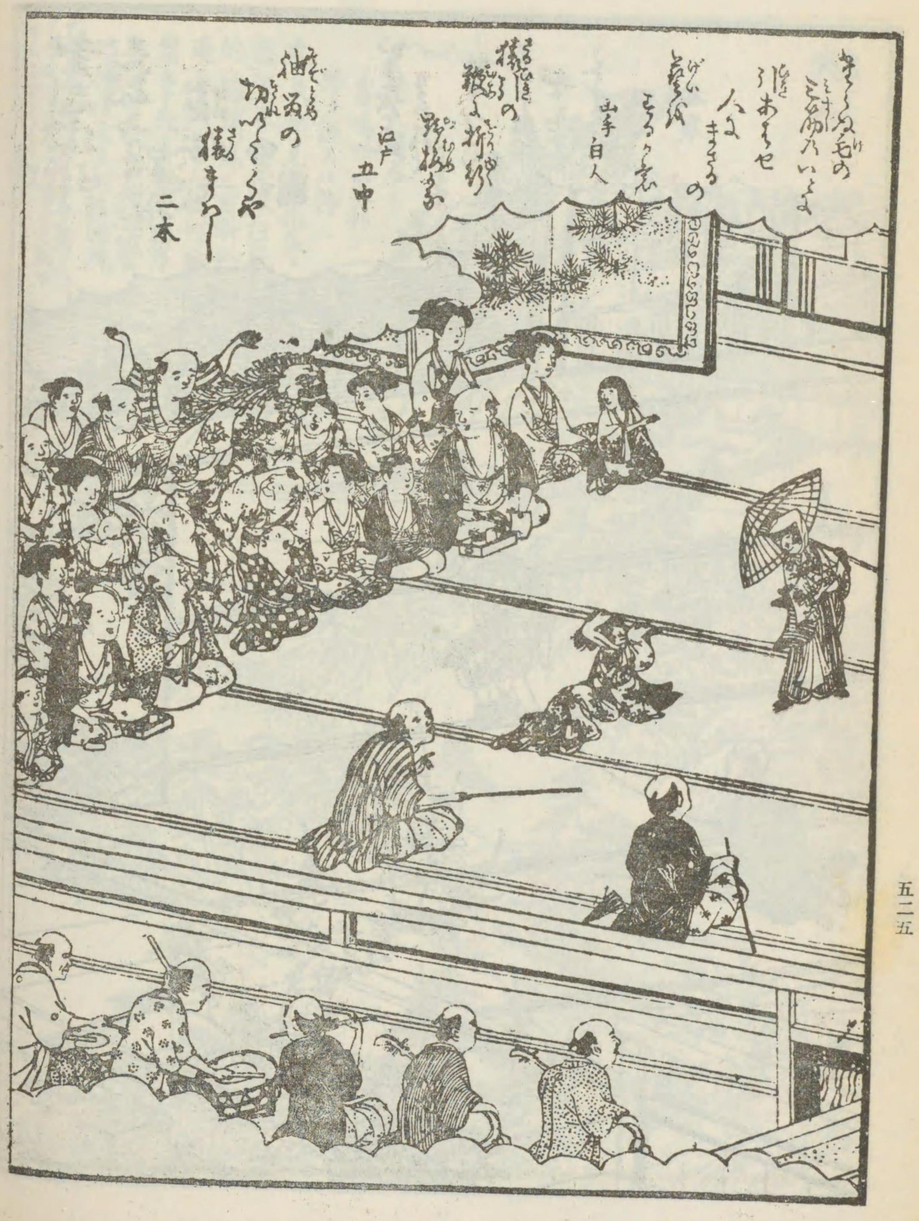
院のうら添ふされた住ひ

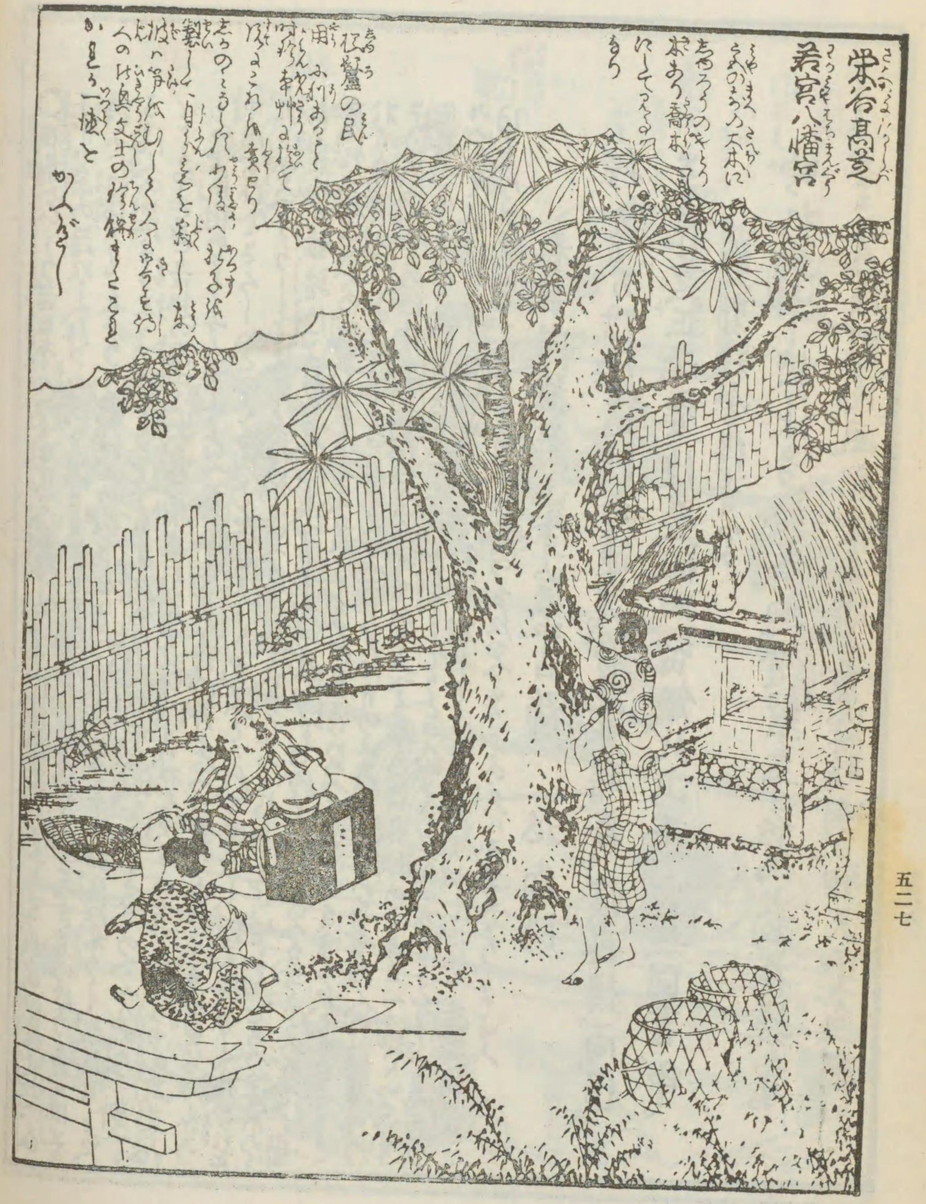
松の大樹数株あつて　緑生の陰いつくも幽遠の

浮人黒き衣日くれた樹下ふみくゆくと古き園圀のあるを

夾山
唐人道本カ
蕭鳴竹二本邦ノ
櫻ヲ詠スル詩ニ
東来初見此花奇
無限春叢護白眉
的皪蝶珠三百斛
瓊玉樹萬千枝何妨
纖李先春艶不與寒
梅逐雪枝若使誼譽
裡種清光多似桂岡時

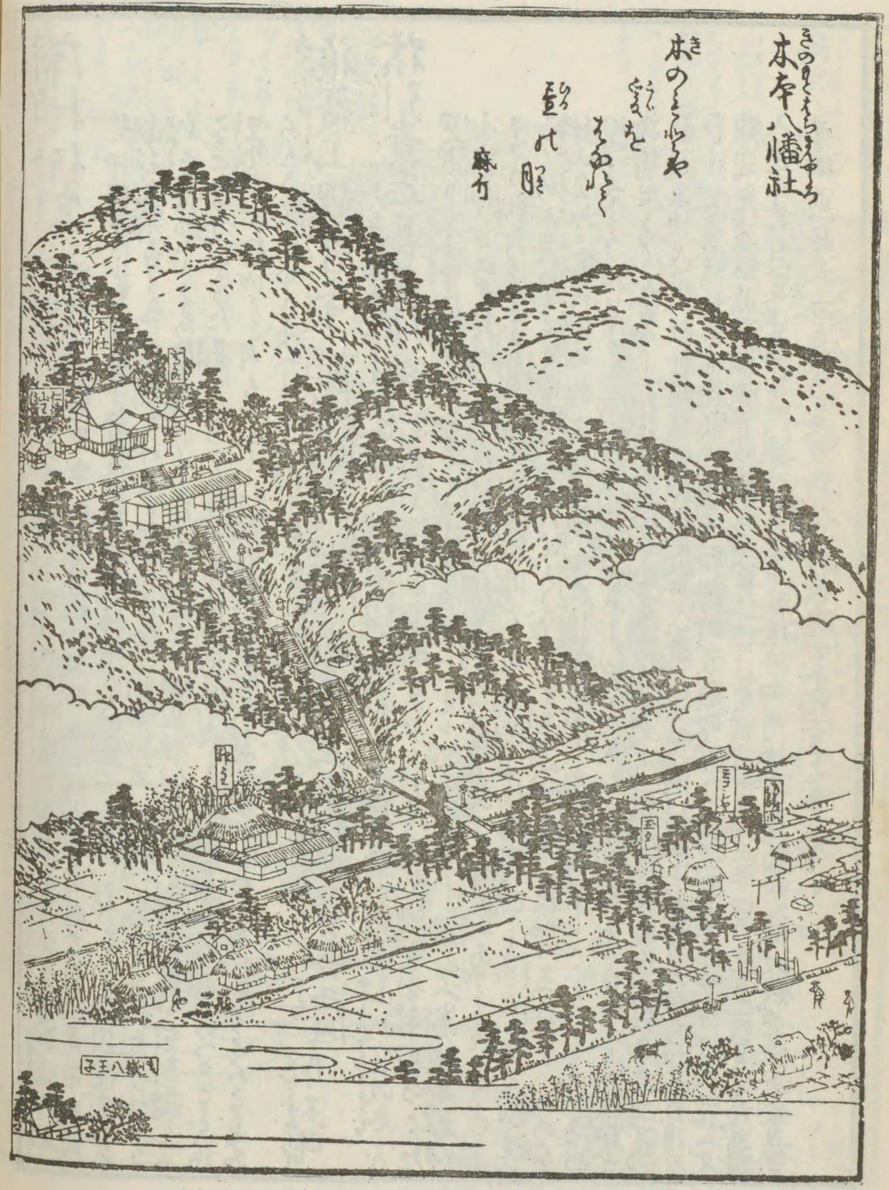
貴志猿引
のづ圖
光廣





栄谷高宝
春宮八幡宮
[illegible]
[illegible]
[illegible]

本年八幡社



八幡宮　本年荘の村の○祭る神三座　本年荘の産神にして

例年毎年八月十五日○當社いわれある宮居なり○祝宜

何某なる家ふるき家慶應永享の間平氏盛前豊前守等巻盛

中務丞盛直などが神仏寄附の帖数多あるうちに古く尊き揭る

ところの類なりとそ是をも藏せりとぞ

疑ふらくはさもあるべし當村藏免し籠の脇ふかくふさし改め

なるうち長二寸と記しるし是右

のこの字を顕しるし其初見にて

字の上に点ぜるが今いとまて

やめいかしも挟ぎるこゝろなく陽こて

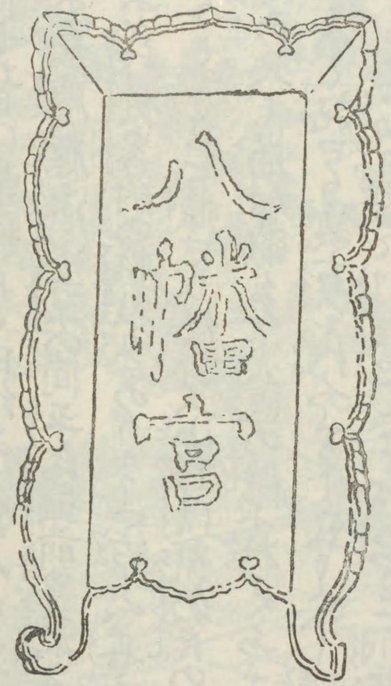
筆をとゞむるふ法頂右雅宮たまの跡うづひもろのく蓋中案以

降天下干戈の擾ともろ世ふ久さる神社仏閣の焼亡ふ

羅ざるく仍来の重宝珍宝焼亡ぞるりの災禍もろ今この

古額の圖

小野道風筆



本家のごとく風そよねりて豊幸の基をしつらひ
十枝おとこ耳化摩利帖木のかと用してろん海内公卿をうとく
どもおけ送遍を免まん鳴呼非う野ふ遠賢ちーとろんも
とく好古の士のこめ其儘圖とちふ歩ん

葛城山

海士なる娘かえ侍幼の四郎ふ頂うく小のうとけてもゆる山いこおもう城のこ
まとうおれのそこをくうろ○五幻掛集抄ひ
二千里なおうろ○五幻掛集抄ひ
れ四おくれーろうひろぐ
おひろふうぐこ
人もそんそひ
べもちぐうおるがこく
峰ろんろんぬけうろ
ひろぐうーとたた
かうてもむぐうこ
そひくうろもよつぐ
の中ろふんぬくーそ
家ふんまがれふくまいふーて
ひぐぞるうたふーのおうて
ひぐうとんろうたくとも
えおうこそもそれ
ーにおまうみそくくふもまれ

墺の浦

秋入ふふまつてあれもおうけうまつ
千ぼる親田ー民戸も連ぼぐ

紀の海乃さひの浦の沖り波も
お袁外寿のさひのうの様ひのあうん

○松も末にもお袁外紀の海あうこのちふたうた形ふの浦あう
りーくおうろうてとようつけてとれ所れきく

続古今
秋入ふふまつてあれもおうけうまつ
千ぼる親田ー民戸も連ぼぐ

紀の海乃さひの浦の沖り波も
お袁外寿のさひのうの様ひのあうん

○松も末にもお袁外紀の海あうこのちふたうた形ふの浦あう
りーくおうろうてとようつけてとれ所れきく

塩竈地藏尊

大歲神社

貴志莊楠原村にあり

本國神名帳に從五位下大歲神當社

○村の産神ふして例年毎年六月二日

國主神社

神社の奮地もうとを

住吉神社 小嶋村にあり 一村の産神にして 例祭毎歳九月晦日

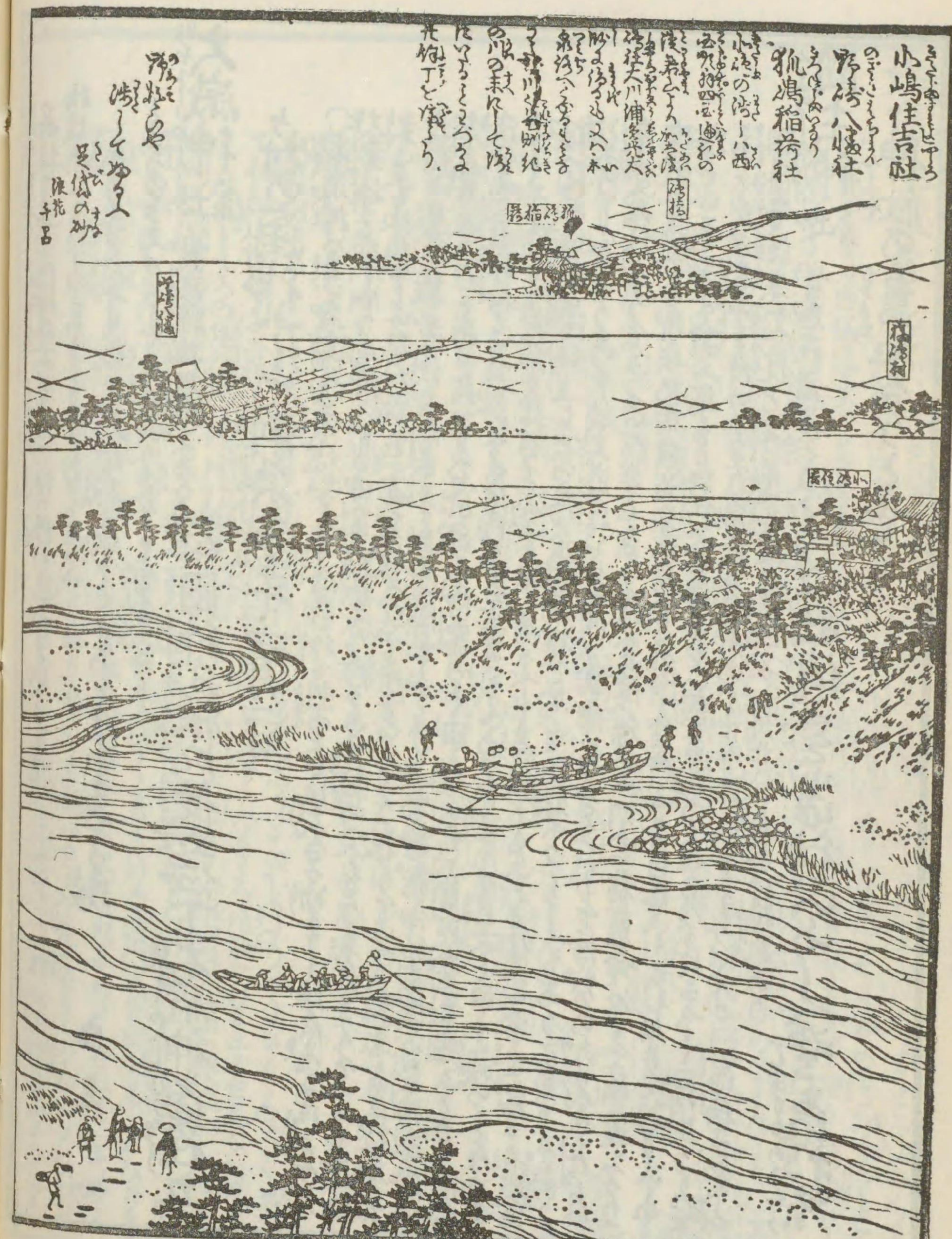
八幡宮 野崎村にあり 一村の産神にして 例祭毎年九月十五日

稲荷大明神 狐嶋村にあり 祭る神二座 倉稲魂命 ○本社名帳に従四位上勝手神とあるはこれなり 例祭

松江 祭毎歳九月十六日

東松江 中松江 西松江あり 紀の川の湊口より西の方なる松原の地にて 旧名これ松江と和田浦ともいふ○紀の川の末 和田浦にそゝぎ 其一枝流れて松江に入り 海に入る 其より東は水の下に入りて 海に入る 其一派は南の方 磯の浦の浜より海に入る また その東を小の浦といふ 上は紀の川より分れて 西の方へながれ 海に入るを松江といひ 又江より東なるをいふ

夫此地の風色たるや小なる勝景なる有ど景を含く金剛の色を醸し南は渺々なる蒼海目を浮べて琉璃の光を磨ら松江も松の常盤なる冬の日紅の霜さき白濱磨渺の鮮明なる夏の雪ともいふべし千紀の都城の雲外に聳へ二子の島渚波隠に浮むまく水天の際まる限を



なに河七の二國二刷の翠従れ雑ゞ舟常れ維ゞる
陵が翁もつゑ雪さゝゞ月
ひろくくれ松多の義に跡とゝめ濱よりてあら具乃
なきうらまで風流佐よのこゝろ
名産沙利貝
○鱸
一寄匹
○松露
○鳥貝
壬生百首
紀の海や春のゆふ立ふくけさ
沖津白波 雅大納言
南海

松江見事
鳴嶋山寺 雅
客過石 翁
暁
茶畔 侵雨橋 石枕 藤清 眠 烏 吾拮撰 よ。
ホ子潅渚田二
暗村 牧 猟浦 ミ舟。

和田十軒

慶善光寺

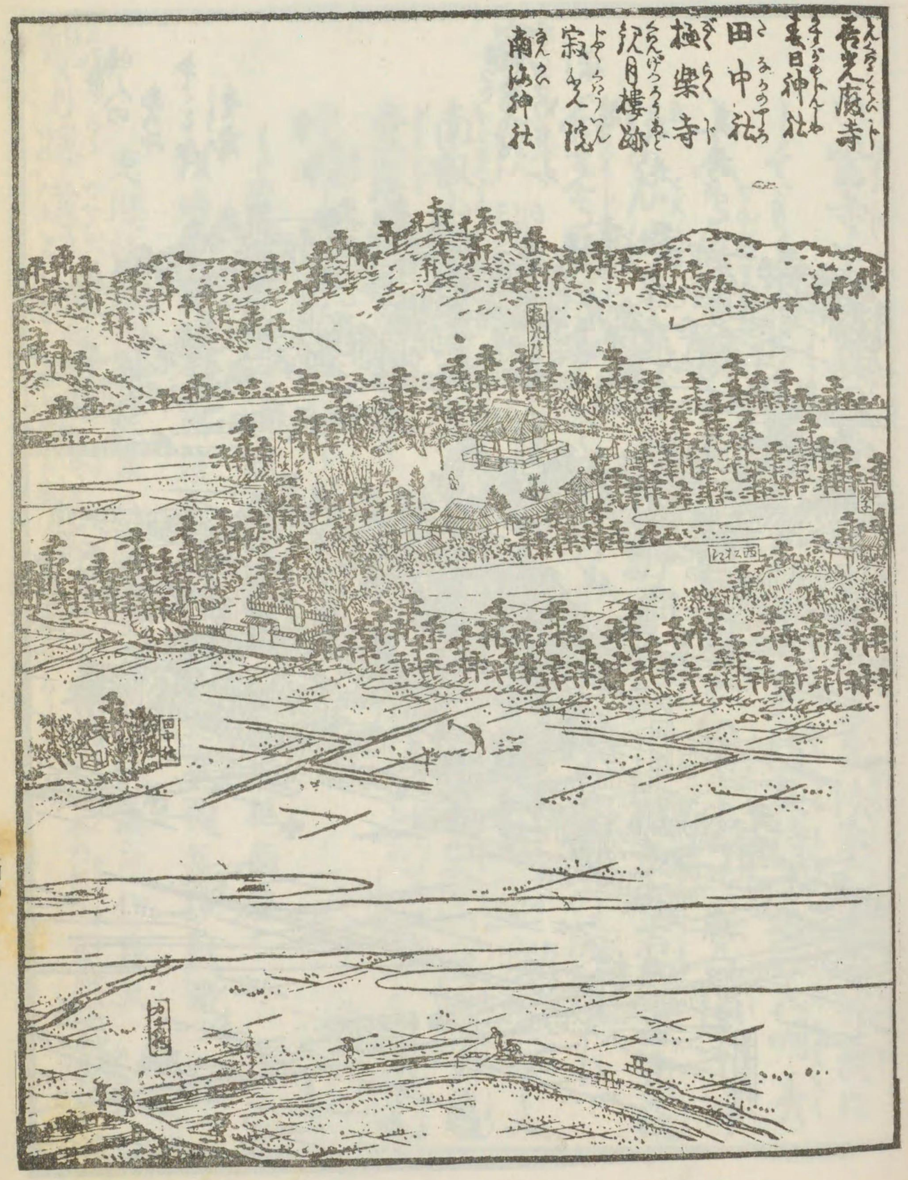
揚柳山観通寺

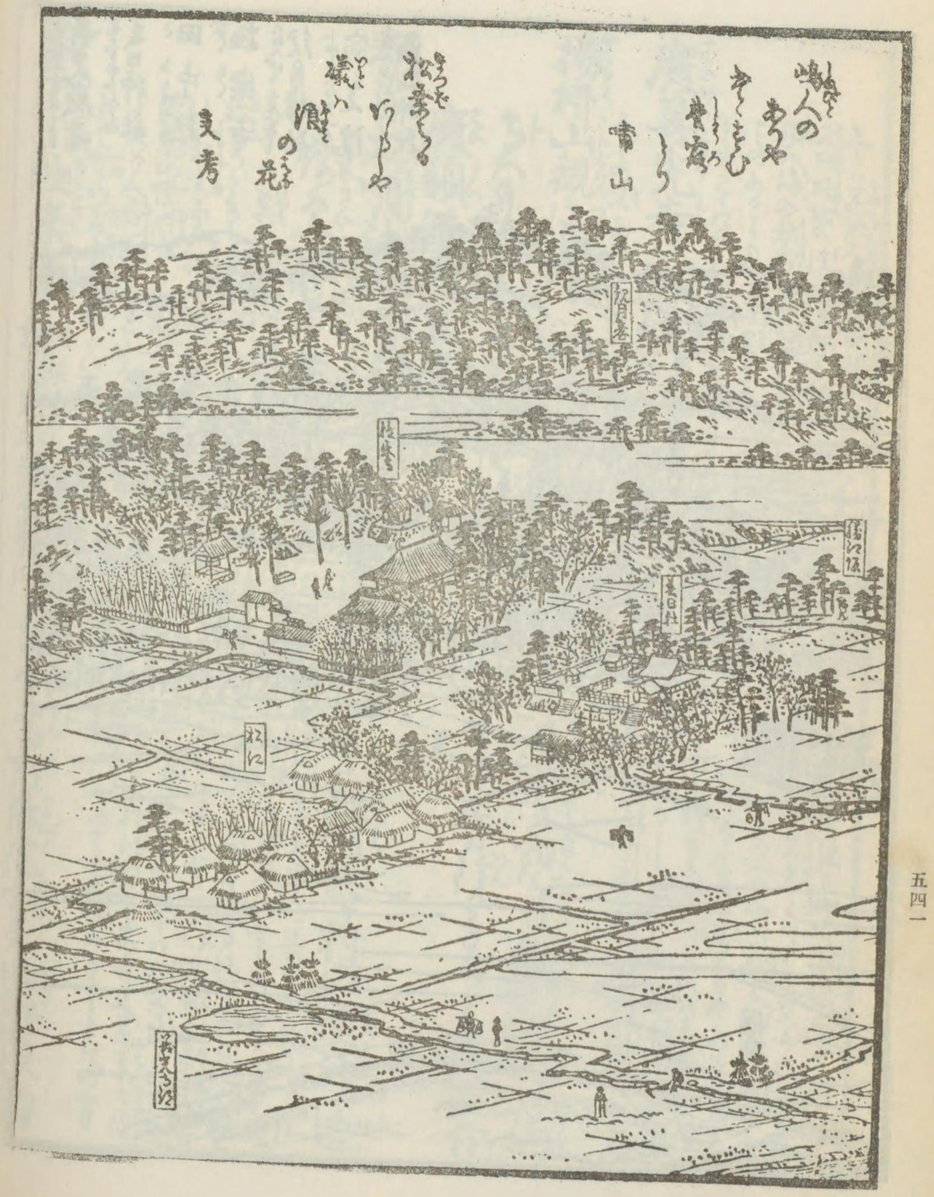
慶福院宝塔

春日大明神

松ヶ谷村の産神也

慈雲山極楽寺





○當寺い申良真圀寺湊燈圀師の述求湊宅わるの冥墓れ
しそりくん禎宗の法剃ろうしぐ立つ後如持るの冥ん明秀
上人もんぶもんぐ会のこんくんの門氏安にまひくよう一圀ん編素帰
依のんぶうぐ長二七年湊剛の徒描氏明石郡魚角荘
西えそ教漠上人もつにまく中真一ぶそふ流の民種ち
寂えんぐん院 日村の西ぬぐん 大石寺
南敷山大日寺の別ぐうぐんしぐ 本そ 尚元へ古しへ
堂廣の家士何ぶうぐんしぐ延二年五月勿が洋城を藤
ぐんしぐそ中真の祝えん

松江禅菴採題賦得僧家月　　祖南海

銀蟾澄寶地玉露浸金田彩射老光直輪筆禅影圓

更深柱子落境寂木魚懸識向秋懐暁亜空行屋天
観月摟遺跡　日村海ぐんの号ぬぐんぶうぐんしぐ中古廃しぐ名そ

己の海や浪よりかへし浦風も

南海神社　石松村にあり　参る神名帳には従四位上海神と
例幣毎歳十一月十二日　遣日像のりの公使
萬福寺　門村より北の方にあり　黄檗寺に属れ

尚寺つらつらい真言宗なりとも中古慶長の頃伽記を失ひとれば
草創の年歴洋なりけれど堂ある古塔一株あり村老四方へ伽伏て
まき牛のごくれて千載の歴めくんな名ねとそそろ

八幡宮　本照村　一座相殿なり

十五日○　一村の産神にて例祭毎年八月

名物糸切餅

をうみて出るより風味のよもやまの話
嫁入の手にいつくしう餅

礒の浦　白多舎

浦舟の帰れば月の那

玉藻

海神手纏持在玉故名浦廻潜為蛸

月

磯を浦爾来依白浪文勝者雄雨絶多倍　一盃　名

二月九日こと浦中巨清磨ありの宅集行

十そ中

月

磯の浦よりはるかに望むれば

霞立

ちらくと波の浦波　さへ

玉藻

あまた日い沖洋塩風のとうふくる

支木

おもて　つ波のうつそれ家をしいれをあるめく絶

月

波うつれ波のもものあのうつそ

月

その浦よりはるかに小ふねの

枕木

即ちもものうちやかりやかの浦よりはるかに

一夜妹の浦人さへ

玉根

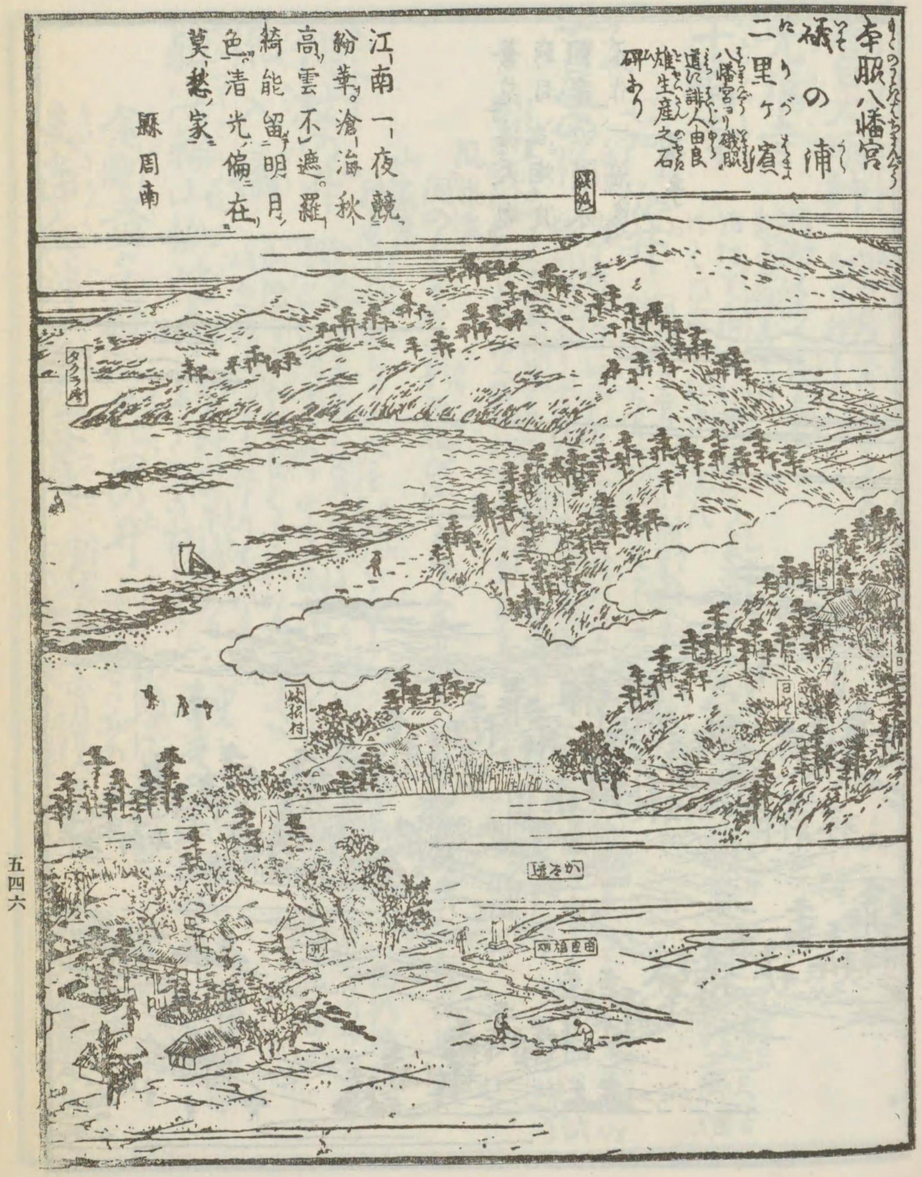
めるいまも波を枕にしてし

自ら

即ちもものよりかへし服

糸切餅屋

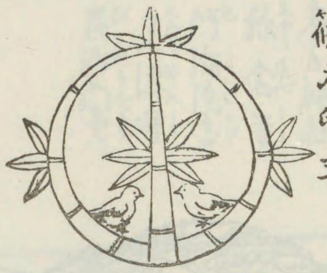
くるくも
まさ
ふも
なよりて
糸切餅
の
いとゑん
賛
祝
志友

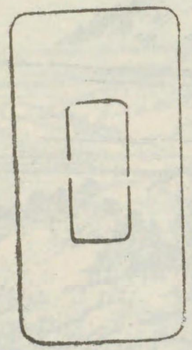


春日大明神　日吉村にあり此ところの
光福寺　旧村にあり浄土宗
十輪寺　日吉村にあり浄土宗
○阿弥井　日吉村にあり浄土宗
古屋の泊　日吉村にあり浄土宗
○幸ある地蔵菩薩　文政七年八月廿
日吉村にあり浄土宗
春日の社にぞくする小社なり
凡雑集
洞のごとくやの釣の枝びとうろ
山家集
神垣月村あらくやにをし川いろ
楊枝の井　不来方村にあり
八橋　かき村にあり
轉法輪山弥陀寺　浄土宗
金剛童子社　○花立の井
文政十二年三月廿八日勅願
の御墓はて

人皇二十代醍醐天皇の勅願によりて七堂伽藍を御創建
ましくけるに尊き夫場あり往古の大門の礎へ堂塔の柱礎
霊樓井楼建ちならび僧坊甍をならべ実に結構荘厳の
もざまなる天竺の五山も是程にはあらじと諸人感歎
御代くのぼり給ひ頼朝卿にも毎年二月廿三日の経会の
ように集り来りて友ヶ島をもなくばし宝祚延長天下安全の
ため崇敬ありこそ聖護院宮三宝院門主南山御経
の御ふみ聖護院より御寄附ありて曼荼羅供をとりおこなひ
行法結願の夜に至りて普賢大菩薩御来影丸の文
字ありありと現じ給ふ（行實神変大菩薩御来影丸の文
字ありありと現じ給ふ）○友ヶ嶋深蛇が王の尻
尾に悪魔と筆あしく書たるは法華経を写すの
濁れるなるべし（法華経を写すの濁法社）○行者も
又母公形

篠丸卯文



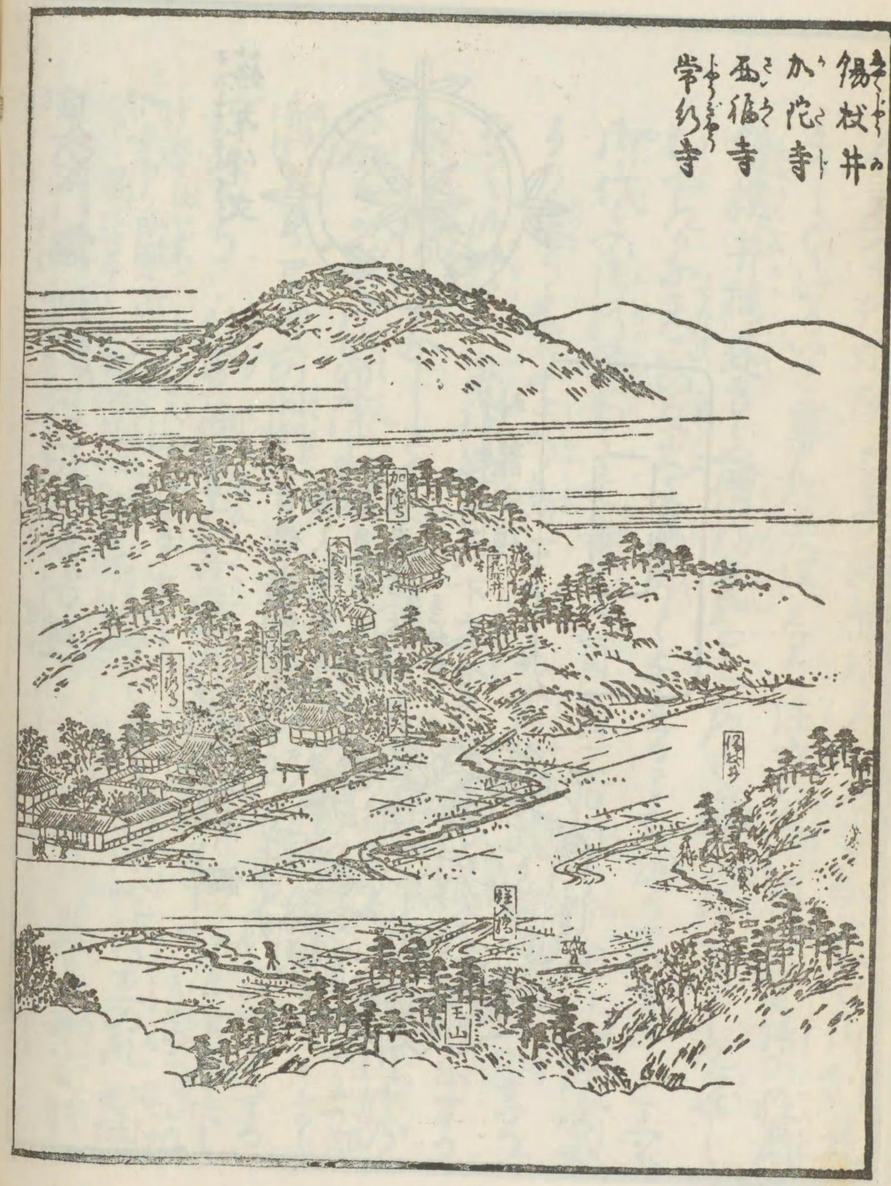


古鏡幾人照到今
不見古人面
唯見古人心
玉山秋儀

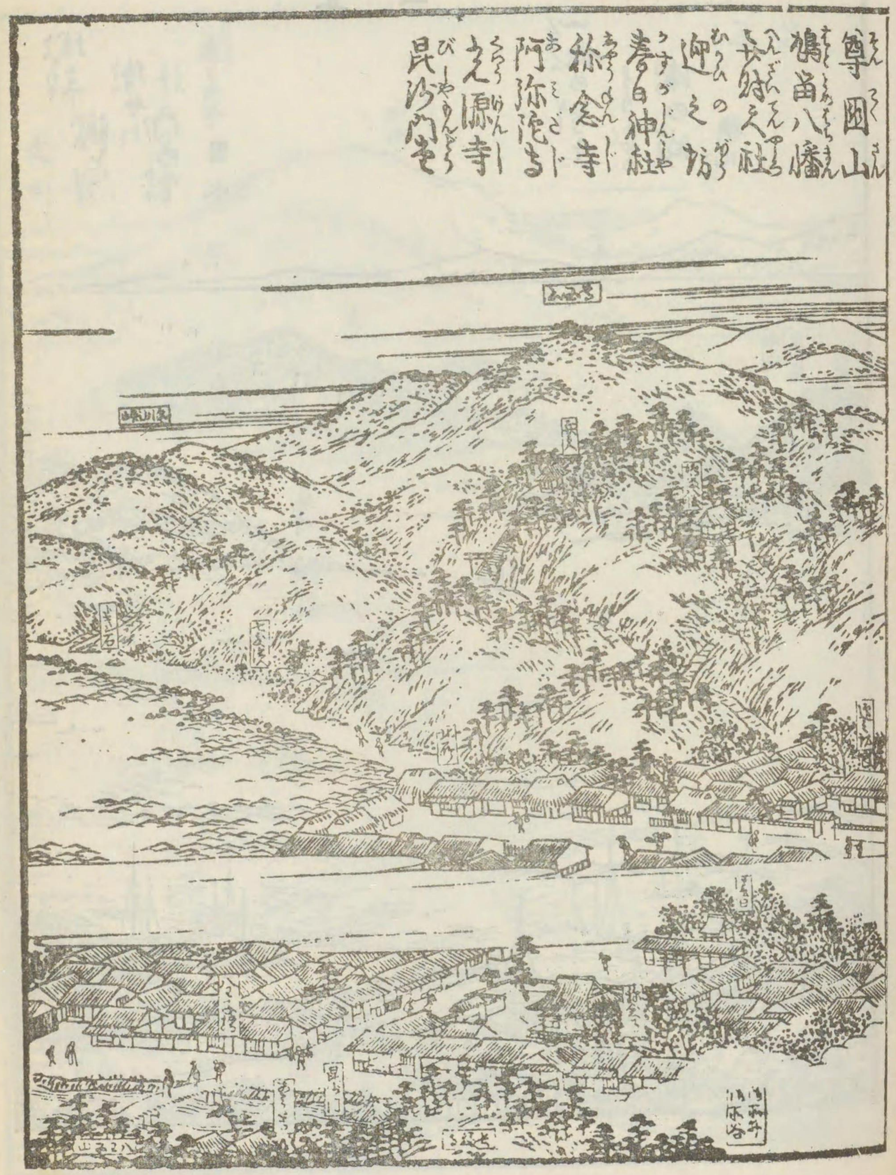
外龍の現

形見御鏡

楊枝井
加陀寺
五福寺
常行寺



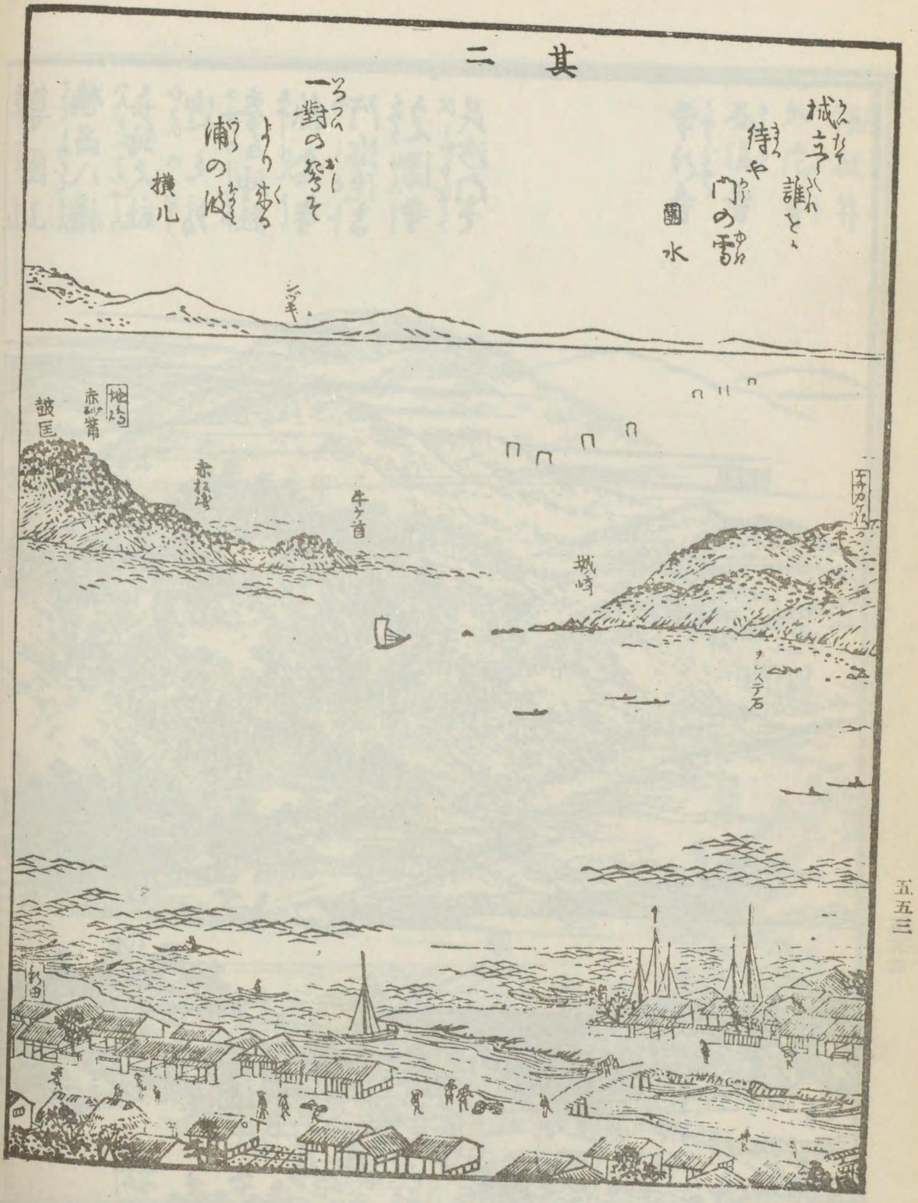
尊圀山
鳩笛八幡
天神社
迎えの坊
春日神社
称念寺
阿弥陀ま
えん源寺
民沙門そ



其二

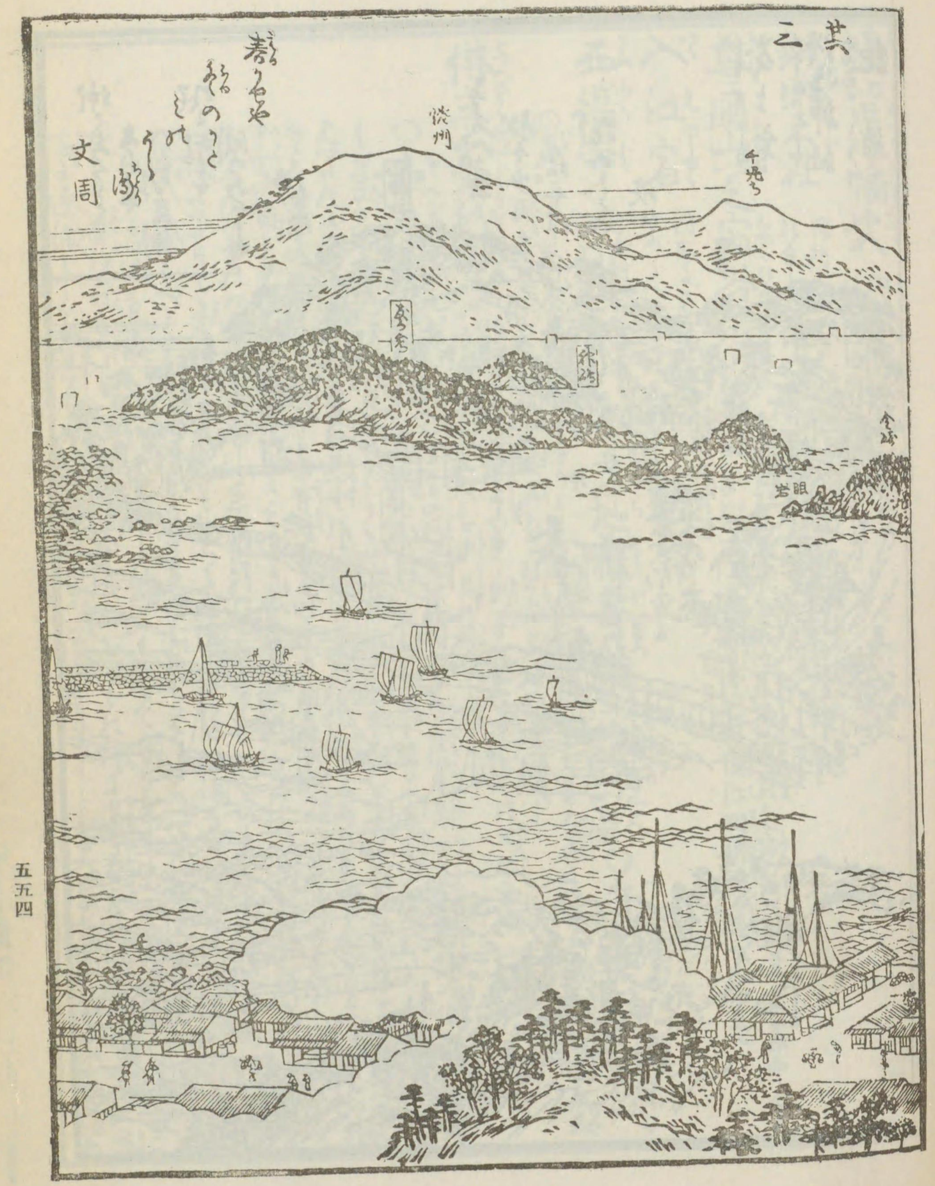
城主誰と、
侍や門の雪
圖水

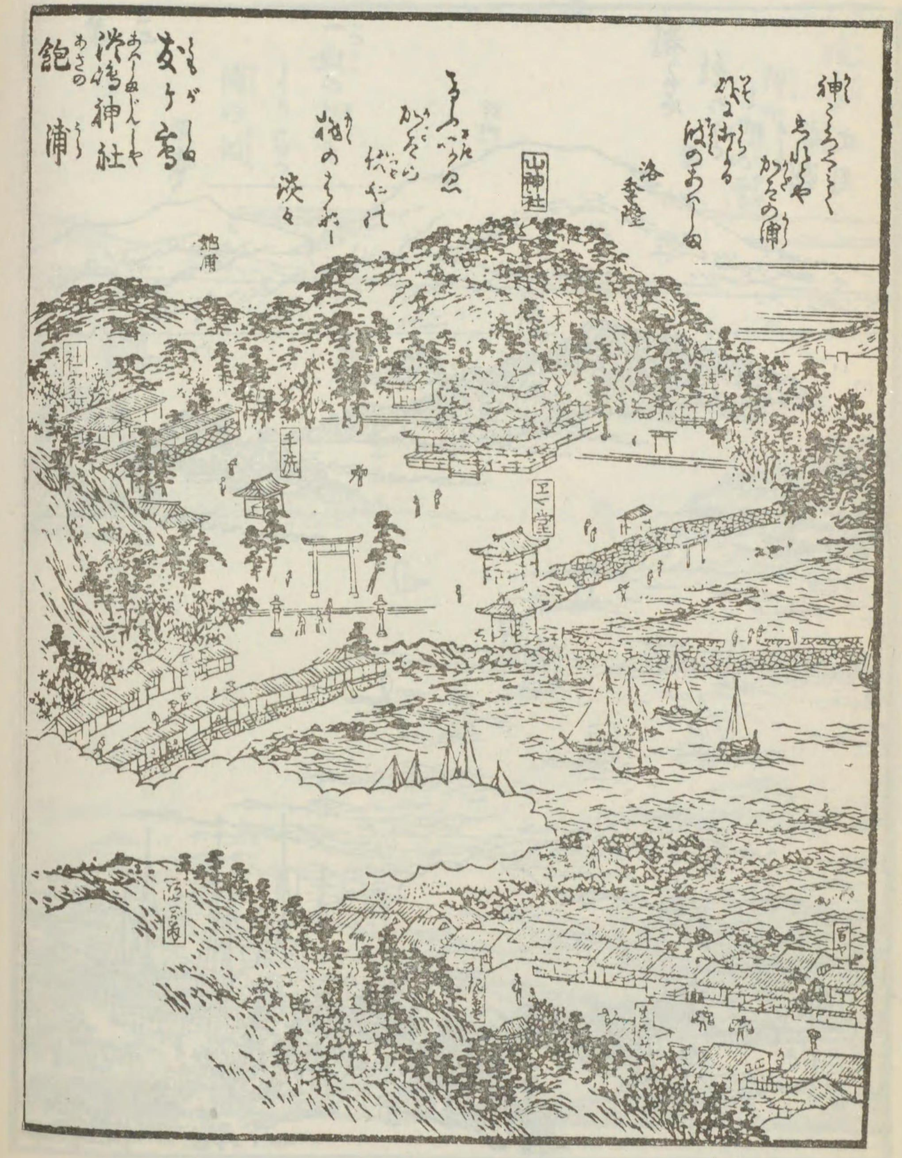
一對のなぎさ
より遠き
浦の風
機兒



其三

春の名や
秋のうと
もれ
し
嶽
丈周





鳩留八幡宮

辨財天社

日本西の海作りたにあり
鳩の形の如し

尊岡山之宿谷経塚

日本六十六ヶ国一国一塚
其内一塚なり

八江宿

西福寺

佛立山常行寺

○本尊阿弥陀佛

○弁財天社

本尊地蔵菩薩

迎之村

形見ノ浦

友そろふ千とせの浦はうた浪のよるこそ松のしらへなりけれ　永大納言為貞

月　柚ひとつ　ひかりやありて藻塩草　信常朝臣

吏本　うたゝねの　枕ひさしき浦ちどり　民戸仁右家

月　あさ霧の　浦うつせみの　恋のなぐさめ　後鳥羽院御製

指迷亦草　さまざまに　秋のかぎりの浦ふれば　定家

狂社二帖　あくまでの　かさうの浦のうろこ　源兼泰

百家琦行　塩氣立　晨夜抖薮雖在往水之過去妹之方見等曾来　柿本人麿

開　見ん　かさのりろ　梶亭老人

詠狂亦草　実朝

春日神社　歯焼の産井にて古への是よりも東

の方山も脇にあり　小石ひろふ民家の地のおこなひ　亮奎暗老

生城のあうら母地の干潟にて　勧進にて御宝前毎年四月九日